



緋弾のアリアⅡ

Aria the Scarlet Ammo

フォル・オブリージュ
狼狗に降る雪

赤松中学

【著者】



赤松中学

あかまつ・ちゅうがく

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。『アストロノト!』で第3回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の2シリーズ目となる。

【イラストレーター】

こぶいち

ゆずソフト所属の原画担当。

代表作は『ぶらばん!』『E×E』『夏空カナタ』『天神乱漫』『の一ふる☆わーくす』『DRACU-RIOT!』。

小説では『これはゾンビですか?』（富士見書房）の挿絵を担当。

趣味はゲーム、読書。

ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。

<http://tyatsune.blog87.fc2.com/>



9784840145794



1920193005806

ISBN978-4-8401-4579-4

C0193 ¥580E

定価：本体580円(税別)

メディアファクトリー

**緋弾のアリアXII** フォル・オブリージュ
狼狗に降る雪

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵——通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジ。『師団』と『眷属』の争いに身を投じたアリアとキンジ。その最中、キンジは突然、武偵高を退学になってしまう。普段から武偵を辞めたいと思っていたキンジだが、慣れない〈一般人〉としての生活に悩まされる。武偵への未練を感じるキンジ。そんなキンジの前に、かつての同級生が引き起こした新たな事件が舞い降りる——!! 大スケールアクション&ラブコメディ第12弾!!

小沢文庫

J 赤松中学の本**アストロノト! 1~3** [イラスト: bom]**緋弾のアリア** [イラスト: こぶいち]**緋弾のアリアII 燃える銀火**

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアIII 蜂蜜色の翼

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアIV 墮ちた緋弾

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアV 序曲の終止線

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアVI 絶対半径2051

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアVII 火と風の円舞

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアVIII 螺旋の天空樹

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアIX 蒼き閃光

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアX 禁忌の双極

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアXI Gの血族

[イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアXII 狼狗に降る雪

[イラスト: こぶいち]

赤松中学



緋弾のアリアII

Aria the Scarlet Ammo

フォル・オブリージュ
狼狗に降る雪

緋弾のアリアII

赤松中学

MF文庫
J

あ-05-15



9784840145794



1920193005806

ISBN978-4-8401-4579-4
C0193 ¥580E

定価：本体580円(税別)
メディアファクトリー

MEDIA
FACTORY

緋弾のアリアII フォル・オブリージュ 狼狗に降る雪

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵——通称「武偵」を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジ。【師団】と【眷属】の争いに身を投じたアリアとキンジ。その最中、キンジは突然、武偵高を退学になってしまう。普段から武偵を辞めたいと思っていたキンジだが、慣れない〈一般人〉としての生活に悩まされる。武偵への末練を感じるキンジ。そんなキンジの前に、かつての同級生が引き起こした新たな事件が舞い降りる——!! 大スケールアクション&ラブコメディ第12弾!!

こぶいち先生描き下ろしグッズが当たる!
『緋弾のアリア』シリーズ
4冊同時刊行
キャンペーン
開催!!

MF文庫J
10周年記念
夏の学園祭
SUMMER SCHOOL
FESTIVAL

夏の学園祭キャンペーン開催中! 詳しくは裏表へ

MF文庫J
10周年記念

夏の学園祭

ヤマブー!

580

3冊
買って

イベントステージ
観覧チケットをゲット!

※チケットはステージ観覧にのみ必要になります。イベント自体は無料でご参加いただけます。
「夏の学園祭キャンペーン」席についている応募券を3枚集めて応募いただいた方の中から、抽選で7月29日開催のイベント「MF文庫J 10周年記念 夏の学園祭」のステージ観覧席が当たります! 下記のステージの中からご覧になりたいステージを1つお選びください!

- アニメ「僕は友達が少ない」
- ゲーム「この部屋は雑宅じゃない部が占拠しました。」
- アニメ「この中に1人、妹がいる!」
- ラジオ「MF文庫Jラジオあらいぶ!」公開録音
- アニメ「お兄ちゃんだけじゃ愛さねば愛せないわっ!」

※記入漏れや間違い、応募がない等の不備があった場合は、応募が無効となりますのでご注意ください。 ※お預かりする個人情報、チケットの発送以外には使用いたしません。 ※当選者の発表はチケットの発送をもって代えてさせていただきます。 ※チケットの発送は国内に限ります。ご了承下さい。

応募方法は折り返しをご覧ください。

緋弾の アリア

Aria the Scarlet Ammo

フォル・オブリージュ
狼狗に降る雪

赤松中学



P11^{1弾} ライク・ヴァニツシユ
消え去るように

P36^{2弾} 一般人・キンジ

P77^{3弾} 望月萌

P121^{4弾} 鏡高菊代

P174^{5弾} 悟リノ空



Contents



鏡高菊代

Kiyoko Kikumizu

キズコの旧友。
元武偵で現在はある組織の
トップに君臨している。

望月萌

Moe Moriduki

キズコの転校先のクラスメイト。
何の能力も持たない普通の女の子。



緋弾のアリアⅫ

フォル・オブリージュ
狼狗に降る雪

赤松中学

MF文庫 

口絵・本文イラスト ● ことぶいち

1弾

消え去るように

アンブツシュ
不意打ちを食らった気分だぜ。

『重要連絡』と言われて、高天原先生に連れてこられた校長室で……

校長から直々に、処分を言い渡された。

——退学。

た、たしかに重要連絡だったな。こいつは。

武偵高では教員への『聞き返し』は制限されているが、

「退学……ですか？」

つい、俺は声に出してしまった。

横でこつちを見てる高天原ゆとり・蘭豹の両教諭、そして俺と共に退学を言い渡された

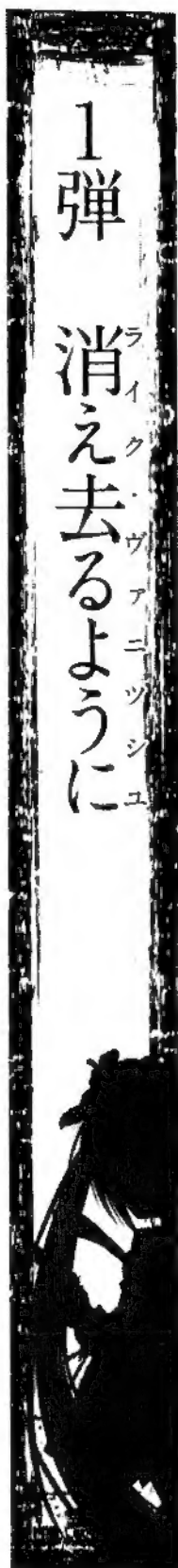
レキは無言のままだ。

緑松校長は機械的に頷いて、

「はい、はい。ただこれは君たちが問題行動を起こしたせいではありませんので、そこは

誤解の無いように」

人の記憶に残らない無個性な声で、そう言った。



「君たちは転出申請を2回提出しています。1回目は記載不備きざいとして不受理にしましたが、不備などありませんでした。実はあれは慣習のようなものでしてね。何者かによる偽造ぎぞうを疑ったのと、再提出までに気が変わる事を望んだんです」

確かに、俺おれは転出申請を再提出させられている。

だが……あれが教務科マスターズの工作だった事なんかより、驚くべきは——
レキも転出を申請していた、という事だ。

「レキ、お前……」

俺がチラ見すると、隣で突っ立っていたレキはこっちに振り向き、

「キンジさん。前にも申し上げた通り、私は、あなたのものです。ウルスの忠誠は、永遠とわ。私はキンジさんがどこに行っても共に在りあ、共に滅びる者です」

校長の前でもお構いなしで、レキ語を喋しゃべってくれてしまう。

それを曲解した高天原たかまがはらが「まあ」と赤くなり、蘭豹らんびょうも片眉かたまゆを上げているが……

そういえば過去、レキはそんな事を言っていたような気もする。

要は、ついてくるって事かよ。お前、俺に。学校やめてまで。

「——武偵高ぶていこうから一般校への転校は、至難しなんの業わざなんです」

レキにはノーリアクションで、緑松校長みどりまつが言う。

「本来は、3月末で一斉に転出させるべきなのですが……そうすると、転入先の学校から

都教委とぎよういにタレ込みが殺到さつとうするんですよ。武偵高出身の生徒は学力が低く、社会性とほに乏しく、転校先からの退学率も高いとか。それで一時は閉校の危機にも陥おちいりました。教育界では、武偵高はまだ正しい理解を得られていないんです」

いや……まあ、正しい理解だよなそれは。

うちの生徒は変わり者だらけだし。

「従って、転校は一定期間ごとに少人数ずつ、密ひそかに実施するようになったのです。でもそうになると今度は、4月の武装登録の更新期前に生徒が出ていく事になります。武装してしようというまいと、それを許可されている生徒というだけで……厭いやがられるんですよ。なので武偵高からの転出者と分かると、まず入学を認められません」

まるで……差別だな。

一応、他ほかの学校の気持ちも分からなくはないが。

「ところが——個人情報保護法8条もとに基づいた、ありがたい文科省告示もんかしようがありましたね。転入はダメですが、編入の場合……つまり一度退学した生徒については『どの高校から来たか』を知らせる義務がなくなるんです。ちよつと予算をかけた、校長同士での内々のやり取りは行いますけどね。道義上」

つまり法律を盾に、よその学校へ俺たちを金で押しつけるってワケか。

だが、そうでもないかと武偵高生が転校できないという話も理解できた。俺の認識不足

だったよ、その点は。

——そこで少し唐突に、みどりまつ緑松校長が横を向いた。

「ところで……たかまがはら高天原先生、らん蘭先生。としまく豊島区に、ひがしいけぶくろこうこう東池袋高校といういい学校があるそうです
すね」

「はい」

「はい」

「……さて。いま少し話が逸れましたが、話を戻します」

改めてこっちを向いた校長は――

もう、その学校と話をつけてあるんだろうな。

あくまで武偵高とは無関係なその学校へ、自主的に行け、と、彼はいま命令したのだ。
おれ俺と、レキに。

その時いきなり、

「――てつかい撤回してください」

緑松校長と同じぐらい機械的に、レキが言い放った。

「キンジさんが提出したのは転出申請です。退学ではなく、キンジさんの希望通りに転出として下さい。また、時期も異なります。今月末ではなく、キンジさんの希望通りに来年3月末として下さい」

おい、レキ……！ お前、今の話を聞いてなかったのかよつ。

ていうか、キンジさんのキンジさんのつて。

なんで俺のことなんかで、教師に反抗するんだ。いや、もちろんレキの話は正論だが、ここは武偵高。しかもその教務科マスタースときてる。正論が通じる場所じゃないんだぞ。

「——レキいッ！ ガキの分際で教務科マスタースで意見たア、いい度胸やなッ！」

さっそく、暴論代表の蘭豹らんびょうがでかいポニーテールを振って大声を上げた。

「レキさん。転校する子はみんな、いったん退学してから再受験なのよ」

高天原も、優しい口調でレキを諫めるが——

「それは全て学校側すべの問題です。キンジさんには関係ない」

レキは突つ立たって微動びどうだにしないまま……ピリッ……と……

殺気を、放ち始めた……！

俺の希望が通らなかったというだけで、き、教員たちと戦やるつもりなのか。レキは。慌てる俺の横で、蘭豹の殺気が大きくなり——高天原も、妙な空気を流し始める。

（ま、マズい……！）

これは、もう——ヘタに動いたら、いきなり始はじまりまりりかねないッ——

俺は戦闘前の習慣で、室内の戦力を分析する。

こっちは引率いんそつの蘭豹に言われたのか狙撃銃ドラッグノフを持ってないレキと、ヒステリアモードでも

何でもない俺。おれ

まず、蘭豹らんびょう1人にも勝てないだろう。

蘭豹はアリアを片手で制するバケモノだし、強襲科アサルトで俺の戦い方をよく見知っている。

高天原たかまがはらが戦う姿を見た事はないが、あ、あの気配も……大きい……危険だ……！

というか蘭豹・綴つづりの阿形咩形あぎようんぎようとルームシェアして暮らしてるのに日々ケガ1つしてない時点で、ただの人間じゃないんだ。彼女も。

だが――

一番ヤバイのは、緑松武尊みどりまつたける、校長……！

（あ、ありえんぞ……こんなのッ……）

俺は、今までにないその感覚に血相けつそうを変えてしまう。

周囲が殺気を大きくしてるのに、

「はは。いけないなあ」

と笑った校長の殺気、いや、気配が……消えていく……!?

いや、違う。気配が、分からなくなっていく。どんどん。

『消えた』のなら、まだ対処のしようもある。全方位を警戒すればいいのだから。だが、

『分からない』となると、意識が右往左往うおうさおうし、こっちが隙すきだらけになる。

というか、彼は今そこにいるのか？ いないのか？ それすらもう、分からねえ……！

た、戦いたくない。

いや、戦う事すらできないぞ。これじゃあ。たとえヒステリアモードでも。見れば蘭豹と高天原も、校長の変化に焦^{あせ}っている。

2人はレキに安っぽく怒ったんじゃない。

校長が本気を出し、俺とレキを手にかけないようにしてるんだ……！！

（——ど、どうすりゃいいんだよ！）

レキがピクリとでも動いたり、向こうが仕掛けてきて——

もし火蓋^{ひふた}が切られたら、五体満足で校長室から出られない。いや、命すら危ういぞ。

武偵^{ぶてい}は非殺^{ふてい}を義務づけられている。だが、バレなければどうということはない。

ここは教務科^{マスタース}だし、うちの教員たちは警察のあらしい方も上手^{うま}い。生徒の1人や2人、

殺してから事故死した事にしても何とも思われない。そういうウワサだつてある。

次の瞬間、室内にレキ・蘭豹・高天原の殺気が行き渡ってしまったので——

俺はイチかバチか、

「——やめろレキ！」

大声で叫んだ。

こういう時は普通、まずアクションした俺がハチの巣にされるものだが……

「……っ……」

こ、来ない。弾たまも刃やいばも。

そして、俺おれの命令は聞くレキが……スイッチを切ったように素に戻り、それに呼応して蘭豹らんびょうと高天原たかまがはらも殺気を収めてくれた。

よ、よかったぜ……運うんが。

俺は『先生が生徒を殺さない』という常識が機能する事に賭かけて、動いた。

そして、先生たちは……この場は、見逃してくれた。俺たちを。

つまり蘭豹の言う通りガキの俺たちが、教師に甘えた形になったってワケだ。

「す、すみませんでした。仰あつる手順しやに従したがって、退学します。レキ、お前もいいな」

俺が言うと、レキは……こくり。頷うなずいてくれた。

これでいつものレキに戻った、と考えるところだが――

その通常レキが、少し、以前と違ってきている事に気づかされたな。今のは。

今の緊張状態は、明らかにレキのミスが招いたものだ。

レキが割と猪突猛進ちよとつもうしんタイプなのは知っていたが、コイツは今、俺にすらできるこの場の状況判断を放棄してた。

レキ。お前の攻撃力は確かに高い。だが、実戦は単純な力と力の比べっこじゃないんだ。それはお前が俺に教えてくれた事じゃないか。なのになんで、うちの教師どもを前に熱くなってるんだよ。俺の意見が通らなかったぐらいで。お前の取り柄は冷静さだったろうが。

ていうか……

ついてきちゃうのか、これ。転校先に。

と、深く溜息ためいきをついた俺には……

「いけないなあ、私も。大きなダイヤの原石を見ると……つい、割ってみたくなる」
などと言いながら、こちら素に戻った緑松校長みどりまつがいる事が改めて分かった。

俺と目が合った緑松は、

「——もうちよつと早く止めろよ。お前の女だろ」

と、餞別せんべつのつもりか5秒だけ本性を俺に見せてから、

「さて、何か質問はありますか？」

日本人なら誰だれでも見せる、何を考えてるのかよく分からない笑顔に戻った。

質問です……なんで学校の先生なんかやってんですか、アンタ。

その後、淡々と告げられた命令によると――

- ・ 犯罪者からの報復に備え、退学後すぐの武偵免許返納・武装解除は非推奨とする。
マスタース
 - ・ 教務科から長期の特秘任務シールドクエストを受けた事とし、退学の事実は学内にも秘匿ひとくすること。
 - ・ 身辺整理をし、消え去るように、いなくなることに。
- とのことだった。

どうりで、たまに長期任務に行ったきり帰ってこない生徒がいたわけだ。年単位の仕事になったとか、海外でそのまま就職してしまったとか、憶測はされてたが……彼らも退学・転校してたんだな。きつと。

月末まではもう数日しかないので――

俺はさりげなく風魔に雑務の引継ぎをし、昔からせがまれていたGT2000の模型を武藤に譲り、平賀さんにツケてもらっていた金を清算するなど、身辺整理を急いだ。

だが見たところ、レキは何もしていないようだ。なので、さすがにバスカービルの面々に『特秘任務へ行く』旨を伝えるのには同伴させる。

で、11月29日――武偵高で過ごす最後の日曜日、夕方。

まず一番あれこれしつくく聞いてきそうな理子のいる、第2女子寮に向かい――かつてアリアに化けた理子に騙されて入った事のある、本来3人部屋の1011号室を

開けると……うつ……なんだこれ？

女ぐさい上に、異臭がするぞ。ちよつと揮発系の。

靴の多い玄関先で「来月から特秘で校外になった」と軽く説明した俺を、

「キーくんとレキュで任務うー？ 1年の頃の黄金コンビ復活だねえー」

などと言いながら奥に入れてくれた理子も、ちよつと汚れた手にラバーテープを持って

フラフラしてるし。何やってんだ。化学兵器でも密造みつぞうしてんのか。

と、人けのある部屋の様子を査察ささつすると……

(……?)

中には机が3つ並んでいて、その2つにジャンヌと……小柄で黒髪ロングの、暗そうな、見慣れない女子がついていた。で、黙々と何か描いてる。

あれは……ああ、マンガの原稿か。初めて見たな。

室内に充滿するこのニオイは、修正液とかカラー原稿に使う塗料とりようのだったらしい。

「何やってんだ、お前ら」

参考資料の散乱した室内でソファアに座ると、俺の膝ひざの上に理子がバツタリ倒れてきた。

「アシだよー。あうー……冬が近いんだよー……」

「冬って、冬は今だろ。ほら、借りてたゲーム返すから。足アシどけろ」

あちこち柔らかい理子が乗っかってきたので押しのけるが、理子は元気がない。

ソファアの方へ、ウンケルを銀の皿に載のせた影ヒルダがキッチンからズルズルやってきてる。

「と……遠山とおやまっ！」

バツ！ と、机からなぜか涙目のジャンヌが振り向いてきた。

いまさら俺に気づいたらしい。

すぐく集中力があるんだな。マンガ描くのって。

「助けてくれ、理子も桃子も私に絵を任せてくれないのだっ。人物どころか背景もだッ！
ワク線とベタ塗りだけは、もうイヤだ……！ おお、神よ……！」

理子同様疲れ果てているらしく、やってきたジャンヌも悲劇のヒロインみたいな動きで
ソファーにしなだれかかっていた。

「——2人とも。2徹ぐらいでだらしないわよ」

デスクから、制服を着た日本人形みたいな女子が理子とジャンヌに語りかけてる。

可愛い子だが……その無表情な目は、原稿に向かったままだ。こっちを見すらしない。

左手にだけ——手袋をしているな。

リボンで可憐にカモフラージュしてるが、直感的に何か凶々しいものを感じる手だ。

「誰だよあいつ」

俺が小声でジャンヌに訊くと、

「元イ・ウー研鑽派の同期だ。『魔宮の蠍』と呼ばれる、猛毒使いだ」

「ちよっ……！」

「案ずるな。今は友人というか先生だ。彼女はマンガが上手い。これを頒布すれば意外と
いい軍資金集めになる。そうだ、お前も売り子をやれ。西館にフォロー・ミーだ」

などと、今後も俺が武偵高にいる前提で言われて……

逆に、俺は改めて自分が転校するんだという事を実感し始める。



これから俺は、滅多に会えなくなるかもしれないのだ。武偵高のみんなと。

「いや、悪いが俺とレキは特秘任務に……」

それはそうと、とりあえずこれ以上イ・ウー出身の危険人物なんかとは知り合いになりたくない。ので、ニシカンとやらを断る言い訳にそう切り出すと……

「特秘って、ぬいぬいのもそれー？」

大きなふたえのお目々を向けて、理子が聞いてきた。

不知火……？

「いや、違う。別件だ」

言葉少なに、答えておく。

まあ、不知火は何か普通に本物の任務を受けたんだろう。

アイツは強襲科の優等生だしな。

ヘトヘトでも窓から投げキッスで俺を見送った理子の愛らしさに、つい苦笑いしていると……クイツ、と、無言のレキに袖を引っ張られて急かされた。

そうして向かった、第1女子寮前の温室では――

「ご指名おめでとうございます！ お仕事、頑張ってきてくださいね！ キンちゃん！」
と、任務の話を聞いた白雪が、奥さん気取りで俺のネクタイを直してくれた。

園芸部長でもある白雪は遣い魔とやらに蝶を使う都合もあつてか、お花に水やりをしていたらしく……背にした椿が、よく似合ってる。

セーラー服でも、大和撫子には日本の花が合うんだな。

というか間近に見て思うが、やっぱり……美人だよな。何度見ても、いつ見ても。人格的にも、いい子だし。おおむね。

「……」

俺は黙ったまま、数瞬、白雪を間近に見つめてしまう。

幼なじみの白雪には女子の話（話すとなぜか正気を失うので）とヒステリアモードの話以外、あまり隠し事をした覚えがないから……ちよつと、うしろめたい。命令とはいえ、本当の事を言えないんだからな。

だが今生の別れってワケじゃない。許せ。

学校は変わるが、何かあつたらすぐ駆けつけるから。武偵免許もしばらく残るしな。などと心の中で思いつつ、白雪のおっとりした目を見つめていると――

「……キンちゃあん……」

粉砂糖をまぶしたイチゴ大福みたいに甘い声で俺を呼ぶ白雪も、ぱつっん前髪の下から見つめ返してくる。

そして白雪は照れたように微笑して、ちよつとナナメ下を向いてから……くるり。

俺たちをシラケた目で見てたレキに振り向き、『見たかこの絆を！』というような顔でガンを飛ばしてるぞ。

——ばちばちつ。

白雪とレキの視線の中間に、火花がスパークしたような錯覚がした後……
改めてこつちを向いた白雪は、晴れやかな笑顔になってる。

今の謎の視殺戦は『そもそも私の勝ち』という事になったらしい。白雪の中では。

「おメカケさんは2人までですよ。武士の情けで妹さんは数に含みません」

ニコニコ語られた『バナナはおやつに入りません』的発言の主旨は分らんが……

かなめに対しては、今やかなり好意的なんだよな。白雪は。気が合うというか、性格が似てるらしい。アリアは「同病相憐れむってやつでしょ」とか言ってたが。

ていうか……白雪。半年ぐらい前、お前——言ってたな。あの人工なぎさで。

『キンちゃんは、今いる場所からいなくなる』って。

当たったのかもな。お前の、あの占い。

夜、4月にチャリを爆破された時、アリアと突っ込んだ桜の木——今は、花も葉も無い——の横を通り、二又路にあるカフェ・ヴィルドシュートに入る。

ここは女子御用達の喫茶店なので、俺は敬遠してたんだが……アリアは、ここらしい。



というか、すぐ見つけた。とても見つけやすいピンク頭が、誰かと話してる。

レキと2人でテーブルの横に立つと、

「あつ、遠山キンジ…先輩」

やった。間宮がいる。

アリアと話していたこの1年女子は、アリアが育成してる戦妹。ちなみに今の間は普段心の中で呼び捨てにしているであろう表れだが、今日は大目に見てやろう。

というのも俺を、

「で、いつ帰り？」

などと特秘の件を理子あたりから聞いてたらしい発言で出迎えた、アリアは……
ぷぷつ。エスプレッソ片手に、かっこつけてるよ。俺の上司みたいなそぶりして。

アリアは、後輩の前ではもはや別人格。

『デキる女の私』を演じようとする癖がある。

普段は口より先に銃が出るヤツだが、俺の統計によれば近くに後輩がいると俺に対する発砲確率が57%、弾数も41%と大幅に減るのだ。命中率は上げてくるが。

今回は怒られる系の話題なので事前に作った『レキを弾よけに使いつつの逃走計画』は無駄になったけど、全然オツケーだ。

「期間も秘匿事項だ。ただ、長い」

この発言でやっと俺が校外任務ソトマワリに出ると分かったらしい間宮は、嬉うれしさを隠しきれない表情をしてる。だがそれも許す。レキもお前のおかげで命拾いしたワケだしな。

「別にパートナーとはいえ、あたしはあんたを束縛くわくしないわ。単位も足りないみたいだし。ただ、敵たが動いたら連絡コンロクするからね」

敵……眷属グレンナツの一味の事を言ってるんだろ。うな。

「ああ」

少なくとも3月末までは、お前と一緒に戦ってやるよ。ヤツらと。

約束、したからな。そう。

「アリア。絡指ラクシだ」

俺は、武偵ぶていが特にパートナー同士でよく行う別れの挨拶あいさつ——人差し指同士を絡める握手をアリアに求める。転校とは、別れ。その、ささやかな黙示として。

「なによそれ。難しい所に行くの？」

だが絡指は希まれに、片方が死地おもむへ赴く際にもされるので……

そうなのかと勘違いしたらしいアリアは、応じない。

「ある意味そうなんだが……行き先は安全な所だ。これは特秘前シールドの、ノリの絡指だ」

「イヤよ。不吉だわ」

「お前も俺にさせたる、絡指」

「覚えてない」

ぷい。アリアはソッポを向き、しゃら、と長い艶やかなツインテールが波打つ。

また興奮時の記憶喪失が出たかな。

「させた。夏休みの最後の日、探偵科の屋上へ行く前に……」

……やべっ！ 俺もアリアには意地を張りがちだから、言い合ってる内に——アリアが

自ら俺にキスしたトラウマを思い出すNGワード、『屋上』が出ちまいましたよ！

青くなる俺の前で、きゅうつ……赤面メーカーを上げ始めたアリアは……ぶるっ……

「お、おく……」

ぶるぶるっ……アニメ声で呟き、震えてる……！

や、ヤバいッ。これは万物を崩壊させる『大噴火パターン』。しかも噴火5秒前……！

慌てて人間の盾ことレキの方に振り向くが、い——いねえし！

ていうか既にカフェの外に出て、防弾ドアをほとんど閉じ、隙間からジーっとこっちを

見てるよ。なんというレキの危機管理能力ッ……！

「間宮！ アリアの銃を押さえろ！」

「はいッ？」

何でなのか分からないような顔をした割には素早くアリアの大腿部を押さえた間宮の前

で、俺は強引にアリアのちっこい手を取り、ぎゅ。絡指。あとは逃げの一手だ！

「——走れ！ 走れキンジ！」

レキごと吹っ飛ばす勢いで防弾扉に体当たりして店外へ出ると、ぎゃーす！ 噴火した
アリア山の空震と、間宮の悲鳴が背後からした。

挨拶一つするのにも命がけ。それが神崎・H・アリアだ。

ていうか、もつと使用頻度の低い単語でキレルシステムに仕様変更して下さいよアリア
さん……マジで！

11月末日、午後5時。

改めて教務科からの正式な通達があり、俺とレキは東京武偵高を退学した。

あとは命令通り、消え去るように、いなくなる。

俺は最後の日にも、努めて日常通りの生活をした。だが、それもこれで終わりだ。

いつしかこの武偵高での生活が日常になってしまっていたが、日常とは壊れやすい物。

こんなにも簡単に、半分は自己都合で、半分は大人の都合で、壊されてしまった。

（この校舎とも、今日でお別れか……）

そう思っで見上げた探偵科も、通りがけに見た強襲科も、妙に懐かしく感じられた。

さらば、死線を共にした級友たち。変人だらけでも、いいヤツばかりだったよ。

さようなら学食。まずい飯でもけっこう食えたぜ。

そして、立つ鳥跡を濁さずで大掃除した……第3男子寮の、俺の部屋。
急だったが、これでお別れた。あれもこれも。

冷たい海風に吹かれ、少ない荷物を手に……

学園島の北端、浮島北駅のホームに立つ。レキと、あとハイマキと共に。

実は、ここは武偵高の入試の日に俺とレキが初めて出会った場所だ。

同じ2人が、今度は出て行こうとしている。運命とは不思議なものだな。

モノレールはガラガラだったので、俺たちは4人掛けのボックス席に向かい合って座る。
狙撃銃を分解して収納したトランクを膝に乗せてるレキは……なんでだろう。ちょっと、
嬉しそうだな。

相変わらずその目に表情はほとんど無いが、いつもの虚空じゃなく、俺を見てるし。

俺は、空き地島の風力発電機を見やりつつ……

「そういうレキ。お前、名前どうするんだ。武偵高はトンチンカンだから苗字がなくても
通ったが、一般校じゃ通らんぞ」

などと話を振ると、

「遠山ではどうでしょう。妹ということだ」

「よせ。いま妹は急増してんだ。ていうか、偽名付けぐらい自主的にやれよ」

「ではキンジさんが付けてください」

「やだって言ってるんだろ」

「では矢田^{やだ}で」

やだ↓矢田……かよ。テキトーだなコイツも。

結局俺がつけた形になっちゃったが、まあ、いいや。どうでも。

「……あと、家。今日は車^{クルマ}輻^シ科^カの江戸川^{えどがわ}先生がホテルを取ってくれたが、明日からどこに住むんだ。お前」

俺は巢鴨^{すかも}の実家に帰ると話してあるが、レキから新住所の話は聞いていない。

「……」

じー。

レキは、こっちを見てくる。

まさか……うちに来るんですか矢田さん。

「……」

まあ……無言のプレッシャーに負けたワケじゃないが、それもそれでいいか。ただでさえバスカービルは戦力が分散するんだ。

これ以上バラバラになったら、イザって時に危ないからな。

モノレールから、クリスマス化粧を始めた台場に降り立つ。
武偵高に背を向け、

「行くぞ、レキ」

そう呟き、こくり。

レキが頷いた時——初雪が降り始めた。

その後、俺たちは指定された試験場……転校先の学校が提携してる予備校で、2人だけの編入試験を受けた。得点は、大したことなかったと思う。

特に、面接。我ながらしどろもどろだった。将来、就職とかできない気がしてきたな。だが「はい」「いいえ」ぐらいしか喋らないレキも面接をパスしてきたところを見るに、

2人とも校長のコネでなんとかなったんだろう。

（ある種の、武偵高なりの餞別か。これも）

と、俺は狭いホテルのシングルルームでベッドに寝そべる。

みんなとの別れは、どがちゃがになったが……

兄さんが失踪して以来、俺は武偵高を出たいと願ってきた。

その理由は月日と共に変化したが、思いは変わらなかった。それが、実現したのだ。

もう日常的に危険な仕事で負傷する事はない。その挙げ句、兄さんみたいに非難される事もない。訓練で死ぬ数パーセントに自分が入る日が来ないよう祈る必要もない。

(一般の、高校……)

それはどんな所だろう。楽しみだ。

俺は小学校以来、普通の学校というところに通ってこなかった。高1の時に潜入捜査でおジャマした学校も、やたら高貴なエリート校だったしな。

とはいえ、ニュースのドキュメンタリーやドラマ、甲子園野球とかで垣間見た事はある。一般校というものを。

そこは本当に……夢みたいに楽しそうなところ。希望に満ちあふれたところだ。

みんな、楽しげにスポーツしたり、部活で趣味を極めたり、友達と遊んだり、オシャレしたり、音楽に熱中したり、めいっぱい読書したりしてた。立派な社会人になるために、マトモな学問を身につけることだってできる。一般校は、いいことばっかりの夢の国だ。

世間的にも『高校時代は青春の真つ盛り』とか礼賛されてるしな。
せ、青春とかって。

そんなの自分には訪れないものと、諦めてたよ。

だが、ありえる。これからの俺には。

俺に何ができるのかは分からないが、きっと無条件で幸せが訪れるんだ。こんな俺にも。

俺は嬉しくてニヤついてしまう自分が恥ずかしくて、掛け布団を頭からかぶる。

楽しみだ……楽しみすぎる。ようやく俺にも春がくるんだ。季節は冬だけだな。

2弾 一般人・キンジ

12月1日。今日から俺は、一般人だ。

どこにでもいる、平凡な、ごく普通の学校に通う高校生。

狙撃銃も持たず、ハイマキも連れず、ヘッドホンも校則違反なので外し、意外と似合うただの繊維製ブレザーを着たレキの姿は新鮮だったが……俺も、早く慣れなきゃな。

初登校した東池袋高校は、いかにも普通の学校、といった風情の学校だ。

それでこそ一般校。すばらしい。秘密基地みたいな武偵高の校舎とはモノが違うぜ。

（共学なのはいただけないが、贅沢は言えないよな）

ドキドキしながら真新しい上履をはき、校舎に入り――

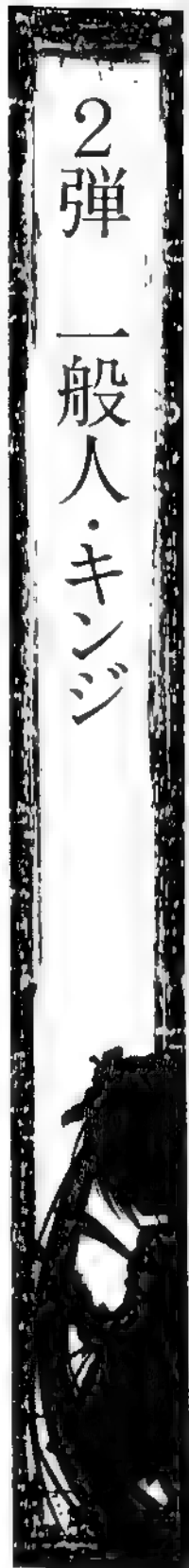
つい習慣で遮蔽物になりそうな柱を目で探してしまったが、もうそんな必要はない。

廊下で戯れる生徒たちからも、硝煙のニオイがしない。作戦に関わる特技を持つ雰囲気もない。ここでは人を見て『誰と組んでどう生き残るか』などと考えなくてもいいのだ。

（これこそ、俺が求めていた平和の世界……！）

やったぞ。俺はついにたどり着いたんだ。ようやくその実感が湧いてきた。

我ながら目をキラキラさせて、銃も刀剣もない職員室へ入り――



2年2組に配属された俺は、1組になったレキとしばしの別れ。

引率^{いんそつ}してくれる担任は……すれ違う生徒たちの会話を読唇^{どくしん}して分かったが、『ゴリ』というアダ名らしい体育教師。気むずかしそうな印象はあるが、この人も素手でバスを横転させたりする前の体育教師^{たつ}とは違う。ただのオジサンだ。

そして――

ガラガラ、と、ゴリが2組のスライド扉を開く。

彼について、ざわつく教室に入り……

「HR始めるぞ、静かにしろー。まず今日は、転校生を紹介する」

学園ドラマみたいな事を言ったゴリが、ドラマみたいにチョークを取り、黒板に……

『遠山金次^{とやまきんじ}』

と、これもドラマみたいに俺の名を書いた。

新しいクラスメートたちの視線が、こっちに集中してきて――

「質問があれば後^{あと}で挙手。じゃあまずは遠山、自己紹介しろ」

と言われた俺は、

「は、はい。えっと……遠山キンジです。よろしくお願いします」

武偵は不特定多数の前で自分の事を語るべからず――と叩き込まれてきた習慣が出て、黒板を背にとりあえず名乗り……それだけにしておいた。

だが一般校ではそれじゃ許してもらえないらしく、速攻、拳手が始まつてる。たじろぐ俺を前に、

「何か一発芸やってみせて！」

などと男子が言ってくる。

どこにでもいるんだな。ああいうムチャ振りしてくるヤツって。

しかし、困ったな。

通常時の俺には、白雪大絶賛のバタフライナイフ連続開閉ぐらいしかそういう芸がない。

だがそもそもナイフの持参は校則違反しかかったから、持ってきてないんだ。

「ちよつと、そういうのはありません……」

と、目を逸らしつつ言うと、

「趣味は？」

「いや、特に……テレビで映画を見るとか……」

「特技は？」

「特技……別に……」

ずっと、面白い回答のできない質問ばかりされた。

で、みんな、つまんなそうになった。

俺って……つまんない人間だったんだな。まあ、知っちゃいたけど。

HRが終わり――

ゴリは「学校のことで遠山^{とおやま}が何か分からないようだったら、教えてやれ」と、俺の隣に座ることになった女子に言い残して去っていった。

で、指示された窓側の後ろの席についていた俺に……くるっ。その女子が、笑顔で振り向いてくる。

「先生も言ってたけど、何かあったら聞いてね。私、望月^{もちづき}萌^{もえ}。クラス委員なの。他のクラスにも望月さんがいるから、萌^{もえ}って呼ばれてるよ」

さっきの自己紹介でいきなり躓^{つまず}いた俺を氣遣^{きづか}うような、優しい言い方だ。ていうか、かわいいな。ツイてない、これは。俺の場合。

「あ、ああ」

「さっそく何かある？」

サラサラの髪はふんわりしたボブカット、色は少し茶色がかっているが、眉毛^{まゆげ}から見て地毛。穏やかそうで大きな、ふたえの目。色白で、身長は158、白雪や中空^{なかそら}知^ちほどじゃないものの健康的にグラマーな体型をしている。

などと探偵科^{インケスタ}の習慣で外見をパーツに分けて分析してしまったが、

「いや……特に」

ぐらいしか、俺は彼女と会話ができない。

元々、女子は大のニガテなのと——なんというか、普通で、いい子っぽすぎるからだ。
……眩しい。

銃や刃物で薄汚れた俺なんかが関係していい子じゃないだろう。

それに武偵高では男女を問わず変人ばかりだったから、俺はどちらかといえばツツコミ役だった気がする。それが板についてしまったのか、普通の子を相手には話しづらい。

萌の他にも、授業までの短い休み時間では何人かの男子が話しかけてくれた。

だが、同じような理由で俺はうまく応じる事ができない。

なので、向こうもつまらなそうに……「まあ何かあったら遊ぼうよ。誘う」ぐらいの事を言い残して、去っていくのだった。

一般校の授業は、けっこう難しかった。

武偵高のレベルの低さを痛感するが、頑張らなければ。これからの俺には拳銃の知識や尾行術なんかより、微積分の方程式の方が役に立つんだ。きつと。

心にそう言い聞かせつつ、

「東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人……」

古文の教科書を読む先生の声を聞いていると……

——かちんつ。

——S & W M19コンバットマグナム、4インチ！

ナナメ後ろで、その撃鉄げきてつを起こす音がした——！　　と思つて、バツ、と振り向く。

だがそれは、クラスメートが金属製カシメの筆箱ペンケースを閉める音だった。

ま、紛らわしいな。誤射つなに繋がるつてんで、武偵高じゃ減音を指示されてたんだぞそれ。つて……いかん。何人かが「？」と俺を見てるよ。隣の萌も。

「……」

つい無いベレッタに伸ばしてしまつていた手を、懐ふところから机に戻しつつ……

何事も無かつたそぶりで、俺は教科書とのにらめっこに戻る。

だが今ので少し神経が尖とがつてしまつたらしく、シャカツ、という机とイスの擦こすれる音や、ピンツ、というマーカークのキャップを外す音、少し遠いダダダツという工作ドリルの音がそれぞれ……Jericho 941、MK3A2、MP5A4……拳銃のノッキング音、手榴弾しゅりゅうだんのピンを抜く音、短機関銃マシンガンの連射音に聞こえてきてしまう。

俺はそのたび反射的にそつちを警戒してしまい——

体の動きをムリヤリ抑えているうちに、額ひたいからヘンな汗が出てきた。

落ち着けキンジ。これはただの生活音。お前はただの高校生だ。もうどこからも弾丸たまは飛んでこない。何も、気にしなくていいんだ。授業に集中しろ。

昼休みになり、レキの様子を見に行こうかとも思ったが……

音のせいですっかり気疲れしてしまい、その気になれない。

強襲作戦でも終えたかのような疲労感と共に、購買で買ってきた菓子パンと牛乳を自分の机で胃に流し込む。

「……」

自分から話しかけるのも得意じゃないので、黙って周囲の会話を聞いていると――
みんなが話してる話題に、驚かされた。

テレビの雛壇芸人の話。流行のダイエット方法。マックのハンバーガーのどれが好きか。

授業中に隠れてケータイを見る方法。誰だかの停学が明けそうでイヤだという悪口……

全て雑談。雑談、だけなのだ。

いや、武偵高でもそういう会話はよくあった。

とはいえそれはあくまでヨタ話。仲間同士のコミュニケーションにおける、刺身のツマみたいなもので……メインは装備や資金、任務や戦闘の話だった。

それは将来、自分がどう生き延びるか、いや、どう生きるかのリアルな話。

俺たちは、本気で話してた。それは大切なことだったから。

だが、ここではまず仕事の話が無い。あっても小遣い稼ぎのアルバイト程度だ。会話は

上っ面だけで、大事なことを話しているムードがどこにもない。まさに雑談のお花畑。そのせいで、早くも俺はみんなの輪に入れない自分を感じてしまう。

なんというか……

幼く、庇護ひごされた人々という印象がしてきた。周囲が。

小さくて、狭い、箱庭という印象がしてきた。学校が。

この世界観に順応しなければいけない事は分かっていつつも、それがすぐにできず焦あせる俺を……横から、クラス委員の萌もえが少し心配そうに見ていた。

結局その後、誰とも話さないうちに放課後を迎えてしまった。

……疲れた。黙って座ってただけなのに。

萌に言われたらしく、カラオケに誘ってくれた男子グループもいたんだが――

疲れのせいで、断ってしまった。俺はバカだ。

などと自己嫌悪じこけんおに陥おちいりつつ、クラスを後にし……

装備がないせいで体のバランスが取りにくい事を感じながら、階段を下りる。

壁の掲示板には『インフルエンザ予防のため、うがいをしましょう』という平和の象徴みたいなポスターが貼はってある。『銃の違法改造をするな』だの『教員宿直室の盗聴者を厳罰に処した』だの『米軍横流し装備の大セール！』だのという殺伐さつぱつとしたビラではない。

それを異世界のように見つめていると……こそつ……

「——ッ！」

背後から忍び寄った誰かの気配に、条件反射で体が動いた。

——バツ！ と、腕刀で相手の喉笛に先制の一撃を入れそうになり、

「……！」

慌てて、止める。

バツ、と俺の腕が起こした風が……ふんわり、と、萌——

望月萌の、やわらかそうな髪を少しだけ広げた。

「……？ ……？ ……？」

通学鞆の取っ手を両手で持って体の前に提げていた萌が……運良くマバタキをしてくれたのと、たまたま俺の気づきが早かったため——

「ご、ごめん。小さな羽虫がいたんで、その……払ったんだ」

という言い訳で、事なきを得た。

「遠山君は、前の学校では何部だったの？」

ヘンな時期に入ってきた謎の転校生に興味でもあるのか、萌は俺と一緒に靴を履きかえながら話しかけてくる。

「いや……特に、部活はしてなかった」

「じゃあ習い事とかは？」

好奇心旺盛おうせいなのかな。萌は。

いや、これはクラス委員の義務感ってやつだろう。俺が早くも孤立ざみ気味なのを悟さとって、なんとかしようとしてるのだ。ゴリにも俺を押しつけられてたしな。

（疲れてるから、放っておいてほしいんだが……）

とはいえさつき、その細い首を折りかけてしまった負い目もある。なので、横を歩いてついてくるのは、そのままにしておく。

「私はね、家庭科部なの。男子はいないけど……と、遠山君、お料理とかどうかな」
ああ、勧誘ですか。

しかし、なんで俺の名前を呼ぶ段になって急に視線を下に逸そらしたんだろう。白くてふわふわした頬ほおも、少し赤くしてるし。

一般校では、人を部活に誘うのは勇気がある事なのかな？

「女子だけの部は、ちよつと……困る」

「あつ、そ、そうだよな。やつぱりそうだよな」

と、萌がちよつと太めの眉まゆを下げて、はにかんだ時——ぴゅう。
風こがらしが吹いて、ひらつ……

(……っ……)

ありがちなブレザーに合うチェック柄のスカートが少し持ち上がったので、目を逸らす。

「や、やだ。やな風。びっくりしたあ」

武偵高ぶていこうの女子は常時丸見せの太腿部だいたいぶが少し露出ただけだが、萌もえは恥じらう。

俺われも少し、赤くなってしまった。なんて……や、柔らかそうな太ももかと。

決して太いわけじゃないが、筋肉と皮下脂肪ひかしぼうの割合が武偵高の女子とは違うんだろう。

なんというか、むっちりとして……それはそれで、新しい趣おもむきが……

(……っておい、ヘンなこと考えるなよ俺！)

俺は武偵高じゃ、問題は……起こさなかったとは言えないが、そのせいで退学になったワケじゃない。それは校長のお墨付きだ。

だが一般校ヒステリアモードで問題行動をやらかして退学になったりしたら、もう行き場が無くなるぞ。気をつけなきゃいけない、ここでも。女子とは危険物なんだ。俺にとって。

萌と校門を出ると、いろんな意味で危険な女子のレキがポケーつと俺を待っていた。

通学鞆かばんには、普通の女子がヌイグルミを垂たらすように……狙撃銃ドラグノフから外したスコープをつけてるが……まあ素人目しろうとめには分からんからいいか。

横こまめには狢犬こまいぬみたいなポーズで、ハイマキもおすわりしてる。



どうも持つてきてはいたらしいヘッドホンをかけたレキは、俺われについてきた萌もえにチラッとガンを飛ばしてから——微妙に非難するような視線で俺を見てきた。なんだそれ？

「レキ、どうだった」

「特に何も。キンジさんは」

「俺もだ」

と、無口レキとネクラキンジらしい虚無的な会話は5秒で終了。

しかし、俺はもうヘトヘトなのに……レキは平然としてるな。

レキは疲れ知らずだが、精神的な疲れにも強いのかな。さすが狙撃手スナイパー。するとまたレキが少し不機嫌ふきげんそうに萌を睨にらみ、萌は、

「あ、えっと、じゃあね……遠山君とおやま」

急に何やら残念そうな表情になって、去っていった。

俺とレキが並んで歩くと、下校中の生徒たちがこっちをチラチラ見てくる。

人がツーマンセルで歩くのが、そんなに珍しいのか？ 個人Pでの危機管理F Cの基本だろ。分らん事だらけだな。一般校の世界は。

で、学校から離れた明治通りめいじどおに出ると、

「——キンジさんは手が早いですね。さすがです」

珍しくレキが話しかけてきた。さっきと同じ、非難するような目で。

「……さっきの萌の事を誤解してるのか？ あれは、アイツが勝手についてきただけだ」と応^{こた}えるが、レキはノー・リアクション。

自分に都合の悪い事は聞こえないフリをしやがる。

「そんな事より……お前、友達はできそうか？ 俺はムリそうなんだが」

「私は、できました」

などと言うのでビックリして詳しく聞くと、レキはどうもクラスの女子たちにカワイイカワイイと大人気だったらしい。無口で小動物っぽいところが愛されたようだ。

で、女子たちに誘われて美術部に入ったそうだ。もう。

（俺の一般人レベルは、レキ以下だったのかよ……！）

愕然^{がくぜん}とする俺の横から、とこ、とこ……レキは路地の片隅^{かたすみ}にあるコインロッカーに立ち寄って、縦長のロッカーからトランクを取り出した。ドラグノフ入りの。

「お前……そんな物こんな所に置くなよ。あとハイマキも連れてくるな。家に置いておけ。誰^{だれ}かに噛^かみついたりしたら一大事だし。銃剣^{じゅうけん}も持つてくるなよ？ 校則違反なんだから」

鞆^{かばん}さえ重く感じてきた俺が、片手で鞆を肩の後ろに負うようにして言う——

「分かりました。ですが……」

「ですが何だ」

「警戒して下さい。風かかに関わる者の存在を感じます。全くの偶然と思われますが、遠くはない」

出た。『風』。まだそれ、レキの中で生きてたのか。

だが俺おれはさっきのお返しで、その自分に都合の悪い話は聞かなかった事にする。

こちらら学校辞めてまで、一般人になろうと尽力じんりよくしてるとこなんだぞ。

そういう話は最小限でいい。関わらなくていい事には、絶対、手を出さないからな。

俺にとって今それより大事なのは、学校での成績と人間関係なんだよ。

今日から身を寄せる俺の実家は、JR巢鴨すがも駅から少し離れたところにある。

東池袋ひがしけいぶくろこうこう高校からは、ギリギリ徒歩圏内だ。

武偵高ぶていこうもそれを知ってて、あの学校を指定してくれたんだろうな。

商店街をかすめるようにして歩き、古い一戸建ての多い住宅街に出る。路地でキャッチボールをしてる子供たち、チャリンコで警邏けいらするお巡りさん、雑種のネコとすれ違い……寂れたタバコ屋の角を曲がり、材木屋の前を通り……もう少し歩いた所にある日本家屋が、俺の実家だ。古いが、けっこう広い。

（久しぶりだなあ、実家）

と、門に向かう角を曲がると――

「おいジジイ。道の掃除が終わったぞ。^{エザテリクス}奥義を教えろ」

などと、ロック歌手みたいな服装の男が我が家^{わがや}に入っていく……って……

（い、今の……ジ……サード……!? いや、えっ? どういう……!）

などと我が目を疑った俺^{まふた}が瞼^{まぶた}をゴシゴシ擦^{こす}つてると、

「お前は近所^{はんでん}づきあいってモノが分かつとらーんッ!」

着流^{はんでん}しに半纏^{はんてん}を重ね着した俺の爺^{じい}ちゃん——

遠山鐵^{とみやまがね}が、ぱかーん! 下駄^{げた}でジーサードの頭^{たま}を叩いて道に戻しながら、出てきた。

「向こう三軒両隣の前も掃除せんか! 次は鉄拳^{てつけん}制裁じゃぞ!」

角刈り頭もすっかり白髪になったヨボヨボの爺^{じい}ちゃんに、

「チッ」

舌打ちしつつも、あの凶暴なジューサードが……ちゃんと従って、箒^{ほうき}を持ち直してる……

ていうか、塀^{へい}にまたがって、庭の柿^{かき}の木に棒を伸ばしてるのは——

「いいキャラメル色の柿^{かき}だあー」

武偵高のセーラー服姿の、か、かなめっ……! がくっ。

脱力した俺は、うなだれるどころかその場に膝^{ひざ}を落としてしまう。

「お、お前らっ……なんでこんな所にいるんだよ……」

爺ちゃんへの挨拶より先に、俺は至極当たり前前の疑問を口にしてしまう。

「——おう、兄貴じゃねえか。そりゃこっちのセリフだぜ。俺はホームステイだ」

「お兄ちゃん非合理的いー。孫がお爺ちゃんの家にいちゃいけないの？ あつ、でも安心して。アリアたちには何も言っていないから。家族の団欒、ジャマされたくないからねえ」

我が弟と妹は、アメリカ人特有の堂々さで答えてくる。

これ……ジーサードが監視してたな。米軍の偵察衛星とか通信傍受施設を借りて、俺を。で、ジーサード↓かなめ、とチクリが入ったか。

2人は壮絶なケンカ別れをしたが……この様子を見るにその後、仲直りしたんだろう。多分というか絶対、俺を対話のダシにして。

（予想外すぎたぜ……これは……）

いや、こんな事、誰にも予想できん。

元大統領警護官の人工天才が、巢鴨の歩道を掃除してるとか。

塀にまたがったままウインクしてくるかなめにも溜息をついて、俺は立ち上がり……
ジーサードを警戒しつつのレキと門まで歩き、爺ちゃんに、

「……ただいま」

とだけ、言った。

「ん、よく帰った」

爺ちゃんは……嬉しそうに、笑ってくれた。

それだけで少し、帰ってきて良かったな、という気分になる。

だが爺ちゃんはすぐ、

「——んー？ この別嬪さんはキンジのコレか？」

などとスケベな目つきで小指を立て、心底ハッピーそうにレキの顔を覗きこんでるぞ。

「いや、これは何というか勝手についてきちゃったんだけど……」

「んー、若い娘はいいのう。ウエヒヒ、ミントの香りじゃ、ミントちゃんと呼ぼう」

俺にも遺伝したムダに鋭い嗅覚で、レキのニオイを嗅ごうとした爺ちゃんに——

「おやキンジ、おかえり。あれまあ、可愛い女の子だねえ」

——ゴスツツツ！

いつの間にか現れた、遠山セツ……

俺の婆ちゃんによる、喋りながらのベリーショートパンチが叩き込まれたッ……！

爺ちゃんは「ほおぷっ！」などという声にならない声を上げ、向かいのブロック塀まで

吹っ飛ばされ、がしゃ、がらがら……衝撃で壊れたブロックの下敷きになっていく。

（これは……しゅ、『秋水』……！）

初めて見た。遠山家の奥義の一つを。意外すぎるシチュエーションでだが。

衝撃の力——撃力とは、実践上、激突する物の重さと速度によって決まる。

なのでボクシングなどでは『拳こぶしにできるだけ体重を乗せる』ようにするものだが、この秋水では『余すところ無く全しゆすい体重ていじゆを乗せる』。

そうすると、どうなるか。ベリーショートパンチ、つまりほとんど動きのない打撃でも甚じん大な撃力げきりよくが生じるのだ。今、爺じいちゃんちゃんが車はに撥ねられたみたいになったように。

これは中国拳法けんぽうでも寸勁すんけいという名前で類似する技が術技立てられているが、秋水はその極端版。要はパンチに見えて、実は最も技術化された体当たりなのだ。

なお昔、兄さんが分かりやすく解説してくれたところによると――

8グラムしかない9mmパラベラム弾が大きな衝撃を生むのは、速度がひたすら速いから。軽いが、速い。

秋水はその逆。遅いが、重い。婆ばあちゃんちゃんの体重だつて、40kgはある。弾丸の5千倍だ。それが拳に集中して一気に激突するなら、速度なんて僅わずかで済む。

とまあ、理屈では知ってた技だが……

理屈だけじゃ羽虫も殺せない。爺ちゃんという尊とうとい犠牲のもとに実演を見せてもらつて、ようやく実践方法が掴つかめたところだ。できるかなこれ、ヒステリアモード時。

「おいジジイ！ 掃除が面倒になるだろ！」

というジーサードの怒声なんかどこ吹く風で、婆ちゃん……

「おいでキンジ。金花きんかの『揃そろいぶみ』があるよ。ミントちゃんもお入り」

曲がった腰の後ろに両手を戻し、ノンビリと家に入っていく。

婆ちゃん……帰ってくるって聞いて、買ってくれたのか。揃いぶみ。

俺おれが小さい頃ころに好きだったのが、婆ちゃんの中では未だいまに現役なんだなあ。

いや、いつまで経たっても、俺は爺ちゃん婆ちゃんの中では子供なのかもしれないな。

「いやー、金叉こんざに隠し子がおったとはの。知らなかったぞ」

「父さん本人も知らなかったと思う。兄さんも生きてたわけだし、4人兄弟になった」
コタツで、婆ちゃんがくれた豆菓子まめがしを食べつつ爺ちゃんと話す。

なお、爺ちゃんは全くの無傷。

その辺のカラクリも、分かってきたな。俺もアリアにドメスティック・バイオレンスを日々受けて、耐久力だけは増したし。要は女性を怒らせやすいヒステリアモードによる、ある種の副効用だったわけだ。この、我わが一族の異常な打たれ強さは。

ちなみに婆ちゃんは遠山家とやまに嫁よめぐ前から、どこかの戦闘的な一族（なぜか詳しく教えてもらえないが）の子孫だったらしい。なので、遠山家の武術もかなりマスターできている。

（……かなめに悪影響がない事を祈るのみだぜ……）

我わが家は、この爺ちゃんの部屋を始め、全すべて和室だ。

鴨居かもいの上には爺ちゃんが軍人だった頃の写真が飾っており、床の間には古い掛け軸と、

婆ちゃんが生けた花がある。なんか白雪しらゆきと生け方が似てるな。流派が同じなのかな。

「……」

ちなみにミントちゃんことレキも正座してコタツに膝ひざを入れてるが、置物状態。等身大フィギュアみたいにジツとしている。

そのレキが放つ圧迫感もあり、家族トークは微妙に弾まず……

「んー、週末は重馬場になりそうじゃな」

今は客のあまりいない整体師・兼・ギャンブラーとして暮らしている爺ちゃんじいは、競馬新聞を広げ出した。

一応、本題も話しておこうと思った俺は――

「爺ちゃん、俺、学校……」

電話では軽くしか話さなかった事のあらましを、伝えようとした。

だが爺ちゃんは角刈り頭を新聞に向けたまま、

「多くは語らんでええ。学校なんぞ乗りモンじゃ。乗り換えてもいいし、乗らんでもええ。金こん義ぎもイジメられて泣いてばかりおったしのオ。ワシも成績は丙へいと丁ていばかりじゃった。

遠山とおやまの男は、学舎まなびやには合わんのよ」

そんな寛大な事を言ってくれたので、会話はこれも終了してしまう。

（『鬼検事オールドゴ』の二つ名を持ってた父さんが泣き虫だったなんて、分からないもんだなあ）

などと思いつつ、しばらく黙っていると……レキが立ち上がったので、

「どこ行くんだ？」

と俺が聞くと、

「お手洗いです」

「あー……うちは和式だぞ。使えるか？」

一応アラートしてやったところ、こくり。うなずいた。

そして、レキの足音が遠ざかってから――

競馬新聞に赤鉛筆でマルを付けながらの爺ちゃんが、

「……狙撃手^{そげきしゅ}じゃな」

ボソリ、と言った。

カチツ、と、爺ちゃんの中で何かのスイッチが入ったような感覚が伝わってくる。

「そうだよ。よく分かるね」

「さつき、そんな火薬のニオイもしたからの」

さつきの、あれは……単にレキにセクハラしてたんじゃないかなかったワケか。

「可愛い顔^{かわい}しとるが、ワシやニガテじゃな、狙撃兵^{そげきへい}は。戦^やりにくいもんじゃった」

「まあ、同意だよ」

俺も一度コテンパンに負けてるからな。レキには。

「ところで……ジーサードとかなめは爺ちゃんに何て言ってた？ 自分たちの事」
詳しく説明しておこうと思ったが、これも、

「——言わせとらん。作り話をしようとしたからな。じゃが、一目で分かったわい。
あれはうちの縁者だ。よく鍛えられておる。兄の方は主に拳、妹の方は刀じゃな」

「よく分かるね……見ただけで」

「お前のこともじゃ、キンジ」

にい、と、爺ちゃんは俺を誉めるように笑った。

「ずいぶん、男の顔になった。修羅場をくぐり、死線を越えてきたか」

「……まあ、いろんな意味でだけどね」

と、俺は苦笑する。

「ようやく、笑ったのオ。今日は一日、笑つとらんかったようじゃったからの」
爺ちゃんはそんな事まで見抜きつつ、自分も笑顔になった。

実際……学校でみんながしてたお笑い芸人の話なんかより、こういう話の方が気が落ち
着くな。本来の自分、って感じがする。

でも——

俺は一般人になるんだ。そう決意した上で、ここにも来ている。

だからこういう話で盛り上がってちゃ、いけないんだ。ホントは。

「ところでキンジ。お前も来年18になる。もう覚えてもいい歳じゃ……『春水車』をな」

「え、シユンスイシヤ？ 何それ」

俺が聞くと……爺ちゃんは婆ちゃんが料理してる音を確認してから、

「遠山の秘技の一つ。技じゃよ、技」

声を潜めつつ新聞を畳み、押入の奥にあった金庫を出してきた。

正直、もう俺は戦闘技なんかとは無縁な生活をするべきなんだが……

（婆ちゃんにも秘密の——金庫にしまえる、技？）

どんなのだろう。興味は、湧くな。

カリカリカリ、カチツ、と金庫を開けた爺ちゃんが、

「これぞワシの爺ちゃんが版画で開発した、春水車。それを写真版に進化させたものじゃ。作り上げるのに時間がかかるんで、ワシも戦前からずっとコレクションしてきておるッ」

大量に取り出してきたのは……

……グ、グラビア雑誌や水着写真集の、切り抜きページ……！

「ほれっ、この娘のボディは星伽の娘っこに似ておろう。ウエヒヒッ。それとこっちは洋物じゃ。こっちは幼顔シリーズ。これらの分類が春水車の肝でのお。男心の中で好みの女の属性は時折変わり、あるいはまた戻る。それを先読みして——色本を分類・貯蔵し、閲覧する女体を回すのじゃ。水車のようになっ」

な、なんてこった……！

そういえばすっかり忘れてたけど、爺ちゃんじいちゃんは筋金入りのグラビアオタク。

いい歳としこいてんのに、まだ現役だったのかよッ……！

「色本いろほんは、間を置いてからだとまた新鮮になる。飽きたと思っても、捨ててはならんぞ」

幾星霜いくせいそうの時をかけて選り抜ゆかれてきた、名グラビアの数々が――

夢幻ゆめまぼろしの光景のように、畳の上に広げられていく。

「ちよっ……しまつてくれよ！」

興味が無かったから知らなかったが、こういうのは――

な、並べて見る鑑賞法だと、よりどりみどりが広がってより危険だ！

「キンジも、もうじき成人向けアイテムを堂々と購入できる年頃としごろ。近年は動画、更にお前

たちの世代には二次元ニジという大鉾脈も広がっておる。キンジっ、お前の力で春水車しゅんすいしやを進化

させよ。そして常にマイブームとその再生機を携帯せよ」

「しねえよ！」

俺おれは――確かに白雪しらゆきにちよつと似てるお姉さんが水着であられもないポーズを取ってる

写真をついチラッと見てしまい、大慌てに慌てる。

「こらッ！ 目を逸そらすな！ 遠山とおやまは自在とこやまに『返對へんたい』してこそ一人前じゃぞッ！」

返對とは、ヒステリアモードの古い名前。

みんなヘンタイという読みがイヤで別名をつけるのに、爺ちゃんは堂々とその名を呼ぶ。「若い娘も悪くはないが、やっぱり女はハタチからが本番じゃぞー。ほれ、ウエヒヒ」などと、カルタみたいに写真を床いっぱいに並べてる爺ちゃんは……か、変わらない人だなあ。いつまで経っても。

学校では——何日か過ごしても、相変わらず何も無い。

もう2学期も終わりに近い。すでに男子にもグループができており、俺はそのどこにも入れない。ので、どの男子とも特に話すことがない日々だ。

萌も、俺とレキが下校しているのを見てから何か遠慮しているような態度に変わった気がする。

(今日は誰とも、一言も話してないな……)

夢と希望を持って入った高校は——今や、なにげに精神的に辛い場所となっている。特に、昼休み。これが意外とキツイ。

誰かをジロジロ見るわけにもいかないし、レキみたいに虚空を見つめてるわけにもいかないから、俺は食べたパンの空き袋の成分表示を何度も読んだりしてる。何やってんの俺。なので、今日の昼休みは教室以外の場所で過ごそうと考え——

しばらく校内を徘徊してみたが、どこに行っても何人かの生徒グループがいる。

そこにお邪魔して、何も言わず座ってるのもヘンだ。

(どこにも、居場所が無え……)

もともと武偵高でも『非社交的』とか綴に言われてた俺だが、それがモロに出たな。そうして歩き回り、ようやく見つけた無人地帯――

屋上の貯水タンクが作った日陰に、俺は腰を下ろす。

まだ30分もあるよ。昼休み。何すりゃいいんだ。

そういえば理子が昔くれたメールによると、アリアはロンドンでの小学校時代、友達がガチで1人もいなくて……休み時間は寝たフリをして過ごしてた黒歴史があるそうだ。

(それ、採用してみようかな。睡眠も取れるしな)

などと末期的な事を考えていると……

俺の聖域・屋上にも、誰かがきてしまった。

ここからだと思えないが、足音と声で数人の女子と分かる。

「遠山とおやまってさあ……」

あれ、俺の話をしてるぞ。

どこかに退散した方がいいのかな。でも、ここから動くと思っかつちまう。

フェンスを越えてワイヤーで降下するワケにもいかん。

向こうにも見えてないみたいだし……大人しくしよう。それこそ寝たフリとかなして。

「腕に凄い傷があるんだよ。ギザギザの。体育で見たって、男子が言ってた」

「こわっ。機械か何かに巻き込まれたとか？」

「なんかアイツ、隠してるよね。絶対」

傷？ ああ。シャーロックと闘った時、桜花の衝撃波で自損した傷跡か。

こんなのが珍しいのか？ 武偵高じゃ、傷の無い生徒はCVRの女子ぐらいだったぞ。ていうか、人の身体的特徴をあげつらうのはよせよな。傷つく人は傷つくんだから。

（でも……陰では、話されてるんだな。俺）

この女子もそうだが、男子も、陰口はきいてたわけか。

放課後になった直後も、孤独な俺にとってはキツイひとときだ。

下校のために校内を歩くと、生徒たちの姿がイヤでも目につく。

みんな楽しそうだ。何が楽しくて歩き回ってるのかは知らんが、充実してる感じがする。部活が始まり、スポーツに汗を流す集団がいる。勉強熱心そうな生徒は、友達と塾へ行く。だが俺には、何もない。

今夜、強襲作戦があるワケでもない。救援要請を受けて車輛科の四駆に飛び乗ったりもしない。射撃訓練で気晴らしでもしたくなるが、もう訓練の必要もない。何も、しない。

（これが、一般校……だったのか……）

想像してたのと、だいぶ……いや、違わない。ここは確かに俺おれの思い描いていた通りの場所だった。居場所が無いのは、俺の非社交的な性格のせいだ。

だが、そのキツさに加えて――

日々何も起きず、何もない。これも、しんどいものがある。

（今日と同じ日が、明日も明後日も……永遠に続くのか……？　　これが、一般的な世の中なのか……？）

これは俺が望んだ環境だ。

だから俺は今、幸せなハズなんだ。

だが、なんで、こんなにイラつくんだ。

（……空虚くうきよすぎるんだ。ここは……）

いや、空虚なのは俺の方。

俺は、武偵ぶていじゃなければ何者でもない。

空っぽの俺しか残らない。それが、痛いほどよく分かってきた。

（こんな思いをするより、ハイジャック機に乗ってた時のほうがまだ気が楽だったぜ）

ハイジャックで思い出したが……

アリアや理子りこは、どうしてるのかな。白雪しらゆきもだ。依頼を受けて、事件に駆り出だされたりしてるのかな。危険な目に遭ったりしてないだろうか。

などと仲間たちの事を気にかけてつつ、校門の近くを通りかかると――

(……?)

何か、言い争うような声が聞こえたな。

校庭の片隅、自転車置き場の方だ。

ケンカ腰の男の声が2つと……女の声もする。男たちが、女に絡んでる感じだな。

「……」

習慣で一旦そつちに意識を向けてしまったが、俺は下校を急ぐことにする。

ここで大事なものは、目立たないこと。問題を起こさないことだ。

ケンカに巻き込まれ、武偵高での癖で手が出ちまったら……停学。ヘタすりゃ退学だ。一般校では、暴力沙汰が重罪になるらしいからな。

「――バイク登校は禁止されてるし……！ 騒音が人の迷惑だし……！」

「人の迷惑う？ 何それエ？」

「俺たちや登校してねエつつてんだろ！ 停学中なんだしよオ！」

……俺は、舌打ちする。

今した、女の方の声は――望月萌。隣の席の、あの女子だ。

俺の見立てじゃ、萌には戦闘能力が無い。皆無、ゼロだ。

男たちの声は興奮している声だ。もし暴力を振るわれたら、なされるがままだろう。

(クソッ……何やってんだよ)

俺は——様子を見るだけにしようと思ひに決めつつも、自転車置き場の方へ行つてしまふ。そこにはメチャクチャに倒された自転車があり、

「藤木林君、朝青君、じゃあせめて蹴り倒した自転車は元に戻して……」などと自分の自転車を引き起こしつつの萌がいた。

「よし望月。お前、俺に無礼なこと言つた罰金、10万な。出せなきゃ、やつちやうか」と、雑誌の通販でおなじみの飛び出しナイフを光らせるのは——

派手派手しく染めた金髪頭で、やたら小さい色つきサングラスをかけ、耳にはいくつもピアスをした痩せ男。今さっきの萌の視線から見て、こっちが藤木林。

「ほれ、人の迷惑だろ。拾つて片付けろよ。クラス委員さんよオ」

と、食べていたフライドチキンの骨を投げ捨てた方は……対照的に、太ってる。

こっちが、朝青か。幾何学模様みたいなソリを入れた丸刈り頭で、制服の裾からジャラジャラとチェーンを垂らし、金属バットを持っている。

東池袋高校の制服を着崩した、その2人のそばには……な、なんだあれ……？

空気抵抗の高そうな風防・消音部分がない直管マフラーをつけた、ステッカーだらけのバイクがある。元はカワサキ・ゼファーだったようだが、他にもいろいろバイクの性能が落ちるような改造をしてるぞ。武藤が見たら激怒するだろうな。

(見るからに不良とはいえ、100%の一般人だな……でも、あれだけはマズいぞ)

様々な事物オブジェクトの中で、俺はある一点に注目する。

藤木林。あのチャラ男が萌に向けてる、光り物ナイフだ。

俺は何ともないが、藤木林がミスと——萌や、藤木林自身を刺してしまう危険がある。『やつちゃうか』という発言が何なのかは分からないが、出したからには使う行為だろう。すぐ収めるとは考えにくい。

見るからに強度も無さそうなオモチャだし、握り方にぎも素人丸出しだが……

素人は、かなりの確率でやらかすんだ。ナイフを出したのは威嚇いかくするためだったのに、手元くるが狂って刺してしまったという傷害事件しょうがいじけんの調書ちようしよをよく読んだ。

怯える萌おびの襟えりを藤木林が掴みつか、長いベロでナイフを舐なめたあたりで——
チクシヨウ。仕方ない。

「……おい」

やむなく、俺はヤツらに見えるような位置に姿を現す。
だが、さて。どう穏便おんべんに収めるかな。

「……と、遠山君とみやま……?」

あー。いきなり涙目でこっち見て、名前バラしてくれちゃってるし。萌さん。

「あア? 何だおめエ、何ガン垂れてんだア?」

ナイフを持つ藤木林ふじきばやしが必要以上に眉まゆを寄せ、首を傾かしげて睨にらんできたので、

「えーつとだな。光ってるモノ、しまえよ」

できるだけ、穏やかな声で話しかけたつもりなんだが……

「関係ねえだろおめエは！ 俺おれに意見するなんざ百億光年早えんだよ！」
し、瞬時にキレた。なんで？

あと光年は距離の単位だぞ。頭悪いんだな。俺も人のこと言えないけど。

「んー？ もう1匹出たな。見た事ねー女だけど、うちの制服だ」

野太い声で言った朝青あさおの方に、振り返ると――

朝青が、そのでかい手で人の頭を掴つかんで引きずっている。

ぶらり。髪を掴まれ、片手で吊つり上げられるようになったのは……

（レキ……！）

あ、あいつ……

俺がトラブルに首を突っ込んだのを察してか、来ちまったらしい。

「や、やめて！ 2人は転校してきたばかりなの、乱暴しないで！」

も、萌さん……素性すじょうまでバラして下さっちゃって……！

だがそんな事より、問題がややこしくなったぞ。

無表情のまま捕まったレキは……俺が命じたせいもあり、完全に素手だ。

狙撃科スナイプだから

格闘戦も習ってない。こんな時にこそ便利なハイマキも、家に置いてこさせた。

「ヒャーハー！ 女が増えたぜッ」

ヒャー……ハ……？ お前それ言いたいだけだろ藤木林。

だが、いいぞ。萌からレキの方へナイフを向けた。距離が随分あるのに。動くなら、今だ。

「だから、それをしまえって」

俺は、藤木林が俺を刺せるようないい感じの間合いに歩いて入る。

「——あア？」

刺してきたら腕を取るつもりだったが——人を刺す度胸が無いのか、藤木林は——スッ。刃物を上に向けてしまった。クソッ。素人はほんとに予想外の動きをするな。

俺は体だけ寄せてきた藤木林と、体がもつれたフリをしつつ……

「おっと……！」

絶対刺さらない十分な余裕を持った距離と速度で、朝青の方に藤木林の手を誘導する。

「うおおッ！」

案の定、朝青は自分に向けられたナイフに驚き——レキを掴んでいた手を、離れた。というか、金属バットまで落としてるぞ。慌てすぎだろ。

「……」

するとレキが……細腕でそのバットを拾っちゃった。何するつもりだお前。素人相手に。
 『逃げる』という短縮マバタキ信号で、まずはレキをバットごと退散させ……
 ナイフは既に取れていたで、刃をしまつて地面を滑らせ、排水用の側溝に捨てる。
 あとは……

「——おらァ！ 俺から逃げられたヤツはいねーんだよッ！」

「てめえなんざ、ワンパンで殺せるぜッ！」

などとやかましい藤木林と朝青による殴る蹴るの暴行を俺が受ければ、まあいいだろ？
 しかし……何度も殴ったり蹴ったりしてくるが、殴られてる感じが全然しないぞ。
 ゴスツ、バキツ、というよりは、ぺちっ、ぱしっ、って感じだよこれ。

まず、打撃を繰り出す前の姿勢が悪すぎる。体重移動も甘すぎる。

当て方も悪い。悪すぎる。2人が自分のパンチやキックで手首足首を捻挫しないように
 気を遣って当てられてやるのが難儀なレベルだ。

「も、もうやめてえー！」

この茶番を見て、萌が必死で泣き叫んでる。

それに俺は少し笑いそうになってしまいが、それも悪いのでガマンする。

「はあ、はあ……おらッ。どうだっ……」

「ふう、ふはあ……分かったかよオ」

えっ……まさか……もう息が上がったのか？

まだ3分も動いてないだろ、藤木林、朝青……

だが、見れば本当に2人ともグロッキー状態だ。攻め疲れで。

「ああ。分かった。悪かったよ」

素で答えてしまったが……いかん。

少しはやられたフリをしないと、この2人が気分よく帰れないだろう。女子の手前だし。
「いくぜ、これで死ねよっ」

藤木林が、背中丸見せでゆっくり俺から離れ……あ、ああ。助走する距離を取ったのか。
そしてヘロヘロの足で走ってきて、片足での跳び蹴りをくらわせようとしてきた。

俺は一世一代の芝居を打つつもりで、自分は勿論、相手の脚部にもダメージが無いよう、
さらに『気持ちよく決まった』と向こうが感じるよう――

――ぺしっ。

蹴られた。

そして後ろに倒れる演技。さらに横倒しの自転車まくらを枕にして、がしゃんっ。

「……う……」

サービスのSEもつけてやった。ちよつと演出過剰かじようかもしれんが、うめき声も。

はい、俺の負け。そとほりどお外堀通りでヒルダに負けて以来の、明確な敗北ですよー。

などと思つたらまた笑いそうになつたので、ここも、こらえる。

「藤木林イ！ 朝青オ！ ——停学中に何をやっとりかア！」

そこで職員室の方から、ゴリの怒声がした。

彼が最初からこつちを窓越しに見てたのには気づいてたが、なるほど。藤木林と朝青が疲れて動きが鈍くなるまで待つてたんだな。さすが社会人。処世術に長けてるよ。

「……朝青、バックれっぞ。おい遠山、覚えてろよ。罰金はお前だ」

息切れしつつの藤木林は、改造のせいかエンジンのかかりにくいバイクをそれでもなんとかスタートさせて、朝青と2ケツでフラフラ去っていった。

（覚えてろよ……か）

武偵高では傭兵の隠語由来の、親愛の言葉だったな。それ。

次また、生きて会えるって意味だからな。

などと心の中で苦笑いしつつ、目を開けると……

ゴリはしかめっ面で窓を閉めてデスクに戻ってくれたが、

「だ、大丈夫!? 遠山君！ 遠山君……遠山君！ 遠山くーん！」

放っておいてくれない人がいた。

萌は倒れた俺にすぎりつき、雪山で遭難者を救助するみたいに俺の名を連呼してる。

ていうか君、なんで泣いてんの……？ さつきから。

とも思ったが——いかん。まだ演技を続けないと。

一般人は一発殴^{なぐ}られただけでもしばらく痛がるものだからな。平然としてたら不自然だ。
「い、いやあ……痛かった」

こ、こんな感じでどうかな。よろけてみせたりして。

萌は「保健室行こう！」などと俺に肩を貸そうとしてくるので、俺は鞆^{かばん}を拾^{ひろ}って1人で帰るアピールをする。それで、うまくかわせた。

——しかし……痛くも痒^{かゆ}くもない、という以前のレベルだったが……
ちよつと、楽しかったな。気分的に。

ああいうイキのいいの、一般校にもいたのか。停学中らしいけど。
いやいやキンジ。あんなのを面白がってるようじゃオシマイだぞ。

(もうちよつと強ければ、マッサージぐらいにはなったんだけどな)
などと考えつつ、泣きじやくる萌を落ち着かせてから——バイバイして……

「……おい兄貴、あいつら殺^やっちゃっていいか？」

などと耳打ちしてきた、光屈折迷彩^{メタマテリアル・ギリー}のコートで透明人間状態の我が弟^わに、

「バカ、よせ。あんなヤツらでも人間なんだ。人を殺すな」

独り言のように、警告する。

実は、いたのだ。途中から、ジーサードも。

この場の光景があまりにも意味不明だったから、壁際に立って見てただけだけどな。

「読めなさすぎるぜ、兄貴の奇行は。何やってたんだよ」

「よしお前には教えてやる。学園生活だ。ジャマしたらシメるぞ」

「けッ。なんだそりゃ」

「あと、俺を尾^{おれ}けるな。兄に過保護な弟なんて、聞いたことないぞ」

「べつ別に、兄貴が最近元気ねえから気がかりで来たワケじゃねえからな。絶対違うぜ」

「お前らツンデレ族は、なんでベラベラ理山を言うんだ？」

と尋^{たず}ねると……ダダダダッ……バツ。

ジーサードも壁を飛び越えて、校外にいらなくなってくれた。

しかし……トーシロ以下だったな、藤^{ふじきばやし}木林と朝^{あさお}青。

足跡が増えてる事ぐらい気付^つけよ。

不良^{ワル}させとくにも、心配になってくるレベルだ。

その後、俺は——金属バットを持ったままなので通行人にチラチラ見られつつのレキと校門の前で合流し、バットを捨てさせ、並んで歩いて帰る。

すると、あれ……

なんか普段より距離を詰^つめて歩いてくるな、レキが。

「……ありがとうございます」



しかも唐突に、礼を言ってきた。

レキが、お礼ねえ。レアだな。

「何がだよ」

「キンジさんは、私を助けてくれました」

「あ、ああ。礼なんかい。ケンカにすらなつてなかったんだから」

「違います。キンジさんは前歴を隠そうとしている。それを私は理解しています。なのに、事実が明るみに出る危険を冒しても——戦い、私を守ってくれた」

それはまあ……

ほんの少しは、そうだけだな。

「あと、望月萌さんもちづきもえの事も」

きろつ。

うっ。流し目するようにして、レキが横から俺おれを見上げてきたぞ。

なんか、ちよつとイラツときてるような視線だ。お礼言つてたくせに。

なんだよこれ。ちよつと恐いこわんだが。

3弾 望月萌

翌朝、クラスで席に着くと――

「と、遠山君。昨日は……」

授業が始まる前に、萌が話しかけてきた。

「昨日？」

「あの、自転車置き場で……あの……」

ああ、俺が殴られた件か。武偵高じゃ日常茶飯事どころか1日何発も（ほぼ、アリア）

殴られて暮らしてたから、忘れかけてた。でも、一般校じゃあまり起きない事だからな。

「……」

萌はその大きなお目々をウルウルさせて、感謝感激、って雰囲気。

な、なんて言えばいいのかな。こういう時。

面白かったな、なんて俺なりの感想を言うのもヘンだし。

言葉に詰まる俺と、萌も、あせあせ、という顔つきで無言なので会話が続かない。

で、そのまま授業が始まってしまい……

俺は結局、萌をスルーした形になってしまった。



生活音にはさすがに慣れたが、勉強は……

どの教科も、俺は周囲に置いていかれ気味だ。

別に下に合わせてくれるワケでもないの、授業は分からないままに進められてしまう。で、分からない話を聞いていると……

……眠くなってくる。

実際何度かウトウトしてしまい、横から萌がシャーペンの尻でつついて起こしてくれた。なんか俺を可愛い物でも見るような顔をしつつの萌は、そのたびに『こら』的な笑顔を無言でしてきて、それがそれこそ可愛いので——戸惑う。

なお、その日の昼休みは分からん授業のストレスで食欲がなく、何も食べず……眠気に耐えかねて、ガチで机に突っ伏して寝てしまった。

小学生の頃のアリアと、同じになっちまったな。俺。結局。

放課後、レキが美術部でいなので1人で帰る。

(アイツ、絵うまいんだよな……油絵でも描いてんのかなあ)

学校の人がいきれが辛かった俺は、心のバランスを取るために……子供ぐらいしかいない東池袋中央公園のベンチで夕暮れの時間を潰すことにした。

ここは都市部の公園の割には人が少ない。ぼっち的には穴場だ。

落ち葉が舞う光景に、風情ふぜいがあるな。こうなりやもう自然だけがお友達だ。などと引退した老人みたいな事を考えていると、

「ビアンカ、だ、だめだよー」

ほんわかする……困りつつも優しげな声が聞こえてきた。

(うつ……)

萌の声だよ。なんでこんな所で。

つい振り向いた俺の視線の先には、毛のふさふさした美しいコリー犬を引っ張る……というか引っ張られるようにして散歩させてる、萌の姿があった。

温かそうなコートとロングスカートという私服姿の萌と、不幸にもドラマみたいに偶然目が合ってしまう。これじゃ即退散とおやまってワケにはいかんぞ。

「と、遠山君!？」

ふたえの目を大きく開いて、萌は転びそうなくらい驚いてる。

奇跡が起きた！ 的な表情で。

たしかに、都心部じゃ人と人が偶然会う確率は低い。奇跡かもしれない。起きてほしくなかったタイプの。

大型犬の部類に入るビアンカと共に、こっちへ来てしまった萌には……

「……近くに住んでるのか」

当たり前障りない話題を振っておこう。何してたの、とか聞かれたら答えがないし。

「うん」

「じゃあ、あんまり奇跡じゃなかったな」

と俺おれが言うと、

「と、遠山君とおやまも思ったの？ ちょっと奇跡っぽかったよね、今の。ねっ」

あは、と萌もえは世界中を温かくしそうなぐらいのいい笑顔になる。

そして、

「あ、あの、遠山君っ、ちょっとここで待ってて！ ビアンカ、おすわり！ おすわり、おーすーわーりー！」

と、あまり言うことをきかないビアンカをベンチの前になんとか座らせ……

たったたった。ちっこい鞠まりみたいなのが先端についた毛糸のマフラーを跳はねさせて、サンシャインシティの方へ走っていく。

「……」

これを好機と逃げようかとも思ったが……

周囲は車通りも多い。ビアンカが逃走しないよう、見といてやらないといけない。ので、仕方なく待っている……たった。

あまり運動神経を感じさせない走り方で、萌が戻ってきた。

見れば、マツクのセットを2袋買ってきてる。

「これ、あげるね」

「……？」

「と、遠山君、お昼食べてなかったから。私も今日はもう1食、食べちゃう」

と、萌は温かい紙袋を片っぱ俺にくれた。

確かに俺は昼飯を食べてなかったが……よく見てるな、俺を。まあ隣の席だからか。そんな隣の席さんは、ぼすん、とベンチでも隣に座ってきた。

「……」

公園で、マツクか。そういえばアリアとも初めて会った頃、一緒に食べたな。だが、そのシチュエーションは今回とは全く異なる。

あの時はおごらされた上に、ぶん殴られた。あの凶暴女に。

今回はおごられた。天地がひっくり返っても人を殴らないであろう、菩薩ぼさつみたいな子に。

で、マツクのニオイ成分には人間の食欲を刺激する作用があるらしく……俺にも、食欲が湧わいてきた。ようやく。

「じゃあ、いただくよ。ありがとう」

俺が袋を開けると、それを見届けてから萌も袋を開けた。

先には食べないってことか。貴族みたいに育ちのいい子だな。

でもリアル貴族ことアリアはあの時、受け取るやいなや開けた。育ちは関係ないのかも。食べ始めて少しすると、横から――

本当に済まなさそうな顔で、萌が語りかけてきた。

「昨日は……帰っちゃって、ごめんね。あのあと遠山君が心配で学校に戻ったんだけど、門のところでバットを持った矢田さんに睨まれたから……私、帰っちゃって……」

矢田さん？

ああ。レキの事か。自分でつけた苗字を忘れてたよ。

しかし、何してんだレキはレキで。こんなに人畜無害そうな萌を、なぜ睨むのか。

「私……蹴るとか殴るとか、暴力とか、大嫌い。あんな事する人たち、信じられないよ」
萌が、柔らかそうなほつたを膨らませて言う。

少し考えたが、これはケンカに負けた（ように見えた）俺を氣遣つての発言らしい。

「まあ、くだらないよな」

暴力の権化こと武偵の俺だが、ここは合わせつつ……

食べ終わったので、紙ナプキンで指の油を拭き取る。滑ってトリガーを引き損ねたら、困るから……いや、もうそんなこと考えなくてよかったんだった。帶銃してないし。

「食べるの早いね。おなか減ってたんだね」

クスクス笑う萌は……弱ったなこれ。ほんと、笑顔が温かくて、かわいらしい。誰も^{だれ}を幸せにするような、100%ピュアで純粹な笑顔だ。

「食事中は——」

——攻撃される危険性が高いからな。手も塞^{ふさ}がるし。だから早く食べるべきだ。と言いかけて、俺は言葉を飲む。そうか。食べるのが早い武偵^{くせ}の癖も、抜^ぬけなきや。それからしばし、無言の時間が流れ——

「あ、あのね遠山君。私……夜、家で悩んだの。ちゃんと、お礼を言えてなかったから。何か、その……私にできることがあったら、お礼をさせてほしいの……」

うわあ。道徳的な事を言ってきたなあ。

レキはお礼の1秒後には殺気を放ってたのに。

（しかし、お礼って……）

お礼の押し売りはワトソンにもされた事があるが、武偵の場合、昨日みたいな戦闘参加（？）は貸し借りにしたり、金品や任務依頼で清算してしまうものだ。

一般社会でそのお礼と言われても、よく分からんな。

「じゃあこのマックでいいよ」

これも金品だ。数百円分。あの茶番^{ちやばん}には値頃^{ねこう}だろう。

「そんなあ」

あれ、けっこうガツカリした顔になったな。萌^{もえ}。

これは……お礼というより、何か別の意図もあったのかな。

だが、毘^{わな}にはめようってんじゃないやなさそうだし……うーん……？

こっちが黙って考えてると、萌^もがチラッと俺^{おれ}を見てきた。

「あの。き、聞いちやうけど……遠山^{とやま}君は、その……矢田^{やだ}さんと……つきあってるの？」

は？ 矢田^{レキ}さんと俺^がが？

なんか脈絡^{みやくらく}がない事を聞いてきたな。

「違う」

答えた俺に、萌は顔全体で振り向き……ぼわーっとしてから……

てりやきマツクを圧縮^{ぎみ}し気味に、小さなガッツポーズをした。

一連の動作の意味は分からないが、しかし……

本当に、武偵^{ぶてい}の世界と真逆の世界にいる子だな。萌は。

ヤンキーにも話を通じると信じて何度も注意してたし、俺以上に平和ボケ社会の申し子
って感じがする。動作の一つ一つが隙^{すき}だらけだよ。

……でも、いい子だ。ホントにいい子だ。見た目も、かわいいし。

などと思っていると、ぽか。

いてっ。俺の頭に、どこからともなくドングリが当たった。頭上に木は無いのに。

「……？」

どのガキだ。と思って公園を見回すが、距離的に容疑者がいない。やるな。一切の気配を感じさせず、武偵の頭を狙撃するとは。

一方、ハンバーガーを食べ終え、少し冷めたコーヒーを飲みつつの萌は……

「私もね、恋人とかそういうのはいないの……あ、憧れてはいるんだけど……」
またチラッ、とこつちを見てきた。

なんだよ。女はすぐ、そういう俺のニガテな話をするんだよな。

「お前ならすぐできるだろ」

思った通りのことを俺が言っていると、

「……」

あれ。なんか、ガッカリしたような顔になった。

うーん。もう少し応援してやらないといけないのかな。

「……早く見つかるといいな」

と言うと、ふんわりしたボブカットの頭が恥ずかしそうにちよつと下がる。

「もう、見つけてるから……」

ああ、そうなの。

よかったね。

「と、遠山君はどうなの？」

「俺おれはそういうのは当分いい」
ヒステリアモード
不治の病を抱えてるしな。

「が、ガードが硬い……」

萌もえは俺から目を逸そらし、コーヒーを手にそんな事を呟つぶやいてる——昨日、殴なぐられてた時の俺のガードがバレてたのか？ 素人目しろうとめには分からないよう防御してたハズなのに……

少し焦あせる俺に、萌は頭上に豆電球を灯ともした感じで振り向いてきた。

「勉強はどう？ 前の学校と、習ってる事が違ってたらしない？」
すこぶる違います。

「……難しい。正直、ついていけないんだ」

実際、目下もっかの悩みは成績だ。

なので事実を言々と、萌は『やった！』って顔になる。

「あ、あのね。私、塾にも通ってるし、この間、新研ゼミしんけんの全国模試で89位だったの」
奇遇だな。

このあいだワトソンに聞いたが、俺はS・D・Aランク……通称超人ランク、つまり人間やめましたランキングのアジア89位に勝手にランクインされてるらしいからな。
しかし全国模試で89位ってのは、けっこうすごいな。頭いいんだな、萌。

「だからその、こんど教えてあげてもいいですか。勉強。私、現代文とか得意だし……」
などと萌が言ってきた時――

(……！)

――なんだ。

今、視線を感じた。

誰だ。これは……カタギのものじゃないぞ。

多分、武偵。

「ど、どう？」

などと聞いてきた萌に「ああ」などと生返事なまへんじしつつ、さりげなく周囲を探るが――
俺が勘付いた事に向こうも勘付き、気配を消したようだ。

……上手いな。一級品だぞ。今のやつは。

「じゃ、じゃあメールアドレス教えてください！」

横からは萌が、透明なビーズ飾りのストラップを付けた携帯を出してきてる。
ここで不自然に立ち上がって動くのは、逆に危険だ。自然に振る舞わないと。

と、俺は赤外線赤外線で萌とプロフィール交換をし――

やたら嬉しうれそうにビアンカ共々去っていく、その背を見守り……

さっきの視線の主もこの場から離れたようなので、立ち上がる。

こういう時は、尾行びこうされている可能性が高い。

なので、俺われは普段と違う方法で帰ることにして――

遠回りになるが、一応、都バスに乗って相手を撒まいておこうと試みた。

「……」

だが、乗った瞬間に会ってしまふ。さっきの視線の主と。

2人掛けのシートに1人で座っていた彼が、俺に、ニコリ。会釈して、ぼんぼん。自分の隣、空いてるスペースを指でタップしてる。

座れてることか。言われなくても座るさ。

「なんでそれを着てるんだ、不知火」

横に座りつつ、俺ひがしいけぶくろこうこうは東池袋高校の制服を着ていた不知火しらぬいにボヤク。

コイツ、腕を上げたな。さっきのは上手うまかったぞ。

もし狙撃銃そげきでも持たれてたら、撃ハジたれてた。

「ここじゃ話しづらいかな。主に、君が」

と、優男やさわとこが俺われに微笑ほほえむ。

これがまた、イラッとするほどイケメンだ。

「まあ、他ほかに乗客もいるしな」

事と次第によっちゃ、手が出るしな。今回は、演技抜きで。

区立美術館前で降りた、俺たちは――

ニコニコ顔の不知火の発案で、館内で話すことにした。

興味は無いが空^すいていた『ベネチアの美術展』に、2人で並んで入って……カラフルな仮面、ガラス細工といった数々の展示物の前を過ぎて……アリアの銃にも填^はめられていたピンク貝のカメオが並ぶコーナーで、不知火が足を止めた。

周囲には、誰^{だれ}もいない。

「お前、回りくどいんだよ。言いたい事があるなら言葉で言え」

一緒にカメオを見るそぶり、俺が不機嫌^{ふきげん}に切り出すと、

「よっぽど興味が無いのかな、学校に。僕も先週入ったんだよ。潜入捜査^{スリッパ}でね。だけど、気づいてくれないから」

つん、と、不知火は俺のブレザーをつついてきた。半分だけ振り向いて。

この笑顔もだが、動作の一つ一つがカッコイイ男だよな。いつも。

「――何の捜査だ」

「情報交換^{とおやま}しようか。遠山君は何？」

「……………」

「じょ・う・だ・ん、だよ。依頼主マールじからの守秘義務は最もポピュラーな規則だからね」
ニコリ。また不知火しらぬいが微笑ほほえむ。

首絞めたろうか。

「お前は昔から、少し人を食ったようなところがあるよな。武偵ぶてい向きだぜ」

「誉めてもらえて光栄だよ」

「どうだ。あの学校。住みづらくないか」

自分から喋しゃべらないヤツには、とにかく何か喋らせる。そして口を滑すべらせるのを待つ。
探偵科インケスタで習った方法だが、コイツに通じるかな。

「どうもこうも。普通に暮らしてるよ。でも女子が……ちよつとね。なにかと声をかけてくるんだけど、僕は女子はニガテなんで」

「お前とは妙にウマが合うと思ってたが、苦手なものが同じだったわけか」

「遠山君とみやまがそう言うとは夢にも思わなかったよ」

「もう否定する気にもなれんから、殴なぐらないでおく」

「はは、命拾いしたなあ。でも遠山君、これが普通の女の子と一緒にいる最後のチャンスかもね」

「……何の話だ？」

「それでこそ、遠山君だ」

なんか嬉し^{うれ}そうに、クスッ。不知火は、ちよつと吹いてる。謎多^{なぞ}き男だ。

「ただ、神崎^{かんざき}さんにはたまに連絡取った方がいいんじゃないかな。後輩^{こうはい}たちが八つ当たりされてるみたいだから。かわいそうでね」

さすが人格者。後輩^{こうはい}思いだな。

ていうか神崎^{かんざき}さん、俺^{おれ}でストレス発散できないからだなそれ。

「僕^{ぼく}からの話は、以上だよ」

「お前^{まへ}が話したかったのはそこかよ？」

「そうだよ。後は……そうだね。遠山君^{とんざん}の任務^{にんむ}のジャマはしないから、学校で見かけても普通に接してほしい」

「お前^{まへ}こそだぞ」

まあ……世の中は広いようで狭い。こういう偶然^{ぐぜん}は、間々ある。

顔見知りの武偵^{ぶてい}がそれぞれ別の任務^{にんむ}を受けたのに、赴任^{しゆにん}先^{さき}が同じというケース。

不幸^{ふこう}中の幸^{さい}いだったのは、俺^{おれ}のこれが本当^{ほんとう}の任務^{にんむ}ではないから――

不知火^{しらぬ}と戦^{たたか}う可能性^{けいごうせい}がゼロ、ということだ。

友達^{ともだち}を撃^うちたくはないし、不知火^{しらぬ}は落ちこぼれの俺^{おれ}と違って強襲^{アサルト}科^かのエリートだからな。

俺^{おれ}が転科^{てんか}して以降^い、不知火^{しらぬ}と素^{もと}の俺^{おれ}との差^さはどんどん開^{ひら}いた感じもある。

内偵^{ないてい}も多い武偵^{ぶてい}は筋肉^{きんくう}を不必要^{ふひつぎ}に膨^{ふく}れあがらせるような事はしないが、身のこなしから

分かる。フイジカルカラダにも磨きが掛かつてる感じた。

ヒステリアモード抜きで戦ったら、まあ、7・370%で取り押さえられるだろう。

だがまあ、もうそんな勘定をする必要もない。武偵高ぶていこうを辞めた今は、な。

「義務違反になるが、言っておく。お前と戦う可能性はない」

「聞かなかった事にするけど、安心したよ。僕も、君とは友達のままでもいいからね」

少し三味線ダマシにはなったが、俺おれも任務ひがしいけぶくろこうこうで東池袋高校にいるような事を言う——

不知火しらぬいは……、足先に美術展を後にしていく。

で、背中ごしにバイバイと手を振ってきた。

キザで……読めないヤツだな。そこは変わらない。

まあ、イケメンだと許されるんだよな。そういうのも。世の中、不公平だぜ。

夜、少しは勉強しようと思ったのに……かなめに、将棋に付き合わされた。延々と。

婆ちゃんばあがルールを教えたせいだ。

しかもかなめは、覚えてたてなのにやたら強い。もう9回も投了させられた。

「お兄ちゃん、その手は非合理的い！ 王手飛車角取り！」

「ぐッ……」

だいたい既に大卒すでの人工天才ジニオンと、高校すら中退しかけてる俺じゃ勝負にならん。

しかもかなめは武偵高のセーラー服を普段着にしており、短いスカートで正座してる。その太ももが目の前にあり、わざとかどうか知らんが膝ひざと膝が微つ妙うーに開いてる。

「なーにー？ 脂汗あぶらあせが見えるよ、お兄ちゃん」

指摘したら意識してるみたいで恥ずかしいから、かなめがちよつと動いたびへんな布がチラつかないかとビクビクしながら打たされるんだ。ある種の盤外戦術だろそれ。

それでヒスリヤ勝てるんだろうが、妹でヒスって双極兄妹アルカナム・デュオったら家庭崩壊。

ヒステリアモードのトリガーを知る爺ちゃんじいちゃんに知れたら、勘当は確実だぞ。

住む場所を失い、かなめと2人で逃避行とうひこう。人生すら投了せねばなくなる。ありえん。

「……ギブアップ、だ」

「えへへー、10連勝だあ。あっお兄ちゃん、電話鳴ってるよ」

と、かなめが俺が座布団の横に置いてた携帯を指してる。

やった。将棋をやめる言い訳ができた。

と思つたらメールだったんだが……電話だったってことにしよう。

「じゃあほら、お前も風呂入って寝ろ。もう遅いんだし」

「はあーい」

かなめは片手をあげて、お片付けモード。

俺はかなめの部屋から退散し、自室に戻る。

そして寝間着に着替え、電気を消して、寝しなに……

(携帯で思い出したが……一応、アイツに電話しとくか。不知火にも言われたしな)
と、アリアに電話すると――

「キンジ?」

お、やたら嬉しそうな声だ。

「アリアお前、あまり後輩をイジメんなよ」

「は? 誰から聞いたの」

「密告者の命はそんなに安くない」

「命までは取らないから教えなさい。ていうか……あんたがいないから、面白くないんだもん……あつ、こ、これは別に、その、そのその、別にあんたが好きとかそういう、意味じゃ、なく、もなくもなく、ない……ったら……ない! 風穴! このシケ面!」

うわあ。

俺はほんと、アリアの機嫌を損ねるプロだな。もう怒鳴られちゃった。

今さっき俺から電話を受けた時の上機嫌はどこへやらだ。

ていうか、シケ面って。たしかにシケた顔してるけどさ、俺。

「あのねえキンジ、あんた作戦行動中に電話するなんて……盗聴されてたらどうするの? 確かに日本のデジタル回線は堅牢よ。でも、部屋とか携帯そのものに盗聴器が付けられる

可能性だってあるのよ？ 武偵としての自覚が足りないわ！ そもそもあんたは——」

——クドクドガミガミ。いつものアリアさんだ。

なんか……ホツとする。叱られて安心するのも何だが、とりあえず無事が確認できたし。まあ、心配されるようなタマでもないんだけどな。コイツは。

しかし顔の事まで言われっぱなしでは腹が立つので、30分に及ぶ説教の終了後……

「……じゃあな。あ、そうだ。あと天気予報で明日は雪って話だったぞ。雪雲は意外と、雷を落とす。そして日本の雷雲は人からヘソを取るから、ちゃんと隠せよ」

「——えっ、ちよっと！ それホント!?」

よし。雷と聞いてパニックって、慌て出したぞ。

携帯を持ち直したようで、声もでかくなったし。逆襲開始だ。

「人に聞いてみる。みんなうなずくぞ。ちなみにヘソを取られたらお前は爬虫類になる」

「だってあたしこれ、制服——あんたも知ってるでしょ、オヘソ出てるのよ!? ちよっとッ！ 急に雷が鳴ったらどうしたらいいのよ！ 有効な対処法を——」

よし切ってやれ。ぷち。

ぷぷぷ。トカゲになつてうなされる夢でも見やがれ。

後で間宮に追われた時とかには、スカートから出た尻尾を切ってちゃんと逃げろよ？

……あれ。

未読メールがある。あ、さつき将棋の直後に来たヤツか。
確認すると――萌もえ、だ。

『今日は話せて嬉うれしかったです。おやすみなさい！』
と、書いてある。

隣の席の生徒との人間関係を損なうと、学校がより居づらくなるので……

『おやすみ』

一応、返信しといた。

すると……1分もしないうちに返信があり、

『明日もメールしていいですか？』

ときたので、『いいよ』とだけ返しておく。

白雪しらゆきみたいなメール魔まだったら困るが、まあ杞憂きゆうだろう。マトモな子だし。

ちなみに白雪が俺われのメールアドレスを知った日には、いきなり100通近く送ってきた
恐怖体験おそがある。しかも全部、文庫本にしたら2ページはある超長文で。

後で叱しかってやめさせたが、背筋が凍ったもんだよ。あの時は。

(しかし……気恥ずかしいもんだな)

任務や戦闘に関係のない女子のメールアドレスが、携帯に入ってるとか。

これじゃあ無意味にやりとりする事をお互い許した、仲よしみたいだ。

連絡する用事なんか、無いのにな。

と思つたら向こうには有つたらしく、翌日の放課後、萌からメールが来た。

公園では流れてOKしていたが、萌は本気で俺に勉強を教えてくれるつもりらしく——土曜日、家へ来て欲しいとの事だった。

目下、授業についていけないのは大問題だ。

編人生には前の学校で取得した単位が残るものだが、俺は武偵高ぶていこうでの一般教科の単位も心もとない状態だった。このままじゃせっかく転校したのに、また退学させられかねん。

（先生役が女なのは良くない事だが……四の五の言つてられん。教しえを請こおう）と、かなり寒い土曜日の朝——

家を出たら、ぺし。

いてっ。また頭にドングリが当たった。

庭の木を見上げるが、柿かきからドングリが落ちるわけもない。

「……？」

こいつは、ちよつとした超常現象だな。

しかし、そんなもんはイ・ウーの皆さんが嫌つてほど見せてくれた。このぐらい驚あたいくに値あたいせん。さあ、勉強の道を歩むぞ。と、俺は萌が送つてきた住所へ歩いて向かう。

（あそこだな）

約束の10時……その5分前、見えてきたのは……

普通の、としか言いようのないお家^{うち}だった。

だが新しくてキレイだ。少しだけ、お金持ちな感じもする。

「……あつ、遠山^{とみやま}君！」

寒い外では、手がかじかんだのを息であつたためながらの……萌^{もえ}が待ってた。

そして小さな門の前から俺^{おれ}の顔を見て、ぱあつと顔を明るくする。

「ごめん、待ってたのか。悪い事したな」

「う、ううん。今出てきたとこ。少ししか待ってないから」

萌はパタパタと手を振って否定するが……

15分は待ってないと、そんな鼻が赤くなるほど冷えないだろ。なぜ嘘^{うそ}をつく？

それ以外にも、萌の様子は少しおかしい。

アウターにはゆったりした毛糸のカーディガンを着て、冷えた手を指先以外袖^{そで}に入れて

いるが……薄いピンクと白でまとめたインナーとスカートは、冬にしちゃ薄着だし、短い。

公園で会った時の私服は、ロングスカートだったのに。

あと、髪型も普段とちよつと違う。前髪を多めにしてる。

「少しの時間でも、女は体を冷やしちやいけないんだ。風邪^{かぜ}ひいたら困るだろ」

そう言われた萌は、わああ、って感じになぜかテンションを高めて、

「私、男の子を家に呼んだのなんて初めてだから……でも大丈夫だよ。体は丈夫な方なの。幼稚園からずっと、高校も今のところ皆勤賞なんだよ」

冷えた事を、語るに落ちてる。

ちよつと、間の抜けた所もある子なんだな。

別世界の住人みたいに思えてたが、そこは少し親近感が湧いた。

落ち着かないのかストッキングのずれを直しつつの萌に案内されて、家に上げてもらう。中は、当然だが……火薬のニオイなんか一切しない。

そして、理子が歩き食べしたお菓子の破片がいつも落ちてた旧・俺の部屋とは異なり、とても清潔だ。

かなり温かい家の中で、萌がカーディガンを脱ぐ。

インナーは半袖で、柔らかそうな生っしろい二の腕が見える。

「遠山君。サンドイッチあるから、食べたくなったら言ってね。あと、クッキーも」

言われて見ると、ダイニングのテーブルには手作りのそれぞれにラップをかけたお皿がある。さすが家庭科部。上手だ。

「あのね、私知らなかったんだけど……今日、お父さんもお母さんも旅行でいなくて……」

ペットのビアンカも連れて行っちゃって、だ、誰もいないの。で、でもいいよ」

……？ これも不自然だな。家族の旅行なら、前々から知ってただろうに。

なんというか、両親ともに不在なのは分かっていた上で——知らなかったフリをしてるっぽい。素直なせいで、考えの分かりやすい子だ。

だがまあ、両親は勉強に参加するわけじゃないからな。別に構わない。

とはいえ……

今の発言から察するに、萌は知らないのかな？

じゃあ教えておこう。

「……いや、もう1人いるぞ？ そのクローゼットの中に、咲さん……妹さんが」

インクスタ探偵科の慣習で入ってすぐ見つけてたが、かくれんぼでもしてるのかなと思ってた。

だがそうじゃなかったらしい。萌は「えっ！」と声を上げて驚いてる。

「——バレたかあ！ でもよく名前まで分かったねえ！」

などと、クローゼットを開けて……黒いツインテールのちびっこい妹さんが出てきた。

名前までって……門の表札に書いてあったもんなあ。両親の名前と、萌・咲、って。

おれ俺も探偵科が長いせいで、一応そういうのを確認する癖がついちやってるし。

萌よりちよつと小悪魔系の、だが姉妹だけあって可愛い顔つきをした咲……中1ぐらいと思われる妹さんは、俺に駆け寄ってきて、

「うーん。ちょっと暗そうだけどカッコイイね。そうかあ、お姉ちゃんの好みはこういうタイプだったかー」

などと、もののすごくニヤニヤして俺を見上げてくる。

「こらー！ 咲！」

ぽか！

意外な事が起きた。萌の暴力。アリアの2000分の1ぐらいの威力のハンマーパンチ。

「咲のバカ！ バカバカ！ 今日は遊びに行つてつて言ったのにー！」

ぽかぽこ！ すかすかつ！

萌は逃げる咲を両手で連打し、空振りも連発してる。

「あんなあからさまに人払いされたら、この名探偵はごまかせませんよー。パパとママはガチで気づいてなかったけどね。めずらしく恋愛相談してくるし、とっておきのお化粧品出してきてたし、寒がりのくせに短いスカートはいちやつてるしいー！」

う、運動神経いいな、咲。

萌をおちよくりながらソファーを跳び越え、追う萌がスツ転んでる。

「おっねえちゃんっ、がつ、カレシ連れてきたー♪ 連れてきたー、連れてきたー♪」

どうやらレキと類似した誤解をしてるらしい事がよく分かる自作ソングを歌いつつ――

咲は安全地帯――俺の背後に隠れ、うひひ、と萌の様子を窺う。

立ち止まり、困惑する俺と目が合った萌は……

「ばか……咲のばか……！ 遠山君の前で、ヘンな事言わないで……！ お願いよ……」

あ、あーあ……

真っ赤にした顔を両手で覆って、泣き出しちゃったよ。

ちよつと、やりすぎだろ。

と、人の子だがそんな視線をナナメ後ろの咲に送ると……

「ご、ごめんよー。じゃあ外行く」

咲も根は良い子らしく、さっきいたクローゼットからダッフルコートを出し……

お姉ちゃんに歩み寄って、頭をナデナデしてあげてる。

こく、こく。と、なんだか分からんが萌も頷いてる。

「パパとママに黙っててあげるから500円ちょうだい」

こく。萌、買収されてる。

しかし金を払うからにはしっかり追い出すつもりらしく、萌は咲を体全体で玄関方向に押しやり始めた。

そして、こそ。こそ。なんか自分のブラウス、その背に手を回して搔くような仕草をした。何をしたんだろう？ 何かのサインじゃないようだが――

「おーっと、服の上からブラ直してますよー。普段使ってない、秘蔵のやつをしてるから

ですねえ。あの高い、カワイイのを」

ヒソヒソ声でイタズラっぽく言う咲（聞こえなかったが、読唇で分かった）に、ぽか！
萌はまた弱ハンマーパンチをくれて、全身で三和土に押し出してる。
咲はスニーカーをはいてから、べたつ。

その場に伏せ、なぜか萌のスカートを下から覗きこみ、

「こっちも上に揃えてる、お姉ちゃんやる気まんまんだっ」

また無声音で言つて、今度は萌に蹴られて……

そのヘロヘロのローが偶然いい角度で入り、やっと咲は退散させられたのであった。

萌の部屋は2階にあるので、先導されて階段を上るんだが……

「ゴ、ゴメンね。妹は推理小説オタクで、私のこと調べるの。やめてって言ってるのに」
などと言う萌さん、あなたにはそのミニスカートをやめてほしい。

けっこう急なこの階段を後ろから上がる俺の気持ちにもなってくれ。

なんとか階段をクリアして、『Moe』と書かれたメルヘンチックなプレートが垂れた
扉を開け……萌の部屋に、上げてもらう。

よし、念願の勉強できる環境を手に入れたぞ。先生つきで。

殺人的レベルで女の子の甘酸っぱい香りがする部屋だが、辛抱だ。

（しかし、いかにもな女子の部屋だな……）

本棚には『クリスマスキャロル』『嵐が丘』など女の子っぽい文学全集。それと料理や編み物、あとガーデニングの本。出窓の内側にはオルゴールに、テディベアのヌイグルミ。（こんな部屋……ドラマでしか見たことが無いぞ）

実在したんだな。この世に。こういう、女の子の優しさに満ちあふれた空間が。

綺麗に片付いた普通の机……は使わないらしく、手狭なお部屋の中央にはちょこんと丸い座卓がある。

そのそばには——これまた女子力の高い手作りクッションがし字に2個あった。

「じゃあ早速……」

俺がクッションの上に座って、鞆からノートを出そうとすると……

なんかガチガチの手つきで、萌は、ごそごそ。四つんばいといういけないポーズになり、本棚の下方からでかいアルバムを出してきた。

「……？」

「あ……あのね、これ、勉強の前に……ちよつと、ちよつとだけ……」

そして、隣にやってきて——すり。

萌はクッションをやたら俺の横に寄せてきて、そこに正座する。

な、なんだよ。よ、横に座られると……

思いのほか胸元が大きく開いてるブラウスのせいで、む、胸がッ……でかいッ。谷間が白雪しらゆきと同レベルの深さ……ッ……！ しかも、真っ白、まんまるッ……！

(す、凄え……ッ)

軍艦たとに喩えるなら、ワトソン・レキⅡ軽巡洋艦、かなめ・ジャンヌⅡ重巡洋艦、理子Ⅱ戦艦。そしてこれは白雪級のボリウム、弩級戦艦どきゅうなり。ちなみにアリアはゴムボート。何べん見ても、一切鍛えていないそのボディーはどこもかしこも柔らかそうだ。まさにやわらか戦車。などと戦艦と戦車の区別もつかなくなってきた俺の体内で——ドクンッ。い、いかん。ヒステリア性の血流が……！

慌てて視線を下げると——今度は冬なのに短くて薄手のスカートで正座している萌の、こ、こっちも白いつ、なんか付け根近くまで見えてる、ふと、ふとももが……！

「……あ……」

さらにいかんッ。

上も下も見回す形になった俺の視線を浴び、萌も恥ずかしそうにしてる。

だがブラウスの広がった胸元や、少しズリ上がり気味きみのスカートを直してはくれない。

(ていうか……恥ずかしいんなら、そんな服で近くに座るなよ……！)

それに少し怒りが湧わいたおかげで、血流はやり過ぎせた。

だがすぐに、

「あ、あのね。私、小学校の時……」

などとアルバムをめくる萌もえの生の二の腕うでが俺おれの腕うでに触れてきて、またびらされる。

運動会で大玉送りをしてたり、学芸会でお歌を歌っていたりの小学生萌は——輝くように愛らしいが、俺はヒステリアモードへの警戒心で写真に集中できない。

万一、万々一、ここでヒスってみろ。

こんなに写真を撮ってもらえるほど両親に愛され、隣の席のよしみで劣等生れつとうせいに勉強まで教えてくれようという聖人みたいな萌を……た、大変な日に遭わせかねない。

そんな事したら、良心の呵責かしやくで拳銃けんじゅうをまた握にぎる事になるぞ。自分の頭を撃ち抜くために。

（小学校、小学校……）

俺は、兄さんに戦闘技術を叩たたき込まれたり父さんに銃の運び屋をやらされたりしていた己おのれのかわいそうな幼少期を思い出して——白ら不愉快になり、ここもなんとかクリアする。だがアルバム終了後、

「……」

萌はうつとりと、黙って俺の横に座ったままだ。

俺は勉強のためにここに来たんだが、なんか、様子が違う。

一般校では『自宅で一緒に勉強する』という誘いに……別の意味があったんだだろうか？

「……」



つ、次に為すべき事が思いつかん。目的達成のために。

と思つてると、萌も全くそうだったらしく、

「と、遠山君。お、オセロしよ？ 私、ゲームは苦手で、いつも妹にやられちゃうのっ」
これまたガチガチ&唐突にそんな事を言ってきた。

立ち去ったフリだけして音をほとんど立てずに玄関から家に戻り、コッソリ少し開けた
そのドアの前でさつきからこの部屋を覗いている咲が、

『早くせんかー！』

などと呟いてるのが、室内の鏡に映ってたので読唇できた。

お、俺も同意だ。早くさせてほしい。勉強を。

その後、窓の外にはしばらく雪が降った。雷は鳴らなかったけどな。

「と、遠山君はどんな女子が好み……？」

などと萌から出る苦手系の話をいなしにいなし、その後には映画の話が始まって、そのの
趣味が意外と合ったので……2人でサンドイッチをつまみつつ、延々話し込んでしまった。

捜査系武偵の素質が感じられた妹さんも、呆れて音もなく出ていってしまい……

結局お勉強会は始まらないまま、なんと、もう外が暗くなっている。

という俺の気づきを悟った萌は、

「——あの。遠山君。晩ご飯、何がいい？ あとで咲は帰ってきちゃうかもしれないけど……お父さんとお母さんは、あ、明日の夜まで、帰ってこないから」
何やら勇気を出したカンジで、引き留めにかかってくる。

「いやいや。いま咲ちゃんは怒って出てったところだし。すぐには帰らんムードだったぞ。だから夜も二人つきりになりそうだし……ていうか今の、泊まっていけって意味か？ そんなの、さすがにありえんぞ。」

「ていうか、そろそろ女子の家にいるだけでもいけない時間帯だろう。世間的には。何をしたら勉強に移ってもらえたのか、俺が何を求められていたのか——
夜になるギリギリまで粘ったが、結局、分からずじまいだったな。」

「い、いや。雪もやんだみたいだし……帰るよ」

「……やまなければ良かったのに……」

萌は俯うつむいて独り言してる。なぜか、俺に聞こえる事を前提にした声のボリュームで。

「今日は楽しかったよ。また……」

俺は言葉を中断する。どうせ次回も勉強は教えてもらえないだろうから。

「うん、またね。また、きつと来てね」

萌は自分で自分を責めるような顔をして、なんでかちよつと涙ぐんでる。
今度はボソッと『私、魅力ないのかなあ』などと唇くちびるを動かしたな。

いや、萌は魅力的だよ。

何でいまそれを自問してるのかは分からないが、それは何らかの誤解に基づく自問だ。そしてその誤解を与えたのは、きつと俺。

一般常識が無く、特に女性の心理がまるで理解できない俺のせいだ。

そのせいで何か、俺は萌を傷つけるようなことをしていたのだろう。無意識の内に。だから俺は……もう、萌に誘われてもここには来ないつもりだ。

「クッキー、あげるね。今朝焼いたのだけど」

「ああ。ありがとう」

などと話しつつ階段を下り、シマシマの紙袋に入ったクッキーをお土産にもらい——玄関のドアを開けると、

「あ、待って。迷わないように、明治通りまで送るから」

どこまでも親切なことを言いながら、カーデイガンはおを羽織りつつの萌がついてきた。そこで、ぎゅ。

意を決したように顔を伏せつつ、萌は俺の手を握にぎってくる。

それも指と指を絡からめる、いわゆる恋人つなぎで。

——その時、

「キンジさんは自宅までの道を知っています。案内の必要はありません」

という声が出て、俺と萌はビクビクして道の方を振り向く。

「レキっ……！」

門の前に、レキが立っていたのだ。

それも、さっき降った雪をかぶり……それが溶けたらしく、ビシヨ濡れぬになってる。

「道は知っていますよね？」

俺に、レキが確認してくる。

そしてこっちに歩み寄り、ゾツとするほど冷たい手で――

俺と萌の手首を掴つかんで、離させようとした。

ここで意外にも萌はレキを睨にらみ、俺の手を強く握って離すまいとしたが――俺が、離す。そして俺はレキの肩を両手で掴み、やはりレキの体が完全に冷え切っている事を知る。

「お前、これ……何やってたんだよ、ずっとここに立ってたのか」

「ご心配なく。私の故郷では寒波ソドがよくありました。寒さには慣れています」

「そういう問題じゃないだろ！ 帰るぞ！」

すぐ風呂ふろに入らせて、温めないと。風邪かぜどころか肺炎になるぞ。こんなの。

俺は少し先の道路をタクシーが通るかかったのに気づき、駆け寄ってそれを停とめて――
運転手さんに諸々断もろもろってから、萌の家の前に戻る。

すると――

「警告します。キンジさんと関係を持つとしないでください」

「矢田さん、出しゃばらないで。みんな矢田さんが遠山君のカノジョだって言うけど……私、違うって知ってるんだから。あなたの正体は——ストーカーだよ、遠山君の！」

「聞き入れてください。私はあなたの身の安全のために言っているのです」

「な、なにそれ。何が言いたいのか？ ひょっとして、私を脅してるのか？」

「そうではありません。あなたは間違っている。あなたには——キンジさんのそばに身を置く資格が無い。私はそれを伝えるに、ここへ来たのです。あなたがしようとしている事は、自殺行為です」

「矢田さんはヘンだよ！」

表情に乏しいレキと、頬を膨らませた萌が、言い争ってるぞ。門の前で。

どうしたんだよ、レキ……！ あと、萌も……！

ワンメーターの近距離だが、寒風の中レキを歩かせるわけにもいかない。心配する俺をよそに、俺がジャケットを敷いたシートに座るレキは——

「何か渡された物はありませんか」

震えの一つもなく、平然と聞いてくる。

「……これだ。でも、別に仕掛け、盗聴、毒を疑う相手じゃないぞ」

運転手さんの前なので武偵の隠語でボヤきつつ、俺はクッキーの紙袋を出し――それを証明するようにピンクのリボンを解いて、中を開ける。

すると中には、さらにビニールで包んだチョコチップクッキーと……

サンリオシヨップで売ってそうな、キャラクター柄のカードサイズ封筒が入ってた。

『望月萌より』……？ 何だ……？』

小さい封筒の中にあつた手紙には、ピンクのカラーボールペンで何やら書いてある。やや丸文字がかつた、それでも几帳面に整った萌の字だ。

『遠山君へ こっそりこんなお手紙を入れちゃって、ごめんなさい』……？ 視力のやたらいいレキも、横目で手紙を読んでもるのが分かる。

『私は遠山君を初めて見た時から、会うたび遠山君の存在が私の中で大きくなっていくのを感じています』などという意味不明な冒頭を読み始めたところで、ぱっ。

レキに、手紙を取り上げられた。

『これは没収します』

『おいレキ。人の手紙を取るなんて、ありえんぞ。何に怒ってるんだ、さつきから』

『怒ってません』

『怒ってるだろ』

『……』

なんか、京都きょうとでもあったな。こういう会話。

ただまあ、レキはこう見えて意地っぱりだし、手紙は勉強とは関係なさそうだった。

ユーモラスな封筒に入れてたあたり、内容もどうでもいい事と考えて問題なさそうだ。

重要な事なら、口で言うだろうしな。あれだけ話す時間があつたんだし。

しょうがない。取り返すのは、あきらめるか。

帰宅してすぐ、レキを風呂ふろに入らせた。

爺じいちゃんは戦友会に、婆ばあちゃんはそのお供に、ジーサードは何をするつもりか知らんがホームセンターに出かけていたので、家はがらんとしてる。

かなめも、いない。最近是将棋クラブに出入りして『巢鴨すがもの受け師』とかいう二つ名で無敗記録を重ねてるとか。そのまま女流棋士とかになったりしてな。

なので部屋で1人、雑誌を見ながら番茶ばんちやをすすっていると……

「お話があります」

風呂から出てきたレキが襖ふすまを開けてきて、茶を吹き出してしまった。

「ちよつ……ゲホッゲホッ！ お前、なんでそんなカッコなんだよ！」

咳せき込みこみつ、俺われは回転受け身で部屋の隅すみまで退避する。

レキが――

なぜか俺のワイシャツの^みを羽織^はって、部屋にやってきたからだ。

いや。正確には、の^み、ではない。上から2番目しかボタンを留めてないせいでチラツと見えたような……どうやら、例の飾りっ気のない白木綿^{もめん}下着はつけてるようだ。

室内で正座し、ワイシャツの袖^{そで}から指先だけが出た手で襖を閉めたレキは、

「下着だけでは不衛生^{ふえいせい}と判断し、お借りしました。私は私服を持っておらず、防弾制服は転校を機に点検に出しています。体操着は学校に置いてあり、パジャマは洗濯機の中で、現在乾燥中です」

理路整然^{りろせいぜん}と説明してくるが――な、なんて姿だ。

理屈では説明しえない、ヒステリア性の刺激がある。

上半身はシャツに包まれてるのに、足^{またした}が股下1cmからつま先まで丸出しなんて。

適度に引き締まった、レキの子鹿^{こじか}のような脚線美^{きゃくせんび}がミントちゃんすぎる。

いかん、こっちの頭は理性を欠いている。逃げるぞ。

と思つたら、ぺしっ！

俺の眉間^{みけん}に、ドングリがぶつかってきた。

「痛^{いた}っ！」

「キンジさんにも警告します」

見ればレキの手には、Y字型のパチンコがある。

それもロシアの特殊部隊スベツナズが使ってる、軍用のスリングショットだ。

最近どこからともなくドングリが頭に当たると思ったら、犯人はコイツだったのか。

正座するレキの小ぶりなオシリの横には、小さな布袋があつて――

そこから次弾ドングリをパチンコの革パッドに据えたレキは、

「望月萌さんもちづきみえと、関係を持つとうとしないでください」

ぐいつ、ぴゅつ！　ぺしつ！

俺おれの眉間みけん、さつきと寸分たが違わず同じ場所にドングリをぶつけてきた。

「おいよせつ、そのパチンコはオモチャじゃないだろ！　目に当たったらどうすんだ！」

俺が抗議すると、レキはプライドを傷つけられたようにムツとした感じになり、

「私が狙ねらっているのは眉間です。そんな離れた場所に誤射はしません。いいですか。萌さん

と、交わつてはなりません。それは彼女を、間接的に殺害することになるからです」

ぺしつ！　また、全く同じ場所に当ててくる。

「ま、交わるって……どういう意味だよ！」

「ウルスの諺ことわざにあります。『狼おおかみは狗いぬになれない』」

ぺしつ！

「お前、狼を武偵犬ぶていけんって事にしてたくせに」

「そして、『狗を狼にしてはならない』」

ぺしっ！

俺の発言が終わる前に、ドングリ弾、当ててくるし……！

「狼と犬は交わる事ができます。子も、なします。しかし——」

ま、交わるって……そういう意味かよッ。何をバカな話を……！

「狼は狼のままですが、犬は二度と犬に戻れなくなる。狼に付き従い、安全な人里を離れ

——狼と共に苛烈な森に移り、犬は、生まれ持った弱さのせいで命を落とすのです」

ばんっ！

と、俺は爺ちゃん仕込みのちゃぶ台返しを決め、それを遮蔽物というか即席の盾にする。

そして跳弾射撃に備えて部屋の角まで退がり、窓に映るドングリ狙撃手の様子を窺う。

パチンコを置いたレキは、

「従って、狼は狼とのみ過ごすべきです」

とこ、とこ。付け根まで露出させた足で歩いてきた。

そしてドアを開けるようにちゃぶ台を引っ張り、きゅ。

体育座りして、座り込む俺と目線の高さを合わせてくる。

「……っ……」

まるで秘密基地ごっこで遊ぶ子供たちみたい——

自ら作った堡塁で硬直する俺は、盾の内側にレキの侵入を許す形になっていた。

フロ上がりのレキから、セツケンと——レキ特有の確かに少しミントっぽい香りがする。その鳶色とびいろの瞳ひとみは、俺おれを叱しかっているだけではなく、どこか思いやっているようにも見えた。「かつて私は、キンジさんに『人を殺すな』と命めいじられました。ですので、キンジさんがそれを犯す事を看過かんかしないよう——キンジさんと萌もえさんの交際には反対します。その代償行為には、今ここで、私を使つて下さつても構いません」

何だか難しい事を言いながら……

「でも私は、キンジさんが一般社会に溶け込もうと努力している事を知っています。その試行トライアルは、キンジさんにとって必要である事も。だから——」

レキはいつの間にか、俺に笑顔えんごを向けてくれていた。レキを見慣れた人間にじやないと分らない、ほんの少しの表情変化ではあるけど……とても、優しい、笑顔を。

そしてその可憐かれんな声こゑを潜め、

「——フレ、フレ、キンジさん、です」

などと、レキにとつては長いシャツの袖そでからちよこんと出した手を小さく握にぎり、両手を少しフリフリさせた。

それは多分『応援とはこうするもの』と、レキがレキなりに考えての動作……

そう——レキは、俺を応援してくれてるのだ。

それを理解した時、今までのレキの行動の意味がようやく分かった。この、鈍にぶい俺にも。



レキは……

ただ、昔の約束を守るためだけについてきたんじゃない。

レキは——バスカービルじゃ他の誰^{ほか}もが一笑^{いつしやう}に付^ふす、『一般人になりたい』という——俺^{おれ}の意志^{いし}を尊重^{そんじゆう}して、ついてきてくれたんだ。

どんなに俺が孤独になっても、たとえ自らそうなるうとしても、レキは静かに俺に付き従^{したが}ってくれる。今はもう他の誰のものでもない、レキ自身の意志^{いし}で。

萌^{もえ}にこだわる意味は、最後まで分からなかったが……

レキがそうして俺に滅私奉公^{めつしほうこう}してくれている事は、伝わってきた。

いい友達を持ったんだな。俺は。本当に。

これには素直に心を打たれたので、ハグの一つでもしてやりたいところだったが……そのYシャツいっちょのお姿じゃ、ちよつと、すみません。できません。

4 弾 鏡高菊代

爺ちゃん、婆ちゃん、俺、ジーサード、かなめ、あと居候のレキ——

全員揃って晩メシを食う日は、賑やかだ。

メンツはだいぶ入れ替わったが、両親や兄さんが住んでた頃みたいな勢揃いっぷりだ。畳敷きの居間の大ちゃぶ台を、男はあぐら、女は正座で囲む。体育座りが基本だったレキにも、婆ちゃんが正座を教えてある。

「こら、かなめ！ 魚をもっとキレイに食べろ、漁師さんに申し訳ないじゃろ！ それと米をこぼすな、米粒1つの中には88人の神様がいるんじゃないぞ！」

などと日本風にななめを躡けてる爺ちゃんも、楽しそうだ。賑やかなのが好きだからな。なお、婆ちゃんのレパートリーはほぼ全て和食。

今夜はサンマの塩焼き、根菜の煮付け、あと、御飯とシジミの味噌汁だ。卓上は極々平凡な、日本の夕食風景なのだが……

「で、兄貴は武偵をやめんのか？ そしたら自衛で人を殺せるぜ。やったな」

などとシジミを殻ごとバリバリ食うジーサードと、箸使いがまだ下手でサンマを余計にぐしゃぐしゃにしていくかなめは、アメリカ生まれの人工天才。



ていうかジーサード、髪を一日中ガッチリセットして暮らすのはいいかげんやめろよ。将来ハゲるぞ。服も相変わらず毎日珍妙だし、お前はレディー・ガガかつての。

「……」

で、俺の家へ来てからカロリーメイトばかりの偏食をやめさせられている横のレキは、泣く子も黙るSランク武偵。2キロ先に置いた文庫本を撃てる狙撃手だ。

ちなみに庭で残飯整理をしてる最近ちよつと太ったハイマキは、竜惺公・ブラド侯の元手下で……この辺の非凡さ、もうちよつとなんとかならないもんな。全員。

「おかわり」

と、俺はさっきのジーサードの発言をスルーしつつ、カラになった茶碗を突き出す。

婆ちゃんばかり働かせちゃ悪いので、我が家ではお櫃の隣に座った人がよそうルール。

なのでジーサードは「俺はお前の母ちゃんかよ」などとボヤキつつも飯をよそう。

と、そこに……ひゅつ。

魚のニオイに誘われたのか、季節外れのハエが飛んだ。

ここは1階だから、虫はしょうがないんだが――

と思っていると――さつ。

す、すげえ……！ 爺ちゃんがハエを掴んだ。箸で。宮本武蔵みたいに。

爺ちゃんは飛ぶハエと箸の速度を揃えて振り、後はそつと摘んでた。そうやるんだな、

ハエ掴みつて。

「一寸の虫にも五分の魂じゃ」

などと、爺ちゃんは殺してなかったハエを家の外に逃がし……箸を洗いに台所へ行くが……これにはジーサードもかなめも、驚いてるな。

驚いてないのは、ひよいぱく、ひよいぱく、と煮物を食べてるレキと――

「金三、大根おろしはもつといるかい？」

おっとりしたタレ目をニコニコさせてる、婆ちゃんだけだ。

しかし……キンゾー……？ 誰のことだ？

「……いるぜ」

あ、答えた。ちよつと赤くなつたジーサードが。

俺が「？」という顔をしてると、かなめが、

「お婆ちゃんがチーサンド、とか間違えて言うから日本名を作ってもらったんだよねー」
などとジーサードにニヤニヤしつつ説明してくれる。

金三。G III = Golden cross Third のほぼ直訳つてワケか。

だが本人のセンスには合わないのか、ジーサードはそれを今知った俺とレキを睨む。

「兄貴、あとレキ。おめエらはそれで呼ぶな。ジーサードでいい」

「分かったよ金三」

「分かりました金三さん」

「キンゾー」

最後のはかなめ。

「てめエら……！」

などとキレかけたジーサードだが……

居間に爺ちゃん（じいちゃん）が戻ってきたのを見て、おとなしくなった。

敬老精神はあるヤツなのかな。

その後、将来クラスメートと喋る機会が来た時に備え……バラエティー番組やドラマを見て、話題を学んでおこうとしたんだが……

目的意識を持って見るテレビはどうも面白くなくて、途中でやめてしまった。

（理子（りこ）ならこういうの、うまくやれるんだろうな……）

などと考えつつ、明日も学校に行かなきゃならない俺（おれ）は憂鬱（ゆううつ）になる。

この間ご自宅にお邪魔して以来、頼みの綱の萌（もえ）も俺（おれ）を前にするとなんてか「ごめんね、ごめんね、あの手紙は気にしないでね」などと泣きそうな顔をするし……

それにまた近づいたら、レキにドングリで撃たれるしな。

（そんな学校に行って、どうするんだ？ 分からない授業を受け続けても、意味がないし）

早くも不登校の予感さえしてきて、俺は自室で横になるが……最近、よく眠れない。

戦いが全く無い日常のせいか、神経がピリピリして不眠症^{ぎみ}気味なのだ。

これは、ある種の——危機、なのだろう。

精神が、緩^{ゆる}やかにだが腐りつつあるような感覚だ。

（なんでだよ……平和なのに……毎日が平和で、何の文句もないハズなのに……）
平和の中で、心が危険な状態になっていく。

武偵^{ぶてい}を辞めた人間は、みんなこの思いをしたんだろうか。

そういえば、緑松^{みどりまつ}校長が言ってたな。

『武偵高出身の生徒は、学力が低く、社会性が無く、転校先からの退学率も高い』とか。
その典型的ケースに陥^{おちい}りつつあるってワケか。俺は。

（いやいや、ダメだぞキンジ……！）

俺は起き上がり、上着を羽織^{はお}り、夜の縁側^{えんがわ}に出て頭を冷やす。

もっと頑張るんだ。萌^もみたいな、一般人になるために。何かしよう。

（萌……そういえば、萌は……）

——それで思いついたぞ。彼女は塾に通ってるとか言ってた。

俺も塾に通おう。塾なら、デキない生徒にも合わせた授業をしてくれるしな。

予算的には心もとないが、武偵高時代の装備品を売却すれば何とかなるだろう。大手の予備校なら、学費もそれなりだろうし。

勉強が楽しくなれば、学校も少し楽しくなるかもしれない。

ていうかそもそも、勉学のための施設だしな。学校とは。

などと、新アイデアを検討していると――

「……？」

けっこう広い我が家の庭の片隅で、灯りをつけて……ジーサードが何かやっている。

米軍のシャベルで、せつせと土を穿り返しているな。

長時間やってて暑くなったのか、ムキムキの上半身には山岳迷彩色のシャツしか着てい

ない。いつもあんなに派手好きなヤツなのに。

つかかけを履いて近づいた俺は、そんな挙動不審者に話しかけてみる。

「おい金三。人ん家の庭を勝手に掘るな」

「殺すぞ。ていうか、おめえん家の庭なら俺ん家の庭だろ」

「ジャイアンかよお前は……」

ジーサードがそこに揃えていた物資を調査すると――

どうも、ビニールハウスを作ろうとしてるようだ。種は、トマト……？

「何やってんだよ？」

「見て分からねエほど頭が悪いのか、兄貴は。土壤を改良して、野菜を栽培してゐるんだ。部下を総動員して収穫サイクルを早めるとかの品種改良中だが、原産種はこれ。熊本産の『権堂農園の塩トマト』だ。1個やる」

などと、突き出してきたのは……小ぶりな、トマト。

キレイなので嚙かじつてみると、塩とかいう名前のくせに甘い。うまいな。

「最近分かったのさ。このトマトでのみ自然に合成される、果糖・リコピンとかの複数の有機化合物がクロスカップリング反応した突飛な化合物が——俺の『活命制限』を解除する事がな。だから俺は世界各地に畑を作つて、コイツを一生食う」

そういえば……ジーサードの体には、生みの親でもあるロスアラモスによつて反逆防止システムが仕込まれていた。秘密にされている何らかの化合物を定期的に摂取しないと、命に差し障るといふ非人道的な方法で。

その化合物が、判明したんだな。よかつたじゃねえか。

「それで農作業か。お前も大変だな」

「同情すんなら手伝え。まあ、水、塩、ビタミン、人間が生きていくにはそもそも色んなモノが必要だ。俺の場合は、それが1つ多いつてだけさ」

テキパキとビニールハウスを組み立て、手順よく種蒔たねまきをしてるジーサードは……こういう事もうまいな。さすが人工天才だ。

「品種改良の結果、根にはジャガイモが出来るようになった。それはジジイにやるんだ」などと、また爺ちゃんに懐いてるような事を言うので……

「ていうかお前、爺ちゃんの前では丸いよな。唯我独尊ゆいがどくそんなタイプかと思ったが」

などと、こんな時間にトマトを食べながらの俺はツツコンでみる。

生きる伝説、ダイハードには敬意を払うって事さ」

「ダイハード？ 映画か？」

「兄貴なあ……英語ぐらい出来るよ。Die Hard殺し難しって意味だ。テストに出るぞ」

「断じて出ねえよ」

「日本が大昔、アメリカと戦争やってたのは知ってるか？」

「それはさすがに知ってる」

「ダイハードってのは米軍が旧敵対国に認定し、戦後、再び戦争になっても特別な対処をするよう定めてきた『殺せない兵士』——正確には、殺すには莫大ばくだいな人員・経費が必要で

割に合わねえって兵士だ。アメリカは彼らに終身、警戒を怠らない。存命者は日本に3人、ドイツに2人、ロシアに2人、イラクに1人ってとこだ。ていうか兄貴は……孫のくせに、マジで遠山鐵とおやまがねの武勇伝を知らねえのか？」

などと、ジーサードは俺を見下すので……

「……爺ちゃんは、戦争の話をしたがらないんだ」

「お前には彼への敬意が足りないぜ。俺が教えてやる」

と、農作業を一段落させたジーサードは……

俺に、爺ちゃんの話が始めた。

爺ちゃんは旧帝国海軍少尉^{しょうゐ}。零戦^{ぜろせん}のパイロットだった。

北太平洋アリューシャン列島付近で米軍の激しい対空砲火に晒^{さら}され、母艦^{ぼかん}へ帰投^{きとう}できず、凍^いて付^つく海に墜落^{ついらく}したところまでは知ってたが……

その後、なんと泳いで渡った旧日本領——雪に覆^{おお}われた小島、ブレスク島で——運悪くその翌々日にやってきた米軍上陸部隊300人を1人で食い止めた。

おかげで、島にいた100人の軍人・民間人が無事に撤退できたというのだ。

だがその戦いで負った傷は重く、再び自分の足で立てるようになったのは終戦後。

『墜落時の傷で、そのまま終戦まで病院だった』『仲間^{きり}は霧^{しろう}に乗じて撤退できた』……と本人からは昔適当に話されてたが、そっちの方が史実であって欲しかった……！

（何してくれちゃってんだ、爺ちゃんッ……そりゃアメリカもトラウマになるぜ）

我が家^{わがや}で最も平凡じゃない人間は、爺ちゃんだったな。

今はその部屋で、寝っ転がって屁^へこきながら競馬雑誌を読んでるけど。

非凡一家から独立するためにも、立派な大人にならねばならない。

だから、まずは学校についていけるようにしなければ。

なので俺は先日思いついた通り、放課後に明治通り沿いに在る大手予備校『河井塾』を見学しにいった。9階建てのビルが丸ごと塾とか、すごいな。俺の知らない世界だ。

「ていうか、なんでお前がついてくるんだよ……」

「キンジさんが歩く方向に歩いただけです」

と、相変わらずコミュニケーションが困難なレキがついてきてしまったので、仕方なく上層階の面談ルームで2人並んでいろいろ説明を受けたんだが……

人のことは言えないものの、似合わないなあ。狙撃の天才児が、学習塾とか。

（さて、どんなコースに通おうかな……）

もらったパンフレットを見つつ、とりあえず帰ろうとエレベーターに乗ると……

「？」

ん、なんだ。

同じ階でさつき講義が終わったらしい生徒が、いっぱい乗ってきた。

エレベーターの奥に押し寄せられてパンフから目を上げれば、女子。女子。女子ばかり。

それも東池袋高校の制服、しかも同学年だぞ。

なんだこいつら。俺とレキを狙って乗ってきたのか？

「——私たちは『転校生カップル後押しし隊』です！」「もうねえ、遠山君と矢田さんは

見ててイライラするのよっ。いつくつつくの」「今くつつこう！ ほら」

などと女子たちは俺とレキに話しかけてきつつ、異常に盛り上がった様子……！
ていうか、後押しし隊、って。理子並にネーミングの語呂が悪い集団だなっ。

「お、おい。俺とレキはそんなじゃ……」

などと釈明しようとしても、「やだーやっぱり名前呼び捨てにしてるー！」「矢田さんも遠山君の事『キンジさん』って名前で呼ぶもんねー」などと皆さん逆に大フィーバー。

（な、何だこれッ……？）

一般校では、男女が名前で呼び合うのもダメだったのか？

などと混乱する俺の方に、集団になると強引になる女子どもは、ぐい、ぐい。
まず取り囲んだレキを、俺に押しつけてくる。

狭いエレベーターの中なので、逃げ場もなく……女子には抵抗もできず……

レキと俺は正面を向き合ったまま、密着させられてしまった。

「ほら！ 遠山君、矢田さん、勇氣出して！」

などと、女子たちが俺の右腕・左腕を掴み――

レキを俺が抱きしめるような姿勢にさせてしまう。

（な、何がしたいんだお前たちッ……！）

講義が終わって人のいない階でエレベーターを停め、『開』ボタンを押し続けて開けた

ままにする係までいるし。こいつら、熟に俺^{おれ}たちが来たのを見て計画を練ってたんだなつ。
「……っ……！」

押しくらまんじゅう係の皆さんは、レ、レキの背中を思いつきり押し——しかも、俺の腕をより強く引っ張ってレキを強く抱くような体位にさせていく……！

「……」

さらに、無表情なレキの手まで俺の背中に回させた。

今や完全に抱き合ってる状態だよ。俺と矢田^{やだ}さん。

だが、レキのアリア以上ワトソン以下の胸は比較的安全な……って……

……レ、レキっ……！ さ、最近少し大きくなってないかこれ？

それに気づいてしまった時——ドクンッ——！

し、した。しちまった。ヒステリア的な鼓動が。この異常な状況下でも……！

「チュウ！」「ちゅうう！」「チュウだ！」「ちゅうちゅう！」「ちゅー！」

お前ら……ネズミの集団かつ……！

だが俺とレキは、そのネズミ娘たちに追い詰められた状態だ。

チューコールを連呼する後押しし隊をなんとかしないと、帰宅できない。

それに——このままレキの胸が押しつけられてたら、危ない。レキも、女子たちも。

ヒステリアモードになったら、俺は音速で大変なことをしかねないんだ。全員に。

「レ、レキ、顔を上げて胸を反らせッ……！」

と言うと女子たちはそれを『キス準備』と思ったらしく、黄色い声を上げる。

だがこれは違う。急場凌ぎではあるが、胸と胸の密着度を和らげるための姿勢替えた。

という俺の計算高い意図が、なんとレキにも伝わってなかったらしく……

レキは、上を、向かない。

俺の胸元に顔を埋めたまま、ジッとしている。

「どうしたレキ、言うことをきけッ」

またネズミっ娘たちを昂ぶらせるような事を言いつつ、レキに再命令すると――

レキは、ちよつと顔を横に逸らしてから……

……ちら。

上目遣いで、俺を見てきた。

みんなの前で俺とキスする事になると誤解したらしい、その顔が……

……恥じらっている。

これもレキらしい僅かな表情の変化だったが、俺には分かった。

レキの中に微かな感情が萌芽している事は、修学旅行Ⅰ以降、勘付いていたが……

この、恥じらい。

恥じらう、レキ。

か……かわいい。

いつも表情に乏^{とほ}しい分、こ、この破壊力は――

――ドクッ――！

(フッ……)

俺^{おれ}は――小さく、苦笑いした。

レキ。レキ。レキはそんなにも……かわいい女の子だったんだね。

でも知ってたよ。こっちの俺はね。君のかわいらしさは。出会った時から。

女の子の秘めた愛らしさに気づかない事は、罪。世界に対する罪だ。

恥じらう姿だけで俺をヒステリアモードにしたご褒美^{ほうび}に――

レキが氣を失うまで熱く、何百回もキスしてあげたい。でも、

「――君たちの気持ちは分かった」

そう言つて、俺は俺とレキを囲む複数の女子たちの力の流れを読み――

左右の人差し指を立て、失礼ながら女性の袖^{そで}に触れさせてもらいつつ指だけで操作していく。自分たちが体に入れている力で、全員氣をつけの姿勢になるように。

「あ、あれっ？」「？」「な、なにこれ」「えっ……？」

女の子たちは、いま自分たちがされた事に目を丸くしているが……

ヒステリアモードなら、合氣道^{あいきどう}のように人の動きを誘導する事なんか自由自在なんだ。

どんな姿勢だって、君たちに取りらせる事ができる。君たち自身の力でね。

「でも、女性の気持ちは全員等しく尊重するべきだ。ここじゃ——レキの気持ちもある。人前でされたい子がいたら、手を挙げてごらん？」

レキを右腕で抱き寄せつつ、顔つきの鋭く変わった俺が女子たちに微笑むと——
ぽんぽんぽぽーん！

と、全員等しく真つ赤まかになった。直立し、ポカーンと口を開けたまま。

ふむ……いたずらネズミちゃん達は、これでもう大丈夫そうだな。

手を挙げようとする子には、丁寧ていねいに笑顔を向けてそれを制しておこう。君は確か、市居いちいさん。自分を安売りしちゃいけないよ。

そして俺は……

右腕でレキの頭を顔に抱き寄せるような仕草をして、その耳に唇くちびるを寄せる。

ヒステリアモードの頭が、余りに余った余剰メモリで勘付よじよういてしまったからだ。

俺とレキに、彼女たちの他にも尾行おしゆきがいた事を。

「——大した相手じゃないが、レキは近接戦ができない。ここは退避して、もう、お家うちへお帰り」

と言うと……

「……………」

俺おれに続けて状況を察したらしいレキは心配そうな手つきで、俺のブレザーを掴つかんでくる。
 「……レキのご主人様は、そんなに弱いかい？ それともレキは、俺の夜遊びを許さないタイプかな？ ああ、そうだったらレキと過すごす将来は少し不安になる」
 俺は目を閉じ、レキの耳元に言葉を刷すり込こむように語る。

「……………」

『レキと過すごす将来』という辺りで、レキはまた少し感情——期待感を持つような仕草を見せ、ふるふる。首を横に振った。よし、許可が出たようだ。

「おやすみ、レキ。一緒に来てくれて、嬉うれしかったよ」

俺はレキを腕の中から解放し、1人、エレベーターから出ていく。

ドアを開けたままにする係の隊員ちゃんの手も、そつとボタンから外してやり——
 閉まるドアの隙間すきまから、俺はウィンクでバイバイした。

音で判断できたが、中で卒倒そつとうした子もいたみたいだな。鼻血を出してる子もいたし。
 ああいう幼い子たちには、こっちの俺の視線は刺激的すぎたのかも。

そして、俺の頭の中で——レキが言ってたウルス族ことわざの諺ことわざ、その前半——

（『狼おおかみは、狗いぬになれない』……）

それが、リフレインされる。よくない予感と共に。

十分な間を置いた後、階段で1階に降り――

ビルの正面ドアから夜の明治通り、それに沿う歩道に出る。

そのガードレールの向こうには――

「遠山アー！ 金だアー！」

「忘れちゃいねえだろうな！」

案の定、例の改造バイクに乗った藤木林と朝青が俺を待ち伏せしてた。

藤木林は安物のメリケンサック、朝青は金属パイプを装備してる。

周囲には、塾帰りの生徒が多い。困ったことに、東池袋高校の生徒も。

少し、ギャラリーは多いが……まあいい。

今回はヒステリアモードだが、やる事は同じだからな。

ショートコント『とっても強い不良2人組と、ただ暴力を振るわれる俺』、第2幕だ。

レキが巻き込まれないよう、時間は稼ごう。

「危ないよ。ケンカになりそうだから」

などと、まず野次馬の女子たちを人払いしていると……

「他人事じゃねえんだぞオラッ！」

と、藤木林が俺の肩を掴んできた。

ので、その力で振り回されたようなフリをしつつ……朝青の膝蹴りをわざと受け、体を

折り曲げる。蹴る角度が悪いので撫でられたような感じだが、痛いよ、というアピールだ。

その後、ちよつとイタズラ心が出て――

俺は藤木林が朝青に、朝青が藤木林に打撃を当てるような位置に2人をうまく誘導してやったりもした。もちろん、武器を使わず繰り出してきた打撃だけ。

その同士打ちで涙目になった2人が、また3分もたず息切れした頃……

（あれは――ちよつとマズいな）

俺の目が、車道のそれを捉えた。

運転席・助手席を含めた全ての窓に、車内が全く見えないほど黒いスモークシールドを貼った――違法だ――黒塗りのトヨタ・センチュリー！。

あれは……誰でも分かる。

ヤクザの車だ。

最初から少し離れた車道脇に駐車しており、この茶番劇を見てたのは知っていたが……それが、接近してきている。

……センチュリーは俺たちのそばに改めて停車し、後部座席の窓を少し開けた。

「お前ら、よしな」

まさかヤクザが背後に来てたとは思ってもよらなかったらしい藤木林と朝青が――揃って、真っ青になる。

「その御方は、格が違うよ」

どうやら俺のことを言ってるらしいその女の声に……俺も少し、青くなる。ヒステリアモードの耳で、分かってしまったからだ。

成長したのか少しハスキーになっているが……この声は……マズいな。本格的に、だがその声の主とは別に、

「オレにやらせな」

助手席の窓を開けて腕を出していた、ガタイのいい男が出てきた。

ハードロッカーみたいな革ズボン。丸刈りの金髪頭。耳にはピアス。

冬なのに黒のタンクトップなのは、腕中に入れた刺青を見せびらかすためだろう。

（この男……昔、雑誌で見たことがある）

国際ボクシング連盟・環太平洋ライトヘビー級元王者、伊沢レオンだ。

南米コロンビア人とのハーフで、褐色肌の筋骨隆々とした体格は日本人離れしてる。

かつては暴走族のリーダーとして関東一円で知られたワルだったらしいが、ボクシング引退後はヤクザの子分になってたのか。

こんな、明らかにヤバイのが出てきてしまったので……

遠巻きにケンカを見ていた塾の生徒たちも、怖がるような声を連ね出した。

「——安心しろ。ご指名は俺らしいからさ」

すっかり怯^{おび}えてる藤木林と朝青^{あさお}がパニックに陥^{おちい}らないよう、笑顔を向けてやると……

「おい、どっちを見てる」

手をポキポキ鳴らして近づいてきたレオンが、俺^{おれ}の襟首^{えりくび}を掴^{つか}んで顔を上げさせてきた。そして威嚇^{いかく}するように眉^{まゆ}を寄せ、俺の顔を覗^{のぞ}き込み――

「ああ。強いなこのガキは」

それが分かるんなら、喋^{しゃべ}るなよ。

今俺が軽く腕を上げるだけで、お前、舌を嚙^かんで大変な事になるぞ。

だが……相手の性能を見抜く能力は、無くはないんだな。

プロとアマの中間、セミプロってどこか。

「やめといった方がいいと思うぞ」

一応、警告してやるが――

「心配すんな、俺も強えからよッ！」

ドスンッ――！ と、レオンはボディーに一撃入れてきた。

近過ぎて威力は半減してるが、これは確かにホンモノの味だな。

俺は襟首から手を外させ、よろめくフリ――も不要そうなので、普通に少し距離を取る。

（藤木林と朝青程度のヤツだったら、ごまかせたのに……）

コイツは、ごまかせないな。

やらなきやならない、みたいだ。

野次馬やじうまの生徒たちを巻き込まないために、逃げるワケにもいかなさそうだし。

(……チクシヨウ。せっかく、一般人に溶け込もうとしたのによ……)

俺の中で、沸々と怒りが湧いてくる。

みんなが見てる前なのに——正体、バレちまうじゃねえか。

だが、もう破れかぶれだ。言い訳は後で考えよう。ドツキリの撮影だった、とか。

「……」

腹を括ると、俺の頭が別人のように冷静になっていく。

「——おらッ！」

叫んだレオンは上手な体重移動で距離を詰め、バツ、とジャブを繰り出してくる。

だが、ダメだ。お前はボクサー。蹴り技キックも、組み技グリップリングも、極め技サブミッションも、投げ技スロウイングも、建造物や

地面グラウンドを使った戦い方バイティングも知らない。徒手CQCをやるなら当然知ってなければいけない、頭突きや

噛みつきバイティングのやり方バイタルオーガンさえ知らない。人体急所の知識も生半可。

所詮しよせんは、スポーツなんだ。お前の技術は。

そして悪いが、俺はボクシングにつきあうつもりもない。

バツ、バツ！ と、レオンは確かに鋭い左フックするとや右ボディを繰り出してくるが——

「レオン、左。警察が来たぞ」

それを捌きつつの俺が声をかけると、レオンはハッと左を振り向く。前に出た俺はその振り向きを引き戻すように、パンツ！ 掌底で顎を叩いてやった。

「ッ……！」

レオンは脳震盪を起こした足つきになり、よろつ、と後退した。

もちろん警察なんか来てない。ブラフだ。簡単に引つかかるヤツだな。だがレオンはまだやる気満々のようなので、

「コーナースト。使わせてもらう」

俺は軽く走ってジャンプし、駐車禁止の標識の柱に飛びついて身を縮め――

――ドンツ！

ある種の三角跳びみたいな形で、レオンの顔面に腕・背・脚を一気に伸ばした両足蹴りを叩き込んだ。

こうすれば、誰の筋力でもパンチではボクサーにも出せない威力を生み出せるからな。わあっ！ という生徒たちの歓声が上がり、

「うおッ……！」

道端にあったゴミ箱を派手にひっくり返して吹っ飛んだレオンは、尻もちをつくようにダウンし……ゴンツ……！ アスファルトの地面に、後頭部をぶつけた。

おいおい。受け身も取れないのか。お前。

「~~~~ツ……！」

レオンは、吐きそうな顔でその場をのたうち回る。きっと景色が歪ゆがんで見えてるだろう。後頭部はボクシングじゃ一度も殴なぐられた事ないだろうからな。ルールで禁止というか、保護されてるから。だが実戦の格闘じゃ最も狙ねらわれる急所の一つだ。

「……ううッ……」

ガードレールにすがりつくようにして、レオンはなんとか上体を起こす。だが立てないらしく、座り込んだままだ。

そして恨みがましい目で、俺を睨にらみ上げてくる。おー怖い怖い。

レオンを見下ろす、俺――

勝敗が明らかに決したその光景に、生徒たちは大盛り上がりだ。

「クソッ……」

自分のボクシングが通じないと分かっただけらしいレオンが、背中――革ズボンの尻の辺りに隠していた銃に手を伸ばしたので、

「……それはやめておけ」

さっきそれに気づいていた俺も、レオンを睨みつける。

ケンカに実銃とは元気なもんだが、俺相手にそれはマズいと思うぞ。

「び、ビビったかよ」

俺おれのセリフを誤解したらしいレオンは、ニヤリ、と笑って……掴つかんだな。銃グリップの握把を。

「違う。手加減しにくくなるだろ」

と言う俺のセリフに――

レオンは、眉まゆを寄せる。

俺の発言がウソじゃない事、少なくともその可能性がある事が分かったんだろう。だがヤクザが後ろで見てる前では、退ひけないらしく――

「――死ねやオラあッ！」

ヤケクソになって、オートマチック拳銃けんじゆう――マカロフPMを向けてきた。

キヤー！ と、周囲から悲鳴が上がる。

生徒たちが、「ピストルだあ！」などと叫んで蜘蛛くもの子を散らすように逃げ出す。

レオンの腕、その筋肉の予備動作を見た段階で動いていた俺は――

左利きのレオンの腋わきが開く左側から肉薄し、銃後部を右手で掴み、撃鉄ハンマーと銃本体の間に指を突っ込んで――まずは発砲できなくした。

続けてレオンの浅指屈筋せんしゅくきんを左手で押さえて力を抜かせ、銃を取り上げる。取り上げると

同時に弾倉マガジンを抜き、スライドを引いて薬室チエンバーの銃弾を出し、空撃からちして撃鉄を落とす……

……って、いけね。

これ、5秒以内にやらないと蘭豹らんびょうにボコられるからクセになってた。強襲科アサルトで何百回も

やらされた『お片付け』の手順を、流れるようにやっちゃったよ。人前で。

——それを見たレオンが、舌打ちしている。

「てめえ……プロだな」

「さあ何のことかな」

予備弾倉スベアマガジンは持っていないようだったので弾無したまなマカロフを返してやりながら、俺は……

不思議な、爽快そうかい感を感じていた。日々イライラしてたのが嘘うそのように。

お遊び程度とはいえ戦い、銃に触れたからだろうか。

「だから言っただろ、やめといった方がいいって」

レオンの丸刈り頭を、軽く撫なでてやりつつ——

俺は、わりと最初から視界すみの隅に見えていたものに改めて溜息ためいきをつく。

——萌もえが、いたのだ。ギャラリーの中に。

萌は今、ガラス張りの河井塾かわいじゆうくの玄関、その内側から……

『いま、私の目の前で何が起こったの？』

って感じの顔つきで、こっちを見てる。

萌は塾にも通ってる、と言ってたが……ここだったとは。ツイてない。

ていうかそんな、明らかに無関係じゃない目で俺を見るなよ。

ヤクザは目ざといんだぞ。自分が俺の関係者だってバレたらどうするんだ。

とはいえ……声をかけて追いつくわけにもいかない。それこそバレるからな。

「——あそこだァー！　こらァー！　何をやっているかァー！」

あ……

さっきのはブラフだったが、ホントにお巡りさんたちが走ってきたよ。駅方面から。

塾はこの騒ぎに知らん顔だったが、通報はしてたってワケか。

だが人通りが多いので、警官たちはそれを掻き分け^{かきわけ}るのに難儀^{なんぎ}してるようだ。

そこで、センチユリーの後部座席から——

「ありがとうね。イキがつてる鉄砲玉^{ガキ}に薬をくれて」

かなり現代風にアレンジした和服を敢^あえて着崩し、明るい色の長い茶髪を花飾りで結い上げた、女のヤクザが降りてきてしまう。

少し目つきは悪いが、美人、というか美少女だ。大人っぽく見えるが、16歳だからな。

「……俺^{おれ}は医者じゃない」

俺は、この美人さんを知っている。

最初から、声で分かっていた——鏡高菊代^{かがたかくよ}。指定暴力団・鏡高組^{かがたかくみ}の姫君^{ひめぎみ}だ。

「遠山^{とおやま}。デートしよ。今の遠山は、断らない遠山だよ」

などと言う彼女も、俺を知っている。

知り合いなのだ。俺たちは。それもちよっと困った縁のある。

「……」

どうもこの場合は、ただ帰してもらおうわけにはいかないみたいだな。

ヒステリアモード中の俺にとって、女性のお誘いは断りづらい事だし――

「分かった。デートしよう。音がしたら、菊代だって裏工作に経費がかかるだろうし」

センチユリーのドアの隙間から俺にU・Z・Iを向けてる運転手について軽くボヤきつつ、

俺は菊代と……後部座席に乗り込んでいく。

「き、菊代さん、俺もッ……」

まだ痛むらしい頭を押さえつつ乗ってこようとしたレオンに、菊代は、

「我慢しな。男だろ。ほら警察が来るよ。足で走りな」

と言いつつ残して、ばんっ。車のドアを閉めた。

レオンはフラフラと、しかし割とうまく路地裏へ逃げていった。

警察からは逃げ慣れてるっぽい。捕まる心配は無さそうだな。

「デートのお誘いなら、こんな手の込んだ事をしなくても良かったんじゃないか？」

「拉致された事にしといた方が、遠山も楽かと思って」

転回するために動いたセンチユリーのミラー越しに、菊代は――

見てるな。萌を。やっぱりバレてたか。

萌は塾の先生に一旦、ビルの奥に退避させられていたが……俺が車に乗った後にまた出てきて、歩道でキョロキョロ探してる。明らかに、俺を。

「あれ、遠山のこれ？」

と、菊代はイラッとしたような顔で小指を立ててきた。

「知らない女性だよ」

「遠山、女を守る時のセリフも変わってないね」

俺のセリフにウツトリした表情をして、菊代がしなだれかかってくる。

昔を思い出す、ヒプノティック・プワゾンの香り——俺は香水はあまり好きじゃないが、これは……嫌いじゃない。そして菊代は、それを知っている。

窓の外には横断歩道、自販機、水商売への勧誘の看板なんかが流れていく。

道にいたポン引きのお兄さんたちが、道を行くこの車に頭を下げてるのが分かる。

（ややこしくなってきたな……）

俺の肩に頭を寄りかからせてハミングしてる菊代に、

「事務所ですか、五代目」

と、顔に大きな傷跡のある大柄な運転手が聞いた。

「ちがう。紅寶玉。幹部は全員集合」

昔のクセ通り、菊代は少し斜を向いて命令している。

そのスネるような仕草は案外カワイイので、俺はこれ以上ヒステリアモードが強化されないよう……

「いい車だな」

菊代から体を離しながら、車内を見回す素振りをした。

実際、センチュリーはトヨタ車の中でも群を抜く高級車だしな。初めて乗った。

「あげる」

「……遠慮するよ。しかし偏見だったかな、菊代はベンツの方が好きかと思ってたけど」
「持ってるけど、遊び車よ。外車はイザって時に故障したら困るでしょ。アメリカでも、マフィアには日本車の方が人気あるわ。でも、遠山が欲しかったらあげる。ベンツも」

菊代……俺が持ち物を替^はめるとすぐ『あげる』と言うクセも、変わってないな。

「——しかし、菊代に見つかるとはな」

俺は苦笑いでお茶を濁し——不忍通りに入った窓の外を見ながら、話題を変える。

「ふふ。極道の情報網をなめてもらっちゃ困るわ。藤木林と朝青が、組の末端と知り合いでね。ケンカの自慢話が、アタシの耳にも入ったの」

菊代がタネ明かしをすると、携帯でゴソゴソ話していた運転手がフロントミラー越しに俺を見てきた。

「客人。レオンどうします？ もう捕らえてありますけど。えーっと、分かりやすく言い

ますが、指でも……」

「お、おい。解放してやれよ。うち……前いた所じゃ、あのぐらいのケンカは5分に1回起きてたんだ」

「はい、分かりました」

危なっかしいなあ。この人たちは。警察より耳がいいし、手が早いし。

見えないところでレオンを救ってやった俺は、頭を振り……

「お父さんのお仕事は知ってたけど、跡を継いでたんだな」

「先代、殺られたの。抗争。今はアタシが組長やってるの」

菊代は――

俺が神奈川武偵高附属中学に通っていた時代、ヒステリアモードの事に目ざとく気づき

……事あるごとに俺を独善的な『正義の味方』として使役していた女子だ。

将来は課報科あたりで裏社会に通じた武偵として育成される予定だったが、育成途中でドロップアウトしていた。

彼女が急に転校した理由は、家庭の事情――とされていたが、そういう事だったのか。

「ふふっ、嬉しいな。アタシのヒーローと、ディナーだ」

などと、菊代は年齢よりも艶っぽい目を細め……

センチユリーは昼光色でひっそりとライトアップされた、しかし、けばけばしい看板の

あるレストラン前で停とまった。

『紅寶玉』は千石にある、一見さんお断りの店。

それもそのハズ……この建物はレストランのある地下1階から、妖あやしげな雰囲気が漂たう地上階までみんな菊代のもの。関係者しか足を踏み入れない、いわゆるヤクザビルなのだ。

「……」

店名通りルビー色、それと金色を基調に華々しく飾られた店内は——当然、貸し切り。

下着が見えそうなほどミニスカートにしたチャイナドレス姿のウェイトレスさんたちや、色とりどりのノースリーブのロングドレスを着てニコニコと出迎えてくれたホステスさんたちも……やたら美人揃ぞろい。竜宮城りゅうくうじょうですかここは。

だが、金魚の水槽がそこそこにあるのは——『毒殺とかしませんよ、疑うなら食べ物をここに入れてください』という剣呑けんおんなアピール。やっぱり、そっち系のお店だな。

と、店内を歩く俺が少し眉まゆを寄せると……

「お店、気に入らなかった？ お寿司とかの方がよかったかな」

金魚みたいに長い和服の袂たもとをヒラヒラさせつつモデル歩きする乙姫様おと姫様が、聞いてくる。

「いや、新旧の火薬のニオイがして落ち着くよ。でも……ちよっと、女性が多いかな」

「——おいお前たち、バックにいな」

俺おれが一言文句を言っただけで、菊代きくよはお姉さんたちを一気に人払いする。

そして奥に広がる、これでもかと内装に金をかけた広い個室に入ると――

そこには大きな回転テーブルがあり、食べきれないほどの料理や美酒が並べてあった。さっきの車の件もそうだが、気前の良さを見せるのはヤクザなりの親愛・歓迎の表現。それを固辞こじすると、彼らは傷つくとか。

(まあ、ベンツに比べれば安いものか……)

なので俺は、皆さんお待ちかねの表情でこっちを見ていた――揃そろいの金バッジを付けた鏡高組幹部の皆さんと、同じテーブルにつく。

うわあ怖いなあ。武偵高ぶていこうの教務科マスタースに入った時の3割ぐらいだけど。

「……………」

俺が座ると、じろり。みんな改めて、こっちを見た。

そして一様に「ああ」と、納得したような顔をしてる。

しないでくださいよ。納得。

(ヤクザは、すぐ見抜くからなあ……)

武偵用語では『彼我ひがの戦力比較』と言うが、要は、相手が自分より強いかわ弱いかを判断するのが早くて正確なのだ。彼らは。

それもそのはず、ヤクザは弱い者から吸い上げ、強い者に取り入れる能力が無ければ……

のし上がれないのは当然、最悪、死ぬ事になるからだ。ガチで。

なので組・関係には武偵の潜入捜査が難しい。大抵、専門の武偵に任せる。

「——ね？ いい男でしょ」

隣に座った五代目組長こと菊代が、ニコニコと俺を一同に見せてる。

「ええ。いい目してますよ、客人は。死線を何度も越えてきた目です」

菊代のボディガードも兼ねてるらしい運転手が、爺ちゃんと同じような事を言う。

「あつはー。ヤクザより怖いや、この少年」

ピンストライプのスーツを着たナンバー1ホストみたいな美男子は、頭の後ろで腕組みしながら笑ってる。軽いノリで、女なら誰でもクラッと来そうな顔で。

「うん。ヤサイ顔してるけど、迫力があるぜ」

菊代の紹介によると、これは元レスラーのスキンヘッド。刺青が首の辺りまで見えてる。

「そうですね。こんな子がいるとは、世間は広いもんです」

組のブレンらしい、一流商社のビジネスマンみたいな長身男。東大法学部卒。

俺を興味津々の目で見てる、この場の全員が——

もう、理解してるみたいだ。レオンはさっきその判断を誤ったワケだが、この俺とやり合いになったら、1分以内に自分たちが全滅する事を。

まあ、そこは面倒が無くてよかったかな。また腕試しとか言われたら被害者が増えるし。

「遠山、何か飲む？」
とおやま

菊代が、テーブルにあったXOのビンに手を伸ばす。
きくよ

「酒は飲まない。未成年だし」

「ふーん」

と、今度は煙管キセルを取り出した菊代が、それを紅を塗った唇くちびるに咥くわえると――
すぐに、隣のホストみたいな幹部がマッチで火を入れてる。

「……いつもこうだから、使う機会がないの。デュポン」
ライク

苦笑を向けてきた菊代に「よせよ、煙草たばこなんか」と小声で言うと、菊代はすぐに煙管を
ホスト風に渡し――水の人ったコップを取って、ぱしゃ！

既に東大卒すでが吸っていた細葉巻シガリロに水をかけて、消火した。

「よしな、彼がお嫌いなんだから」

自分の事は棚に上げて、人を怒る。この辺の責任転嫁せきにんてんかっぷりはアリアを彷彿ほうふつとさせるな。
今の光景には少なからず違和感があったが、それはさておき――

「――嫌いなのは、そういうのだけじゃない」

俺おれは一味を見回し、改めて、菊代を見る。

幹部連中を煙たがった俺の態度に菊代はすぐ気づき、

「お前たち、帰れ」

今夜はそもそも紹介だけという事だったのか、幹部たちもおとなしく席を立った。ちよつと、おとなしすぎるのも気に掛かるが……な。

「……遠山、どうかな。アタシ、その……中学の頃ころより、美人になったでしょ？」

ヒステリアモードの俺と2人つきりになると、菊代は……

さっきまでの大人びた態度から、少しモジモジするような態度になった。

「——事実を否定はしないよ」

と返すと、俺の隣で顔を伏せ、「くうーこれよこれこれ！」という感じにこっちの俺を満喫まんきつしてる。そしてゴキゲンな表情で、

「アタシのママがね、女優だったの。カナダ人の。最近、似てきたんだって」

「そうだったのか。それで髪の色が明るいんだな。でも、中学の頃は誰もそんな話はしてなかったぞ」

「両親の話なんて、アンタ以外にしないから」

菊代は赤くなりつつ、ライチに手を伸ばす。

（しかし……うーん……食べるべきかな、このご馳走ちそう）

普通人なら暴力団と食事しただけでも問題になるものだが、武偵ぶていは別。そういう判例はんれいも出てる。で、俺の武偵免許はまだ生きてるから……

食べ物をムダにすると爺ちゃんにボコられる事もあり、俺はフカヒレに少し箸をつける。これが……異常に美味しい。料理人の腕もいいんだろうが、素材に金がかかってる。毒は入ってないが、こんな美味しい物を食べるのは体に毒かもってレベルだ。

「——じゃあ、まずはさっきの迷惑料。このぐらいでいい？」

菊代はトランクを出し、中に詰まった3千万円ぐらいの札束を見せてくるので……

「いいよ、この食事だけで」

と、断っておく。ホントは1、2枚欲しいとこだけど。

高級車、絢爛なレストラン、そして現金——

こういったものを供与する行為は、ヤクザにとっては宣伝費みたいなもの。

きつぷの良さを見せ、各界の有力者や仲間に自分たちのビジネスが上手くいってる事をあからさまにアピールする。看板とかを堂々と出せない代わりにな。

さっきの幹部達も、一目で分かるベルサーチのスーツとダイヤモンドのちりばめられたロレックスを身につけていた。

それこそコントみたいな光景だったが、あれはヤクザのセンスがみんなして悪いのではなく『高価な金額が分かる』事が彼らにとって重要だからだ。

それにしても、菊代の組は分かりやす過ぎで——儲かりすぎ、ってカンジだけだな。

「——最近のヤクザは、目立たないようにするものなんじゃないのか？」

北京ペキンダックをつまみつつ、その辺の事をちよつとツツコんでみると……

「うちは古いからね」

……ちよつと隠し事をしてる目つきで、誤魔化ごまかしたな、菊代。
ヒマ潰つぶしに、もう少し探ってみるか。

1皿分ぐらい食べるまでは帰してもらえなさそうだし。

「今は何をやつてるんだ？ 菊代の家では」

「うふふ。さて、何でしょう。麻薬ヤツキヨク、守代みかじめ、総会屋、闇金融ヤミキンの取り立て……うちでは全部、御法度ごはつとにしてるの。お祭りの屋台だったりしてね」

「はぐらかさないでくれ。自分が何の金で買ったものを食べたかぐらいは知りたい」

俺がシラけたような顔を見ると、菊代は俺のグラスに烏龍茶ウーロンチャを注ぎつつ……

「——中国」

これはホント、という感じの声で言ってきた。

……なるほど。この中華料理店は、その仄めかしだったわけか。

そしてそれが、どうも本題っぽい。

「この業界、海外との連携には保守派と共存派がいてね、鏡高組うちは元々共存派だったの。大きな組織みたいに太い仕事シノギも無かったから。それに……アタシが跡目あとめを継いでからは、うちは国内じゃほとんど無視されるようになったのよ」

まあ……そうだろうな。

映画なんかと違って、現実の極道は徹底した男社会。

リーダーの器がある人材が居なかったのは幹部たちを見て分かったが、やむなく菊代が跡を継いだ事が——ハンデになってるってワケか。

「知ってる？ 海外で人気がある日本のものは、車やアニメだけじゃない。ヤクザもなの。どこの国のマフィアも、大歓迎してくれるのよ」

それは俺も知ってた。

国際的にも、裏社会では資金力がそのまま力となる。

ヤクザは、なんだかんだ言ってまだ力のある日本円を潤沢に持っているからな。

「それで一発逆転を狙って、中国の大手と組んだの。今あるお金はマカオのカジノ経営に出資して、そこから吸い上げたものよ。だからもちろん合法。安心して食べて」

グローバル企業の実業家みたいな表情で、菊代が流し目してくる。

「どこと組んだんだ。チャイニーズ・マフィアの名前は、いくつか知ってる」

「すごい武闘派よ。遠山も氣に入ると思う。じゃあ、会おうよ。今、たまたま中国側の幹部が日本に来ててね。なんかそこも世界的な抗争の真っ最中らしくて、アンタみたいなスーパーマンと友達になりたがってたし」

菊代は今、組織名を伏せた。これは、中国側に気を遣っての事だな。

となると、相当な大手だ。くわばらくわばら。

「遠慮しとくよ。中国語なんか喋れないし、俺はスーパーマンじゃない」

「アタシは知ってるんだから、ごまかしてもムダだよ。やっぱり、極道は気負いの稼業。
あたしたちも、強い人が欲しい」

「……俺に、組に入れて言ってるのか？」

「そうだよ。義兄妹の杯を交わそう」

あっけらかんと、そんな事を言ってくるので……俺は苦笑するしかない。

「妹は間に合ってるよ」

「いたの？ 武偵さんなの？」

「ああ。最近まで知らなかったけどね」

「じゃあ妹さんも一緒に。ヤクザも人材難だから、武偵も中途採用するわ。自衛官とか警察官とかと同じで、違和感なく組織に入れるし。きっと幹部会議も全会一致よ」

「か、幹部会議って……」

「遠山なら日本一、ううん、世界一のヤクザになれるよ。アル・カポネみたいに、歴史に名が残る。それで、私は、その、奥さん……な、なんちゃって」

なんちゃって、と言いつつ、けっこうマジっぽい目で見てくるので――

「――俺はヤクザにはならないよ」

食べてから言うのも何だが、ここはきちんと宣言しておこう。

こっちは一般人になるため、必死の思いで特訓中なんだからな。

それを裏社会で歴史上の人物にとか、勘弁してくださいよ。ありえん。

「そう……そうなの。がっかりだなあ。猴老師（まゐろうし）もガツカリするだろうなあ……」

などと、菊代（きくよ）が……これはちよっと口を滑（すべ）らせた感じで、人名を出したな。

——猴（コウ）。

それが向こうの幹部の名か。

菊代も、今のは少しミスったと思ったらしく……

また、俺（われ）が杯（さかずき）を交わすのを断ってしまったせいで、それきり、その話は進まなくなる。

「じゃあ、今夜はこの辺で……」

失礼するよ、と言おうとした俺のセリフを先読みして——

ビジネスの話をしていたさっきまでとは違う、年相応の女の子らしい顔をした菊代は、

「——昔のこと、覚えてる？」

思い出話に切り替えてきた。

まだヒステリアモードは続いているので、これをつっぱねるのは気が引ける。もちろん、菊代もその辺りの事を分かった上での話題替えだろう。

なので俺は温かい茉莉花茶（ジャスミンティー）を淹（い）れてもらいつつ、

「ああ……覚えてる」

「中学ではアンタの体質に気づいて……色々して、色々させちゃったよね。ごめんなさい。でも、もう時効に……してくれる……?」

済まないとは思っていたらしく、菊代は小声で聞いてきた。

ここでブチブチ言うのも男らしくないので、

「よほどの事でない限り——女性の罪は、罪と思わないようにしてる」

もう昔の事だし、実際、時効にしてあげる事にした。

俺が女にイジられるのは、いつもの事だしな。アリアとか理子りこから受けてる被害を一一記録してたら、ノートが埋うまる分量になるし。実際埋まったし。

それに恨み辛みとか、ネガティブな事で時間を浪費するのは人生のムダ使いだ。

忘れてあげるとしよう。菊代、謝ったし。

「あ……」

菊代はヒステリアモード的な俺のセリフに、嬉しさと恥うずかしさを交えたような表情をして……落ち着かないそぶりです、ミニスカートみたいな和服の足を組み替えた。

(……っ……)

い、いかん。ヒステリアモードが強化されてしまった。今の一瞬で。

改造和服の構造上、菊代の股またの正面には高くまでスリットが入って……

艶めかしいその辺りがチラツと見えてしまったのだ。

そういえば玉藻は昔、和服には下着をつけないとか言ってた――

「……あの頃アタシ、イジメられてた。学校で」

という菊代の話に合わせて、俺はしばし口を閉じて過去の追憶に逃避。心を落ち着ける。

元々……菊代は斜に構えたところがミステリアスな学校一の美少女だったから……

学校の男子にとっても人気があり、それを女子にひどく僻まれていた。

そして、神奈川武偵高附属中は言うまでもなく武偵の養成機関。もちろん菊代のような

裏社会に通じる人材を育成するメリットは大きいのだが、基本、ヤクザは目の仇だ。

そして、菊代の親はヤクザ。

それをあげつらわれて――菊代は、女子にイジメられてたのだ。

……その点は、同情しないでもない。子は親を選べないからな。

「アタシ覚えてるよ。むかし水着をイジメっこに切られた時、遠山が仕返ししてくれた」

「俺も覚えてる」

それが、最初だったからな。

あの時は、陰険な女子たちが菊代の水着に仕掛けをした。

水に入ってからしばらくすると切れ目が開くように、一度切った菊代の水着を水溶性の

糸で改めて縫っていたのだ。コッソリと。

水泳の授業は男女別だったが、それで半裸はんらにされた菊代は帰るに帰れず、シャワー室に閉じこもって泣いていた。夕方まで。

で、それを偶然、掃除係の俺が見つけてしまい……

ああー、そこからはちよつと、思い出したくないな。

瞬時に制服を持ってきてやり、着替えた菊代が泣きやむまで、優しく、優しく、次第に甘く宥なだめて——事情を聞き出し、あとは女子たちをヒステリアモード的なやり方で……

もちろん殴なぐっちゃいけないが、全員、俺の言いなり状態にしまった。

一列に並ばせて菊代に謝らせたところまでは良かったが、菊代も含め、彼女らも武偵のタマゴ。すぐみんなそれぞれ俺に対する調査を始め、後に造反ぞうはんを起こし……

その後、便利な『正義の味方』君が誕生している。

「でもね、これは覚えてないかもしれない。遠山は……今みたいな遠山じゃない時でも、アタシを守ってくれた事があったんだよ」

かあ……と、さつきより赤くなって……

菊代は、意外な事を言った。

(あったかな……?)

という顔を俺がすると、

「教室のロッカーから、お金が盗まれた時。アタシ、盗とってないのに、犯人扱いされたの。」

でもその時……遠山とおやまが……」

あ、ああ。

家訓で『借りは忘れるな、貸しは忘れる』って言われてたから、敢あえて忘れてたよ。

「ああ、そんな事もあったね」

その時は確かに、普通の俺おれだったな。

みんな武偵志望ぶていのくせに、あまりにも決めつけが酷ひどいんで——「証拠ひどがないだろ」って一喝いつかつしたんだ。それで菊代きくよは釈放され、後々真犯人も見つかった。

そういえば、それから……

菊代は俺をヒステリアモードにして使役しえきする事を、しなくなったんだよな。

「あの後……あのね、アタシ、アンタにね……」

「？」

急に口ごもり始めた菊代が、横から上目遣うわめづかいでこっちを見てきた。

そして何秒か、黙ってから——

「ラっ……ラブレ……ラブレター出そうとしてっ……何度も、書いたけどね……何度も、破いたの。いろいろさせた負い目があったから、どうしても出せなかった」

なんか……

危険な話題になってきたな。さっきとは別の意味で。

「遠山。今日、組の店で食事した事は——誰にも言わないでおいてあげる」

菊代は俺の腕に手を置きながら、2つめの本題を切り出すような顔をした。

「そのかわり、あ……アタシと、つきあつて」

「な、何？」

「——武偵高やめたんでしょ？ 潜入捜査だつたら、遠山が銃も持たないで塾通いなんかするハズないもん。ドロップアウト同上、つきあおうよ」

俺の腕に置いた手、菊代は力を込めてくる。

ヒステリアモードの頭ではぐらかそうとするが、相手はそのヒステリアモードの構造を知っている菊代だ。いつも理子に上手を取られてしまうのと同じで、やりにくい。

「いや、俺は——」

と、向こうを傷つけないような言葉で断ろうとするや否や——

「——分かってないな。遠山。アタシはアンタを脅迫してるんだよ」
やっぱり……

ワルだな。菊代は。

「秘密をバラされたら、普通の学校にいられなくなるでしょ」

いま一番こつちが打たれたくない手を、すかさず打ってきた。

というか、頭の回転が速いんだよな。昔から、この子は。

「……」

俺おれが黙っていると、菊代きくよは『勝った』という笑顔になる。

「ホントはこんな脅迫みたいな形じゃなく、したかった。でも、アタシなんかじゃ遠山とおやまと格が違うから」

「そう思うなら、格を上げてからまたおいで」

「そういうところが……遠山……」

だきつ。

菊代は思いつきり、俺に抱きついてきた。

密着されて、俺はさらにヒステリアモードが昂揚こうようしてしまうのを感じる。

菊代は、中学時代から色気があった。家が家だっただけに、大人びてるのだ。今現在も、高校生離れした色っぽさがある。小学生だと思われるアリアに少し分けてやれないかな。

ヒステリアモードなのに慌ててしまった俺が、そんな事を考えていると――

「会いたかった……会いたかったよ。アタシの、正義の味方。だから遠山を車から見た時、ホントに遠山に会えた、奇跡だ、って思った……!」

——どんどん興奮し出した菊代は、目を潤うるませて俺に語ってくる。

普段の俺なら、腕を振り払ってダッシュで窓から逃げるところだが……

ヒステリアモード時は、できない。それでは女性を傷つけてしまうから。

(マズい……！)

ベッドもソファも無い部屋だったから、無警戒すぎた。

それに俺は相手がヤクザとあって、戦闘系の警戒に意識を割きすぎていた。
こ・っ・ち・系・の警戒を、怠っていた。そこに隙が出来た。

いや、それは菊代も計算ずくだったんだろう。このしたたかさ、まさに理子並だ。

「車の中じゃ、アタシ平気な顔してたけど——ずっと胸が高鳴ってた。もう……頭の中、遠山の事しか考えられないっ……」

傷つけないよう——言葉で、なんとかしよう。

きつとできる。こういう時の『対処法』も昔、兄さんというかカナに教わってるしな。
とはいえここまで踏み込まれると、五分五分の賭けだぞ。

負けたら、義兄妹の契りだ。しかもこんなイスの上で。

「……じゃあ菊代。質問させてくれ」

だがもう、この橋を渡るしかない。行くぞ……菊代！

「なに？」

「付き合って……俺に、何をさせたいんだ？ 菊代は」

俺は柔らかな笑顔で、菊代の、少し色味がかった瞳を覗きこむ。

「えっ……？ そ、それは……いや……そんなの……言えないし」

よし……！

思いつき真っ赤になつて顔を伏せ、言葉に詰まってくれた。

「何だい？ 言つてごらん、菊代？ さあ……菊代」

これはかつてアリアにも水上バイクの上で徒に使つた事がある、『啄木』。

言いつらい言葉が回答になっている質問を用意し――

即答されてしまえばアウトだが、一度答えられなければこっちの勝ち。

敢えて繰り返し聞き、女性の羞恥心を煽りに煽る。そして、答えさせない手法だ。

勝率を上げるため、新幹線ジャックの時に白雪に使つた『呼蕩』を加えたのも良かった。

催眠術だからな。要はコレ。

「……それはその、と、遠山が考えてよ……そしたらアタシは、なんでも……」

俺の術中に填り、力なくもじもじする菊代を――

花を手折らぬような手つきで、そつ……と、俺は自分から離させる。

なんとか、渡りきつたようだ。ホントに危ない橋だったけどな。

菊代は……きゆううつ。

イスの上に体育座りして、膝にオデコをつけて丸まってしまった。

色っぽいなじが、真っ赤になつてゐる。いろいろ想像しちゃったんだね。きつと。

それは、ゴメンよ。



知恵熱を出してる菊代きくよを優しく、甘く、ナデナデしてあげてから……

「じゃあ、帰るよ」

勝利宣言をして、席を立つ。

菊代は、イスの上に体育座りで自分の膝ひざに伏せたまま。追ってくる素振りそぶりは見せない。ナデナデが気持ちよくて、寝ちゃったのかな。

「——一つ、言っている？ 遠山とわやま」
寝てなかった。

「何だい」

俺おれは絢爛豪華けんらんこうかな部屋から出ていこうとしつつ、背中で語る。

「アンタ、死んだ魚の目して塾に入ってく時より、ヤクザと会合してる時の方が活いき活いきしてたよ」

「……」

それは……否定、できないな。

俺には、こういうアンダーグラウンドな世界の方が気が楽だった。

あの、眩まぶしくて目がくらむ学校よりは。

——菊代は顔を伏せた姿勢のまま、

「学校には何も言わないどくわ。でも武偵崩れなんて、社会不適合者の、ただの底辺だよ。高校なんかやめて、ヤクザになろうよ。条件があるなら、何でも交渉に乗るから……」

まだ俺を組に入れる事を諦めてなかったらしいな。

「ごめんな。俺は、交渉そのものをしない。ヤクザは裏切るからな」

「遠山もでしょ。武偵高を裏切って、普通の社会へ降りたんだから……痛いところを、ついてくるぜ。」

これも否定できず、俺は――

ただ黙って、去ろうとした。

見事な不死鳥が彫られた大きな木のドアを開けた時、

「知ってるよね？ アタシ、気は短い方だよ」

菊代の、声。

少し振り返ると、伏せたまま……膝に置いた腕と前髪の隙間から、こつちを睨んでいる。一部の男子に『ゾクツてくる』と人気のあった、菊代が悔しがるとき鋭い目だ。

「……知ってるよ」

「知ってるよね？ アタシ、あきらめも悪い方なの」

「それも知ってる」

「あとね――実は、一途なの。これは知らなかったでしょ」

「ああ」

「アタシも今気づいた事だから」

ピッ、と、菊代きくよは鋭い手つきで――

袂たもとから出したカードを、手裏剣しゅりけんみたいに投げてきた。

それが、カツッ。俺おれの目の前、木のドアに突き立つ。

当たらない事が分かってたから避けなかったが、1、2本、俺の髪かみも掠かすめて切れた。

「……？」

見れば、プラチナ色のクレジットカードだ。角は刃物のように削つてあるが。

「――暗証番号、1111だから。好きなだけ、今日の迷惑料に使つて」

「さつき要らないって言ったよ。知ってるかな？ 俺は、しつこい女性はあまり好きじゃないんだ」

「じゃ、じゃあ、しつこくしない。遠山とおよま……おやすみ」

きゆう、とまた顔を伏せて、菊代はバイバイと手を振ってきた。

（とりあえず、この場は逃げおおせた……だが……）

それも、ヒステリアモード頼みだったな。

一般人になろうと努力して、ある程度なったつもりだったのに――
ヒステリアモードは残っていた。

武偵高^{ぶていこう}から逃げられても、菊代から逃げられても……

俺は、逃げられないんだろうか。俺自身から。

(きつと、逃げられない)

いや、絶対逃げられない。俺が、俺であることから。

だとしたら、俺は……

俺、は……

5弾 悟リノ空

深夜の帰り道を歩いてたら、途中でヒステリアモードが解けて……

ガツクリ、バタリ。俺はその場にうなだれ、路上で四つんばいになってしまった。じ、自分のしでかした事にゾツとする。

おヤクザさまを前に見栄切って、組長ちゃんをナデナデとかって。

（何してくれちゃってんの……ヒス俺！）

ヒステリアモード時の体験はたいい現実味がなさすぎるので、事後、こっちの俺には夢から醒めたような感覚が残る。

ところがどっこいこれは現実であり、あつちの俺はドラキュラ公を倒したりミサイルを徒手ではじき飛ばしたり拳銃と刃物だけで原潜にカチ込んだりしてるのだ。夢だった事にならないかなこれらの全て。

だが夢オチは最も嫌われる。俺の運命の神様もそんなオチは書きたくないだろう。結果、一般人になるって決めて、武偵高を出てきたのに……

退学して10日やそこらで、ヤクザとお食事しちゃってるんだぜ。俺。
菊代は絶対、つきまといってくるぞ。最後に見せたあの日は、そういう目だった。



どうしよう。だが、ヒステリアモードが解けると何も思いつかん。

しかも今の俺は普段よりダメな俺。ヒス後はそもそも眠くなるというか、脱力感がある。

（明日、学校休みてえ……）

だが、探偵科^{インケスタ}でやってみたいに理子^{りこ}にゲームを与えて声帯模写で代返^{だいへん}させるワケにも

いかない。一般校じゃ出席率ぐらいいしか取り柄のない俺だ。行かなきゃならん。

俺は不撓不屈^{ふとうふくつ}の闘志で、まずは立ち上がろうと……

生まれたての子馬^{こば}みたいに、プルプルしていると……

「そんなところを這^はつても、金は落ちとらんぞ。遠山^{とわやま}の」

電柱の上から、幼稚園児みたいな声がかけられた。

俺は声の主を見上げて——サッ、と目を逸^そらす。見なかった事にする。

「見なかった事にするでない！」

ぴょーん、と、ミニミニのスカートを完全に（見てないがおそらく）めくらせた状態で

俺の目の前に着地してきたのは——玉藻^{たまも}。人間ギツネ。もしくはキツネ人間だ。

も、もう……堪忍^{かんにん}してやあ……!!

俺は真人間の世界に生きようと藻搔^{もが}いてるところなんだよッ！

「鬼弘結界^{きばらけい}の外に出て、何をしてるか。遠山^{とわやま}侍は昔から行動が読めんヤツらよのー」

俺は首を傾^{かし}げる玉藻を……すなわち現実を、しょうがないので立ち上がって直視する。

ちなみに目を逸^そらしたのは、コイツがなぜかやたらスカートの短い幼稚園児の服を着ているからでもあった。

背面は確認してないが、シッポの都合で下着が丸見えじゃないのかこれ？

「どうじゃ。この服なら儂^{わし}も普通の幼女に見えるじゃろ」

くるんつ。

うわ、その場で360度ターンした。

危^き惧^ぐしていたオシリ側は——身長差のおかげで、角度的に見えなかった。良かった。

「幼女って……お前、ホントは800歳とかのくせに……」

耳^{みみ}つき帽子^{ぼうし}の中に本当についててぴこぴこしてるキツネ耳と、うにょん、と今も動いた

キツネ尻^{しつぽ}尾——は、1億兆万歩譲って無視するとしても——その上でも、ヘンだ。玉藻^{たまも}は。

幼稚園児のフリをしてるのは分かるが、本体は7〜8歳ぐらいに見えている。

つまり幼稚園を留年してるという解釈になる。

だが俺^{おれ}も高校を留年しそうなので、人のことはいえない。

玉藻が人間社会に潜入できるようにするには別の服を与えるべきなんだろうが、俺……

男子高校生が女児服^{めいふく}を買いに行ったらそれだけで通報モン。

未来の幼女誘拐犯候補として、警察からもマークされる。

これ以上マークが増えてたまるか。だから放っておこう。もう知らん。

「で、今時分、何をやっておったのじゃ？」

きよとん、と、玉藻はそのくりくりしたキツネ目で俺を見上げてくるので……

「……俺にも分からん」

本当のことを、答えておいた。

ランドセルみたいに賽銭箱さいせんばこを背負った玉藻は、当然のように俺についてくる。

よくよく考えてみればこれも、俺が女子小学生に園児服という罪深いコスプレをさせて連れ回してるような光景だ。しかもこんな深夜に。

なので人目を忍んで、コソコソ帰宅すると……

玄関には、レキの靴くつがあった。塾で別れてから、無事に帰ってたらしい。

「遠山とおよまの。御祓みそぎに行くぞ。お主が不幸なのは、悪霊が憑ついておるせいかもしれん。祓はらつてしんぜよー」

悪霊を祓う？ お前がお前を祓うとか、物理的にできんだろ。

ていうか、

「おい、待てって……！」

家に女兒を連れ込むとか、爺ちゃんにバレたら軍法会議抜きで銃殺刑なのに——
るんたった、るんたった、と、玉藻は廊下ろうかをスキップして風呂方面へ行ってしまう。

（御祓^{みそぎ}って、風呂^{ふろ}に入るってことかよ……!?）

そういや粉雪^{こなゆき}もそんな神道用語^{しんどう}を使^{つか}ってたな。

で、塾^{じゆく}を出^でてからの事をレキに報告^{ほうこく}する前に――

俺^{おれ}は玉藻^{たまも}を追^おって、風呂場^{ふろば}へ直行^{ちゆく}せざるを得^えなくな^なった。

「現代^{げんたい}の服^{ふく}は脱^{だく}ぎ難^{がた}いのう」

「……ッ……！」

んしょ、んしょ、と、玉藻^{たまも}様^{さま}は……、もう半裸^{はんら}っ……！

平賀文^{ひらがあや}さんのお株^{かぶ}を奪^{うば}うガキパンツ^{ぱんつ}ははいていたが、それも、すばあーん。

（や、やりやがったッ……！ 素^すっ裸^{はだか}！）

こんなとこ、爺^{じい}ちゃん婆^{ばあ}ちゃんに見^みつかったら必殺^{ひく}奥義^{おくぎ}のフルコースだぞ。俺^{おれ}。

――逃^にげるッ！

と、バックステップで脱衣所^{だつぎしよ}から廊下^{ろうか}に戻^{かへ}ろうとすると、

「こら！ グズグズするでない！ 洗^{せん}う御役目^{おやくめ}が要^ひるじゃろ！」

「お、大きな声^{こゑ}を出^ですなッ……！」

気配^{きはい}からしてみんな寝^ねてるっぽい^{だれ}が、誰^{だれ}か起きてきたら……キンジ一巻^{いちまき}の終^はわり……！

や、やるしかねえ。この取^とってつけたような風呂^{ふろ}イベントも。

チクシヨウ。一難^{いちなん}去^さってまた一難^{いちなん}。今日^{けふ}は厄日^{やくび}だぜ。前^{まへ}もなかつたか厄日^{やくび}。多いな厄日^{やくび}。

などと洗面で俺も服を脱ぎ、

「遠山の、肩車せい。その新しい石鹼しやぼんを取りたい」

ぴよんぴよん、とシッポを羽ばたかせながら高い所にある牛乳石鹼せつけんを取ろうとしている
つるぺたイカ腹に代わり、

「人ん家の石鹼だと思いやがって……お前なんざハイマキの犬用シャンプーで十分だ」
などとボヤキつつ、石鹼を取ってやる。

ていうか素っ裸の女兒を肩車でできるわけねーだろ。

しかも入浴前。衛生上の問題もある。

だ、だが……俺に洗わせる気か？ そのミニボディを。さっき御役目とか言ってたが。
俺には年下趣味は無いからヒステリアモード的には大丈夫だと思っているが、素っ裸に
なられた上、体を洗えと言われると自信が無いぞ。

（ちっこいけど、一応、玉藻は女の形をしてるんだし……！）

これ、さつきヤクザとメシ食ってた時以上の大ピンチじゃねえか……唐突に！
何考えてんだ俺の運命の神様は。バカなのか。

しかしここでハダカの女兒に大騒ぎされても困る。ヤクザよりお先に逮捕されちまうぞ。
しかも武偵ぶてい三倍刑で有罪は確実。学校どころか少年院で暮らす事になる。

この風呂——行くも地獄、戻るも地獄ッ……！

がらりら。と、応前をタオルで隠しながら曇りガラスの風呂のスライド扉を開けると……おっ……？

湯煙で前が見えん。有難い事に玉藻も佝んで見える。

「……」

これは、誰かが湯を張りっぱなしにしてたんだな。

ああもつたいない。

うちの風呂は広いけど、銭湯じゃないんだぞ。

「……」

などという現実逃避が、

「——心配するだけ損だったようですね」

という、湯煙の先にある檜の浴槽からのレキの声で微塵に打ち碎かれた。

気配が皆無なので、入るまで気づかなかったが……

なんで……いるんだよ……！

「おお、璃巫女のレキもおったか」

などと玉藻ちやまが一部不可解な事を言いつつ、湯気をシッポ団扇で払っちゃまって——
幼女と仲良く風呂場に入った俺を、微かに口をへの字にして見てくる……レキが浴槽に



いるのが、見えた。

もちろん、矢田^{やだ}ミントちゃんも、丸裸……っ……！

お湯ではんの上気した玉のような肩に、湯浴み姿を彩る水滴^{いりど}が煌め^{きら}いている。

本気で逃げたい。だが玉藻^{たまも}がいる限り、出たら大騒ぎされて前科者コースだ。

なので俺^{おれ}はヒステリアモードでもない頭で、パズルみたいに3人の位置と作業を考える。そしてすぐ閃^{ひらめ}いた。

(い、急げ俺！ この閃きの早さ、もう甘くヒスってるかもしれないぞッ……！)

俺は玉藻の手から風呂桶^{ふろおけ}を奪い取り、ザッ、バババツ——！

白雪^{しらゆき}や理子^{りこ}がなぜか闖入^{ちんにゅう}しようとしてくるのに対抗して昔開発した高速洗体術^{せんたい}を用い、瞬時に体を洗った。

これは両手どころか足でまで石鹸^{せっけん}を使う我ながら不気味な動きを伴う技なので、玉藻とレキもドン引きしたのか、そっとしておいてくれて——

素早く洗髪^{せんぱつ}まで完了した俺は湯船の方に向かい、

「レ、レキ。出て、玉藻を洗ってやれっ」

目を閉じ、ソロソロと背中側から浴槽^{よくそう}に入っていく。

するとそれはさすがに失礼だと思ったのか、あるいは裸の玉藻を連れてきた事への怒りか……入れ違いに出たレキが、ぽか。

黙禱^{もくとう}状態で無防備な俺の頭を、小さく叩^{たた}いた。

だが……その手つきに力が入っていない。

『無事でよかった』と言うように、優しい手つきだった。

退学以降、レキの動作に人間味が増してきてるのが分かるな。

まあきつと、ほぼ無表情なんだろうけど。今も。

動物を洗うのは慣れてるらしく、レキは玉藻を、わしやわしや。

湯煙^{ゆけむり}の向こうで、割と巧^{たく}みに洗ってやってる。

しかし尻尾^{しつぽ}をシャンプーされながらの玉藻の、

「さすがじゃのー遠山^{とおやま}の。緋巫女^{ヒミコ}のみならず、璃巫女^{リミコ}もお主の女じゃったのか」

という俺への発言、どこから指摘すればいいんですかね？

「なんだよ璃巫女って」

「私の事です」

と、レキ。

「いやそれは何となく読めたんだが……お前、巫女^{みこ}さんだったのか？」

「故郷で、日本ではそう呼ばれる役目をしていました。今は任を辞しましたが、風は今、その私の辞意^{じい}を保留しています」

……風……か。俺はレキの妄想と思いこんでたが、どうも……

色金イロカネがらみの用語らしいな。それも。璃璃色金リリイロカネとかいう色金に絡からんだ。

だがここはニガテ系の話題だ。深くは聞かず、関かわらないようにしよう。

「緋巫女ヒミコ、瑠巫女ルミコ、璃巫女リミコ、と、色金巫女ミコは3種類おるでの」

瑠巫女さん絶対俺の前に現れないで下さい。白雪しらゆきとレキでお腹なかいっぱいです。絶対現れ

ないで下さい。絶対だぞ！

「……要はレキも白雪と類似るいじの巫女なのじゃ。ただ、触れる色金が違う」

「ああもうやめてくれよ。そういう話は後にして、話すなら別の事にしてくれよ」

今日はレオン以降、精神をすり減らす事ばかり起きてるんだ。

これ以上ニガテな話題で精神力を消耗したら、気絶して湯船で溺死できししかねん。

「ふむ……まあ、確かに遠山とおよまはただ戦えばよい御役目おやくめじゃからのう」

じゃあ体洗わせようとかいう御役目を押しつけるな。

「別の話という……そうじゃ。極東戦役。師団ディーン・眷属グレンナダの戦いで——」

もうやめて！ 俺のライフはとくにゼロだぞ！

「ヨーロッパからの打電があった。羅馬ローマからバチカンのメーヤが出撃して、柏林ベルリンで厄水やくすいの魔女・カツエと戦った。しかし、決着つかず——双方が自分の拠点に戻った後、倫敦ロンドンからリバティー・メイソンの殲魔士エクソサイザーが独逸へ渡った。戦いで消耗したカツエを討ち取ろうと、

探している所らしい」

なんか、陣地と駒こまを使ったボードゲームみたいだな。

ヨーロッパの地図つけてゲーム化したら、売れるかもだ。

などと俺が他人ひと事ことみたいに話を聞いていると、玉藻たまもが、

「いずれ、手駒てこまが減ったら東京こっちにも援軍の要請があるやもしれんのう」
チラッ。

「……こっち見んな。俺は行かないぞ。絶対行かないぞ、海外なんか」

でも……俺が絶対・絶対と拒絶した事はなぜか実現するジंकウスがあるんだよな。

だからこれ以上は言わないでおこう。

それに、殻金カラガネ——アリアの心臓付近にシャーロックが撃ち込んだ、緋弾ひだんのカバー——を数年内に眷属のヤツらから取り戻さないと、アリアは緋緋神ヒヒガミとかいう荒ぶる神になるっていうんだろ？ 未だに眉唾まゆつばモンの話だが。

ただでさえ甚大じんだいなアリアの凶暴性がレベルアップしたら、俺とのチャンネル争いで地球を割ったりとかしかねん。

世のため人のため、そこは何とかしないといけない。

「まあ、シャーロックにアリアが緋弾を撃たれた件には、俺も一枚噛かんでるし……殻金のことは何とかしないとな」

「その殻金^{カラガネ}じゃが、1つ、上海から東京に渡った感がある。恐らく、藍幫^{ランバン}じゃ」

うわあ……

ボードゲーム、他人事^{ひとこと}じゃなかった。

「……少し気がかりなんだが、玉藻^{たまも}。お前の、その探知能力みたいなのは――眷属^{グレンダ}にも、持つてるヤツはいるのか？」

「これは誰^{だれ}もが持つておる力じゃ。暗闇^{くらやみ}の中でも、同じ部屋に誰か居れば気づくじやろ？ 鳥や魚、動物は人間よりその力が強い。儼^{わし}ら化生^{けしやう}は、それが桁外^{けたはず}れに強いだけじゃ」

「じゃあ、眷属^{くわんじやく}にお前みたいな妖怪系^{ようかいけい}がいれば……こっちの動きも筒抜け^{つつ抜け}なのか」

「そう考えるべきじやろう。この時期に敵が動いたのは、バスカービルの将^{しやう}が鬼払^{きばらい}結界^{けつがい}の外に出たのがきつかけかもしれん」

将^{しやう}つて……俺^{おれ}の事かよ。二等兵ぐらいに格下げして欲しい。

だが何にせよ俺も、超人ボードゲーム『極東^{F E}戦役^W』、アジア盤^{こま}の駒^{こま}の1つって事か。

(ああ……早く人間になりたい……)

ていうか、やっぱりちつとも普通人になれてねえじゃねえか。この辺も。俺。

その後、玉藻は足下に転がってたセッケンに滑^{すべ}って風呂^{ふろ}にダイブしてくるといふ今日日ライトノベルでもなかなか見られない伝統芸^{ひょうぎ}を披露^{ひろう}し、浴槽^{よくそう}の底に沈んで気絶^{きせつ}。我が家^{わがや}で

神様が死んだらその後どんな祟り^{たた}があるか知れたものではないので、レキと協力して引き上げた。俺の手は何の器官か分からないものを掴^{つか}んだと思ったらそれは尻尾^{しつぽ}で……玉藻の背面がこっちに向いていたのは不幸中の幸いと考えるべきだろう。前面だったらと思うと背筋が凍る。玉藻でヒスったら切腹モンだからな。科学剣士かなめに介錯^{かいしゃく}を頼みつつの。

そんな――

命がけのフロからも生還^{せいざん}し、0時を回る頃^{ころ}。

(つ、疲れ果てた……)

俺は、フトンにバツタリと倒れ込む。

本来、入浴は疲れを取るものなのに……余計疲れたよ。

しかし女性2人と入浴してもヒステリアモード化を堪えた俺の忍耐力は、自分で自分を誉^ほめていいレベルの物だろう。『ヒステリアモード終了直後には再度ヒステリアモード化しづらい』という有利な条件下での事とはいえ。

「で、いつ帰るんだお前」

どこからか出した武偵高^{ぶていこう}のインターン用セーラー服を着て、我が家の冷蔵庫から勝手に出した牛乳を両手持ちし、フトンの横に正座してんくんく飲んでる玉藻に言うと、

「ぶはー、しばらくここにおる。お主に憑^ついて、近衛^{このえ}をしてやろう」

とミルクくさい息で言う。憑くなといっても憑いてくるんだろなこれ。

「じゃあ鞠に……」

なつとけ、と言おうと思ったが……

和鞠わまりを持って学校に行くとか、キャラ立ちしすぎだな。

俺おれはただでさえ学校に居場所がないんだ。そんなんじゃガチで誰も近寄らなくなるぞ。

「……じゃなくて、何か目立たないアイテムになれ。そしたら持ち歩いてやる」

「目立たない物？ んーむ」

などと尻尾しっぽを？形に曲げて考える玉藻たまもを放って、ようやく俺は寝ねに入る。

最近きんは不眠症ぎみ気味だったけど、ヒスった後は割と深く眠れるものだ。

これは不幸中の幸いだな。

……しかし、明日……

どの面下げて学校に行けばいいんだろう。

うちの学校の連中に、見られた。塾の前での、あの私闘を。

少なくとも警察が来る前、レオンをやったあたりまでは複数の目撃者がいる。口を封じられる人数じゃない。萌もえだって一部始終を見てた。

もう……俺はみんなに怖がられ、嫌われただろう。それは確実だ。

となると、今までみたいに無視されてたより難しい状況になったぞ。

俺は明日から、どう生きていけばいいんだ……？ ああ、学校で。

「——キンジさん、もう起きないと遅刻しますよ」

人間時計のレキに起こされると……

なんか、フトンの中があったかい。

「？」

と思つてまさぐると……こ、これは……！

掛け布団を自らめくると、案の定——玉藻が、くー、くー。寝てた。
俺を、抱き枕にした状態で。

それにレキが一瞬ゾツとしたような顔をし、縁側からは、

「……さすがだな兄貴。その見境のなさ、大物すぎる。尊敬するぜ」

などと遠山家の巻物を読んでいたジーサードも言ってくるので、

「い、いや、これは誘拐とかそういうんじゃないかな……！」

俺は「むにゅ？」などと言う玉藻を引きはがしつつ弁解しようとする——

「——ソイツは神だぜ、マジ物の。うちの九九藻の上位神だ。神まで部下にしてたのか」
神、神って。これが神なら無神論者になっちゃうよ、俺。

「これは部下とかそういうんじゃない……痛たたたッ！ おいこら何だ玉藻ッ！」

「いなり寿司」

などと寝ぼけて俺の手を噛む玉藻にパウンドを叩き込んで、なんとか振り払う。
な、なんちゅう鋭い犬歯してんだ玉藻は。アリア並だぜ。

などと朝から狙撃手・神・人工天才に絡まれたせいで、ホントに少し遅刻してしまった。
学校に――俺の席は、まだあるんだろうか。

暴力沙汰を見た生徒たちがキンジ排斥運動を始めてて、机が無かったりしないだろうか。
心配しつつ廊下から教室内を覗うと、もうHRが始まつてる様子だ。

俺の机はまだあったが……あれ、隣の萌がいないな。欠席か。

幼稚園の頃からの皆勤賞が、これで途切れたな。

(つて、人の心配をしてる場合じゃないぞ……)

と、俺は恐る恐る……

「……遅れました。すみません」

教室後部のスライド扉を控えめな手つきで開けて、コッソリ中に……

一歩踏み込んだところで、みんなが振り返ってきた。

そして一斉に、わあーっ！ と――

悲鳴じゃない。笑顔で、喝采を送ってきたのだ。クラス中が。俺を見るやいなや。

「……？ ？ ？」

何が何だか分からない顔をしていると、まずは体育会系の男子たちが立ち上がって――俺を胴上げしかねない勢いで取り囲み、

「遠山、マジパネエよ！ 昨日、すげえマッチョのチンピラやつつけたんだって!？」
目をキラキラさせて、語りかけてきたぞ……

「……い、いや。あれは偶然……偶然体がもつれて、相手が倒れたっていうか」

「俺見てたけど、そうじゃなかったぞ！ お前ボクシングか何かやってたのか？」
やってたのは相手だよ。

「あんな技、見た事無えよ！ もしかして忍者の末裔とかか？」

それは戦妹アミカの風魔ふうま。

「いや、俺は……その……」

四方八方から大盛り上がりで質問攻めにされた俺は――

いつの間にか他の男子ほか、さらに女子たちにも囲まれてワイワイ喝采を受け続けてる状態。あまりに予想外の展開に、挙動不審者きやうふしんしやみたいにならざるを得ない。

（ていうか、俺のせいでHRが中断されて――）

と思つて教卓のゴリの方を見ると、ゴリも「いいいいいよ」的な表情をしてる。
その辺りで、ようやく分かったが……

（……ああ……）

そうだったのか。みんな。

毎日がつまらなかったのは――

俺おれだけじゃなかったんだな。この学校で。

みんな、つまらなかったんだ。毎日が。

何も起きず、ただただ平和で、刺激に飢うえていたんだ。

そこに俺が、見るからに悪漢あつかんという風体のレオンが襲襲ってきたのを撃退して――
風穴を開けてしまったんだな。アリア風に言えば。

その後、休み時間ごとに「筋肉凄すこいのか？」「遠山とやまがやったあれ、ボクサー崩れだぜ」
「流派は何？」などと俺はみんなに話しかけられ続け……

それぞれに「それほどでもない」「知ってた」「特に無いよ」などと努めて言葉少なめに
答えたのに、俺人気は上昇の途いっをたどる。

昼休みどころか放課後にも遠山ブームが続き、隣のクラスからも男子・女子が遠征して
くる始末なので……

(こ、このままじゃ別の意味で学校にいられなくなるぞ……)

などと頭を抱えつつ、教室から出る事すらできないでいると――
そこにフラリとやってきた1人のヒョロい生徒が、

「——くるアあ！ キンジさんが迷惑がつてるだろお！」

すごい巻き舌発音で一喝し、俺を軟禁していた生徒たちを散らせてくれた。

シッシツ、とみんなを追い払ってるのは……ちゃんと制服を着た朝青だ。

てことは、その痩せ男は藤木林か？ 髪を黒く染めてきてたから分らなかったぞ。

「大丈夫ツスカキンジさん。今日はきつとコイツらずつとウゼエッスよ」

「早く行きましようぜ」

藤木林&朝青コンビは嫌いだし、なんで俺の味方をしてくれるのかは分からないが——

「あ、ああ。助かった」

ここは正直ありがたかったので、俺は2人にガードされるようにして教室から解放されたのだった。

——さすが、ヤンキーはいい隠れ場所を知ってるな。

俺は知らなかったが、屋上のさらに上、ベタな大時計のついた棟にも屋上があったのだ。

ここなら、誰も来ない。

見えにくいところにあった作業用のハシゴを伝ってそこに登り、俺はやっと一息つけた。眺めも割といいので、俺が池袋のビル街を眺めていると……

「今までの事は、どうか水に流してくださいッス！ 失礼しましたァー！」

「すんませんしたアッ！」

藤木林と朝青あさおが、並んで上下座どげざしてきた。

別に何のダメージも受けた記憶が無いから、謝られても……と思ったが、男が頭を下げてるんだから……俺おれは「分かった」とだけ答えておく。

それでホッとしたらしい2人は、正座してニコニコ俺を見上げてくる。

な、懐なつかれてる……ぞ。俺から、お説教でもいいから何か話を聞きたい目つきだ。

「……停学中じゃなかったのか、お前たち」

「明けましたッス」

ましたッスって……俺より国語ができないな、藤木林。

白雪しらゆきの『キンちゃん様』みたいな二重語尾使いだ。

「キンジさんと同じクラスッスよ、俺らも」

クラスッスって……まあいいやもう。

「ホントは、2人で学校やめようかつつてたんスけど……キンジさんがいるから、通うことにしたんス」

低い声で言う朝青に、「はあ？」と振り返ると――

「そう話したらゴリも喜んでたッスよ」

などと、藤木林が笑顔で言ってくる。

ああ……それで、校外のこととはいえ俺の暴力沙汰^{ざた}を不問にしてくれたのか。ゴリ先生。自分のクラスから退学者が出るのは、先生のキャリア的にも良くない事だからな。

「学校に通って……どうするんだ。将来。2人は」

俺が参考までに聞いてみると――

「キンジさん塾通うとか勉強熱心だから、俺も……勉強して医者になろうと思うんすよ！モテそうだし」

「俺は、オヤジの仕事継いで漁師になるッス。高校は、オフクロが出とけって言うから」
へー……

俺よりずっと、将来設計が出来てるな。不良の方が。

「にしてもキンジさん、超マジスゲえッスよ！レオンは東池袋^{ガシコ}高校のOBなんすけど、イヤなヤツだったんで！」

などと、同級生の俺に敬語を使う藤木林がヨイショを始めた所で――

「そうだったかもな」

などと、その――レオンが、屋上によじ登ってきた……！

占びたうちの制服を着ているところを見るに、どうやら母校に潜入して藤木林と朝青を尾^つけてたらしい。俺目当てで。

藤木林と朝青がチビリそうな表情で立ち上がり、俺もこれには少し驚いたが――

「――遺恨いこん試合はナシだぞ、レオン。お前、鏡高組かがたかくみとはどうなったんだ」

「組ぐみには、離縁状りえんじょうをもらった」

「破門はもんになったって事か。よかったな」

一応、外見を確認するが……別に傷つけられた様子もない。
俺おれに蹴けられた鼻には、絆創膏ばんそうこうを貼はってるけどな。

「その、組の命令だったとはいえ……悪かった。俺、アンタに詫わびを……」

朝青あさおよりドスの利いた声で、レオンもその場に膝ひざを折ろうとする。

ああ。俺に追撃されるのを怖おそれて、謝りに来たってことだったのか。

むしろ謝りたいのは俺の方なんだけどな。

お前とのケンカは……

ちよつと、日々のストレスの八つ当たりも入ってたからな。

「いいよ別に。お前が仕掛けてこない限り、俺から手を出したりはしない。お前はお前で、勝手に生きる」

と、少し恥はずかしくなった俺は、一方的に話を打ち切る。

するとレオンはしばらく黙もくってから……

やっぱり藤木林ふじきばやしたちとは違う、セミプロの目で俺を見た。

「……アンタ、ホントにただの人間なのか」

「あまり自信はないが、そうありたいと願ってる」

「舎弟しやていにしてくれ」

また……そうくるし……

「菊代きくよと同じようなことを言うな。弟も間に合ってたんだよ」

ここは少し、厳しい態度で言っておこう。

「俺はお前たちのお遊戯につきあうほど世慣よなれしてない。世間せけんのビギナーなんだ。不良をやりたいきゃ勝手にやれ。ゴロツキの世界でケンカがやりたいきゃ、勝手にやってる。それで停学になろうが逮捕されようが、お前たちの人生だ。だが、俺を巻き込むな」

藤木林・朝青の事も見回しつつ、突き放すように言う……

一同、こくこく。うなずいてるな。ちよつと淋さびしそうだけど。

なので俺も、ちよつと済まない気持ちになっちゃおう。

お前たちみたいな問題児、はみ出し者は原則、嫌いだが……

……少し、同情しないでもない。俺も同じ問題児だったからな。前の学校で。

だが。ここは悪いが、キツパリ縁を切ろう。

俺はアウトローになるつもりはないんだ。

「俺は、この学校で普通に過ごしたい。静かに社会に溶け込んで、平穏へいおんな生活をしようとする努力してるところなんだ。だから問題に巻き込まれると困る。分かったな？」

繰り返しそう言くと、藤木林ふじきばやしと朝青あさおは同じタイミングで頷うなずいてる。仲いいなお前ら。
だが……

レオンは、何か言いたい事を飲み込んだような顔をした。それから、丸刈り頭で頷く。
それが少し気に掛かったが――

……ぐう……

ここまで演出した威厳いげんを台無しにするような音が、俺おれの腹から鳴った。

そういえば今日も昼休み、みんなに質問攻めにされてたせいで何も食べてなかったんだ。
「腹減ってるンスか！ 行つて来るツス！」

ばあ、と藤木林は顔を明るくして、自主的にパシリを買って出てしまい……
俺が「いらない」と言う前に、ダッシュでいなくなってしまった。

まあ……今降りていったら、またみんなに取り囲まれる。

クラスメートたちがあらかた下校したり部活でいなくなったりするまで、しばらく待つ
しかないよな。メシでも食いながら。

で、藤木林は学校近くの吉野家よしのやから大盛り牛丼ぎゅうどん、カップ入りの味噌汁みそしる、半熟タマゴまで
大量に買ってきてしまった。

マック同様、吉牛よしぎゅうの二オイ成分にも人間の食欲を刺激する作用はあり……

俺がそれを受け取ったのを見た朝青とレオンは自分たちも負けてはいられないと思つたらしく、一旦^{いったん}いなくなつてから――

なんと俺への献上品として、ボストンバッグに入れた、

(と、特攻服……！)

暴走族御用達の、ド派手なコートを持ってきた。しまった。

白地で、背中に『天上天下唯牙独尊』とか刺繍^{ししゅう}が入ってるけど……字、間違ってるし。

「キンジさん、これ絶対似合うツスよ！」

「もらつて下さい。あんたに着て欲しいんだ。これは解散した俺のチームのなんスけど、伝説の――」

朝青とレオンが特攻服の解説を始め、お前らさっきの俺の話を聞いてなかったのか、と怒りに震える俺が割り箸^{ばし}を折りそうになつた所で……

トントン、トントントン、トン。

肩を、タップされた。

見えない手に。

(ジ、ジーサード……！ 来るなつたのに……！)

どいつもこいつも、俺の命令を聞かないヤツらだな。

しかし、なんだこれは。英文^{えいぶん}モールスだな。

BEAUTIFUL COAT HAVE IT
『美しい服 もらっとけ』……？

お前、こんなのが好きなのか？

だがまあ、確かにこの派手派手しさはジーサード好みかもな。

なので俺は肩を搔くフリをしつつ『二度と俺を尾けるな金三』と弟の手に和文でタツプ信号を返し「俺は着ないが、弟が欲しがりそうだから」と、もらっておいた。

（早く帰りたいなあ……）

だが下校する生徒の様子を確認すると、まだけっこういる。

俺が溜息をついて座り直すと、朝青は缶ビールを飲もうとするので――

「おい、酒はやめろ」

「いや、毒じゃないツスよ。未成年の健康に悪影響がどうたらとか書いてあるけど――」

「違う。お前の健康なんか俺が知るか。自分で管理しろ。だが、アルコールで反応速度が落ちると戦闘に……差し障るだろ」

いけね。武偵のノリが……つい、ポロツと出てしまったな。

朝青は俺にそういう教授をしてもらえたのが嬉しそうな顔で、ビールを封印し――
藤木林、レオンも、俺に期待感バリバリの顔を向けてくる。

何か、話してほしいらしい。俺に、今みたいな話を。

まだ下には降りるに降りられないし……仕方ない。少し、こいつらと駄弁るか。

というか、見ちゃいらなかったしな。コイツらのなってなさは。

こっちの技量はある程度バレてるんだし、3人の身の安全のために教えてやるかと、俺は少しマジメな態度で彼らに向き直った。

「あと……藤木林、ピアスはやめとけよ」

「えっ、チャラいすか？」

「違う。組み合った途端^{とたん}に肉ごとちぎられるぞ。俺はそう習った」

そう苦言を呈した俺に目をキラキラ輝かせつつ、藤木林はピアスを外す。

「……レオン。お前昨日、車の窓から腕出してたな。クセか」

「あ、ああ」

「直せ。折られる」

などと……

俺が蘭豹^{らんびょう}気取りでそんな話を幾^{いく}つかしている内に……

……ようやく、眼下^{がんか}の生徒たちもまばらになってきた。

「今後は——お前たち、もう俺に関^{かか}わるな。ロクな事にならないぞ。あと、レオン」
腰を上げた俺は、レオンに振り向き——

最後に1つ、心の底から警告しておく事にする。

「あの拳銃^{マカロフ}。組からの預かり物か？ 私物か？」

「……私物だ」

「銃じゆうけん検通したか」

「いや……」

「射撃後のゴミだらけだった。完全分解どころか、通常分解すら1度もされてない銃だ。
俺われに向けた時の構えも雑すぎた。お前は射撃理論、照準監査しょうしゆんかんさ、弾道理論だんどうり、分解・組み立て、
一切を知らないのに銃を持つてるのか」

「……」

「あれは返したが、銃じゆうを持つ者には責任がある。必要な時に正しく使う、重い責任がある。
不必要に抜けば、周囲はパニックになるぞ。昨日もなつたろ。そうなれば敵だけじゃなく、
周囲の持つてるヤツ全員が抜くリスクがある。その中には俺もいるかもしれない。警官も
いるかもしれない。言つとくが警官は本気でお前を射殺できるぞ。無責任に銃を見せびら
かす素人しろうとと、責任を持って銃を扱うプロ——そっち側と、こっち側。どっちが生き残るか、
よく考えてみる」

「……」

「これだけは理解しろ。銃は、素人が持っていない物じゃないんだ。持つのは、仕事で所持
する連中だけでいい。共和党アメリカに媚売こびって、どんどん解禁した政治が間違ってる。最近じゃ
古いハーリントン&リチャードソンなんか7千円。お前の銃だつて相場そうばは3万やそこらだ。

だが今後、あんな物を無闇にチラつかせてたら——心中する事になるぞ。そんな物と」

ちゃんと正面から話してやれば、この手の輩にも通じるものらしく……

レオンは黙って、素直に俺の話を聞いている。

「お前にとって、お前の命はそんなに安くないだろ？ ヤクザやめたんなら、破棄しろ」と、演説を締めくくると——

「……分かった。今夜、業者に持って行って処分してもらう」

レオンは、ちゃんと理解してくれたみたいだった。

だが、万力で壊すとかじゃなくて正式に廃棄するような事を言われ……先日の体育祭で景品にもらった銃弾を埋めて不法投棄した俺は、ここでもキマらなかつたのであった。

玉藻は今朝、虚物変化で『交通安全御守』に化けた。

なので俺はそれを首から提げてやり、シヤツの中に携帯して登校している。

だが一日中おとなしかったところを見るに、寝てるか、『虚』空間に（勝手に）持っていった俺のDSをやってゴロゴロしてるんだろう。

（ほんと、神様は気楽なもんだよね……）

などとニート神に心の中でボヤきつつ、人もまばらな校舎からコソツと抜け出し——夕焼けの中、校門前で今日もポケーっと待ってたレキを回収して帰る。

「ただいまー……」

実家に着くと、庭ではジーサードがビニールハウス建築の仕上げにかかっていた。

茶の間では、父さんの遺品の将棋盤の前に正座したかなめが羽生名人の本を読んでる。

居間からは婆ちゃんの弾く、琴の音がして……あれ、これ、昔、白雪が星伽で弾いてた曲だな。有名な曲なのかな。

で、爺ちゃんはその婆ちゃんの間を見て読書中。

ブックカバーはしてるが、ニヤニヤした顔つきで分かる。秘蔵のフランス書院だぞあれ。そんな普段の光景を横目に自分の六畳間に入ると、

「……」

しゆる、しゆる。

俺の部屋と襖一枚隔てただけの隣の部屋に住むレキが、制服を着替える音が妙に艶めかしい。

なので俺は自分の部屋から縁側に出て、また雪のちらついてきた空を眺めて時間を潰す。もう、日は暮れた。

（まあ、なんというか……）

今日も今日で学校は大変だったし、キツネに憑かれてるし、家は家でいろいろ疑問点はあるものの――

これはこれで、俺なりの日常の世界って感じはしてきたな。近ごろちかようやく。ここにも、壊しちゃいけない何かを感じる。

—そういえば昔カナが言ってた。人は、何かのきっかけで古い日常から外に出る事があり

—そしてそこに新たな日常ができる事もある、とも。

(……それは、その通りだったな)

最近の経験は、少なくともあのまま武偵高ぶていこうにいたらできない事がほとんどだった。あそこでは学べない事を、たくさん学んだ気もする。

だが——カナの話には、続きがあった。

でも、人は収まるべき所にしか収まらない。とか。

……しばらく、舞い落ちる雪を眺めつつそんな事を考えていると……

「キンジさん。間もなく夕食の時間です」

いつの間にか縁側に立っていたレキが、その所を示すかのように——
最近私服にしてる武偵高のセーラー服姿で、俺を呼ぶのだった。

一家と居候レキが揃う、賑やかな夕食を食べた後……

レキはハイマキの予防接種のため、少々珍しいペットにもナイショでそれを受けさせて

くれる——夜間のみそういう保険が利かないタイプの副業をやってる練馬ねりまの某動物病院へ出かけた。接種は何種類があるので、最近レキとハイマキはそこに週二で通ってるのだ。

片や、俺おれは……

レオンに説教したくせにすっかり整備してなかったベレッタを、たまには点検しようと押し入れから出した。すると……あれ？

誰かだれがきちんと整備してくれてる。改造銃なのに、完璧かんぺきに。オイルの塗布跡とふも新しい。

(……?)

などとヒステリアモードでもない頭を捻ひねっていると……

俺の携帯から『花のうちに』のメロデー。電話だ。

だが、知らない番号だな。

「……もしもし」

一応、出てみると——

「——ひどいよ遠山とおやま。子分を使うなんて」

半笑いの、この声。

菊代きくよだ。どこかで俺の携帯番号を調べたらしいな。

「……何の話だ？」

イヤな予感がしたので、切らずに問いかけると……

「ううん。分かった。今のは『違う』って事の確認」

「……？」

「それとは別にね、アタシ——ちよつとね、望月萌とお喋りしたんだ。アンタ遠山の何？
って」

——！

萌は今日、学校を休んでいた。今まで皆勤賞だったハズなのに。

それは、菊代が……！

「……拉致したのかッ」

「人聞きの悪いことを言わないで。遠山をもう一度うちのテーブルにつかせるために——
萌にビジネスのお話をしたら、彼女が怒っちゃったのよ。おとなしい子だと思ったのに、
度胸あったわ。だから、落ち着くまでうちにいてもらってるだけ」

「……！」

やられた。

人質を取られた形になったぞ。

「さっきの子分の話に戻るけど。レオンが、アタシが萌とお茶してるお店を張ってたのよ。
藤木林・朝青と一緒に。で、うちの人間が萌を落ち着かせようとしたら——3バカ揃って、
突っかけてきちゃって」

「何だつて……!?」

「ふふつ。ちよつと、正当防衛しちゃった。でも3人とも、何が何でも遠山とおやまの名前を出さなかったわよ。こつちが問い詰めても——これは自分たちでやった、その人も、その人の友達ともの萌もえも関係ない。萌を解放して、その人と平穏へいおんな生活をさせろ——とかつて」

そこまで笑い混じりに喋しゃべっていた菊代きくよは……

「——ヤクザにそれは通らないわ。4人とも遠山の関係者よ。この落とし前、どうつけてくれるの?」

そこで急に本性を現したように、冷たく、シリアスな声になった。

「殺してないだろうな」

「もちろん生きてるわ。まだ」

「証拠を聞かせろ」

「そう言うと思った。——ほら、萌。アンタが片思いしてる人だよ」

などと言う菊代の声が、少し遠ざかり……

もごもご、んーつ、などというくぐもった声に続いて「遠山君、来ちゃだめ! ここには——」などと言いかけ、再びタオルか何か越しにさせられた……

確かに萌の声がして、青ざめる。

「……遠山。豆知識、2つ教えてあげる。その1。日本では毎年8万人分も搜索願そうさくねがいが出て

るんだって。その2。ヤクザって、誰も^{だれ}が幾^{いく}つか、何を埋^うめても絶対見つからない場所に心当たりがあるそうよ」

「脅迫は……昔から得意だったよな」

「何^{なに}それ。やな感じ。これは豆知識^{まめちしき}って言ったでしょ。本にも載^のってることだわ」

武偵^{ぶてい}崩^{くず}れ——それも諜報科^{レザド}崩^{くず}れは、やりにくいぜ。

武偵^{ぶてい}高^{たか}じゃ有名な話だが、強襲科^{アサルト}は、諜報科^{レザド}に弱いのだ。

これは、歴史でいえば侍と忍者の関係に似ている。

侍は、最強の存在だった。いい刀を持ち、高度な剣術も身につけている。いい物を食べ、鍛錬^{たんれん}してるから、体も強い。堅牢^{けんろう}な城や屋敷に住んでるから、防御も万全だ。

そんなヤツ、何らかの理由で殺そうとしても——殺せない。正面^{しょうめん}からは。

だが、裏^{うら}からなら殺せる。それをやるのが忍者だ。

忍者は侍みたいに、正々堂々戦ったりはしない。密^{ひそ}かに忍^{しの}び寄り、飛び道具は使うわ、寝込みを襲うわ、毒は使うわ、汚いと言ってしまえばそれまでだが……それらを、恥とも思わない者だ。勝てばそれでいいという、逆の意味でタフなマインドの持ち主だった。

菊代が育成されかけていた——諜報型武偵の精神性は、それに似ている。

そして彼らは、人質も取るんだ。割と普通に。

『西洋^{ウエスタン}忍者』の異名を取るワトソンも、アリアを攫^{さら}ったしな。少し戦術は異なるが、俺^{おれ}は

また同じ手にハメられたんだ。強襲型武偵が陥る、典型的な罠に。

——ねえ、またデートしようよ。萌も会いたそうにしてるし——

そう言い残して通話を切った菊代は、萌の携帯から調べたらしい俺のメールアドレスに地図を送ってきた。菊代……つまり組長の自宅、いわゆる本家の場所の。

人質を返してほしければ、来い——って意味だ。最後のセリフは。

行くしかない。

行かなければ、萌たちの命が危ない。ヤクザは、殺す時は殺す。菊代が言う通り、人を消し慣れてる連中だ。もし罪を被る係が逮捕・起訴、実刑判決を受けても、むしろそれを称賛して昇進させる。一般人とは罪に対する評価が真逆の、マトモじゃない奴ら。

(それに、この件の責任は……)

俺に、ある。全て。

俺はレキを退避させるまでの時間稼ぎとはいえ、菊代の目の前でレオンと遊んだ。ヒステリアモードだからって、調子に乗ってた。そこが大本のミスだった。

全て、俺のせい——だから、誰も巻き込んじゃいけない。

この日常を生きてる、我が家のみんなの事も。

壊しちゃいけないんだ。この穏やかな日常は。

だから、俺が1人で片付ける。

レキがハイマキの世話で不在なのも、その点に於いては不幸中の幸いかもしれない。

(だが……)

やむなく武偵高の防弾制服に着替え、ベレッタを帯銃した俺は——
それでも普段の、ヒステリアモードでも何でもない俺だ。

その俺が行って、どうなる？

——菊代の本家には、100%幹部や部下がいる。

ヒステリアモードのフリをしてハツタリで通そうにも、俺の変化を見慣れている菊代の目ざとい目はごまかせないだろう。

もし、戦いになったら。

チンピラ程度ならこの俺でも何とかできるが、本職は手強い。

(……あくまで、対話で何とかしないと)

などと、皆に黙って踏み出した夜道には——少し、雪が積もっていた。

白い息を吐きながら、西池袋にある菊代の大豪邸まで急ぐ。

(ある種の、出入りになっちまったな)

敵陣に乗り込む事を、武偵は『出入り』と呼ぶ。

その語源は菊代きくよたちの業界で、組同士の抗争を指す隠語いんごだ。
俺おれが警戒しつつ、和風の——巨大で豪勢な門を、角から窺うかがうと……

「……！ レオン、藤木林ふじきばやし、朝青あさお……！」

ボロボロの血だらけになった3人が、壁際に寄りかかるようにしてへたり込んでいた。
慌てて駆けつけ、そばに片膝かたひざをつく……ひどい。

メッタ打ちで、顔がオバケみたいになってる。3人とも。

これは……ほとんど抵抗も出来なかった様子だ。それをここまで殴打するのか。

「お前ら、なんで戦ったんだ……ヤクザなんかと……！」

骨折や内臓破裂が無いが、慌てて様子を見る俺に——

「キ……キンジさん……サーセン……」

すみません、と謝ってきたのは——鼻が折れてチャラ男が台無し、藤木林だ。

「ま、巻き込まないって約束したのに……巻き込みました……」

そ、そんな約束を——

俺との約束なんかを守るために、こんなになったのか。

そんな約束、非常事態になったらどうでもいいのに。

「キ、キンジさんが、学校で普通に過ごしたいって言ってたから……組に望月萌もちづきもえを返させて、キ、キンジさんの生活を、守ろうと、したんすけど……す、スンマセン……」

と低く言う朝青は、その太い右腕が折れている。全治1ヶ月はかかるぞ。

……俺があの学校にムリヤリ日常を作ったせいで生じた破綻を、こいつらは……修正、しようとしたんだ。俺が『もう関わるな』なんて言ったから、自分たちだけで。

げふっ、と咳き込んで雪に細かく血を散らしたレオンに――

「だ、大丈夫かッ……！」

慌てて振り向くと、レオンは、

「す……素手だけで、やったぜ。アンタと、約束したから。チ、拳銃は、無しで」
ボロボロの顔で……力なくだが、誇らしげな笑顔を見せてくる。

な、なんでだよ……！

なんでお前ら、俺なんかとの約束を律儀に全部守って……

俺のためなんか、動いたんだよ……！

「なんで戦ったんだよ……そんなになるまで！　すぐ俺の名前を出して、呼び出させてれば……こんなにまで、やられることは無かっただろッ……！」

俺の目に、何だか分からない涙が滲む。

「藤木林、朝青、レオン……！　俺とお前たちの間に、そんな義理は無かっただろう！　ただケンカして、その後、屋上でメシ食っただけの仲じゃないか……！」

「――違エよ」

レオンが、ボコボコなのどこか清々^{すがすが}しい顔で俺^{われ}を見た。
 藤木林と朝青^{あさお}も、へへ……などと力なく笑ってる。

「学校じゃ、みんな、俺たちから目を逸^そらす。でもキンジさんは、オレと朝青を真っ正面から見てくれたんだ」

「キ、キンジさんは、俺らに、本気で接してくれたからさア。へへッ……う、嬉^{うれ}しかったんだよ……」

藤木林、朝青……！

「……だから、俺らも本気でキンジさんの思いを守ろうとした、そんだけだ」

レオン……！

たった、それだけの事で……ここまで……！

3人は、3人とも——孤立してて、淋^{さび}しかったんだ。

学校や社会からハミ出して、避けられて、居場所がなくて。

その気持ちには、痛いほど分かる。俺もそれを経験したから。

そこに俺が、正面を向いてぶつかってきた。僅^{わず}かな時間とはいえ、友達のように接した。この3人は、ただそれだけの理由で……

「で、でも、オレら……結局、キンジさんに迷惑かけただけ、ツした。こ、こんな所まで、出張^{でば}らせて……ほんと、マジ、サーセン……」

「へへッ……ク、クズはクズのまんまだったって事だなア、俺ら。ご、ゴミクズみてえに、こんな所に、へへッ……」

「もう俺らのことなんか……ほつといていい。俺らなんざ……世の中から見りや、虫ケラみてえなもんなんだ」

藤木林、朝青、レオンがそんな事を言ってくるので――

「違う……！」

俺は立ち上がり、鏡高組の門を睨み上げた。

「お前たちは戦った。萌を助けようと、俺を助けようと。人のために、自分が傷つく事を怖れず戦った。それは誰にでも出来る事じゃない」

俺は――武偵の言葉しか知らない。

だから、武偵が倒れた仲間に語りかけるつもりで語った。

「お前たちは虫ケラなんかじゃない。人間だ。人のために全力を出し切って戦い、倒れたその姿は、誇るべきものだ。それは、人間の姿だ。違うって言うヤツがいたら――俺が、ブチのめしてやるッ……！」

俺こそ。

俺の方こそ、すまなかった。

力を持つ者が、力無きお前たちを戦わせてしまった。

それは許されない事だ。

——銃を持つ者には責任がある。

あの日、学校の屋上でレオンにそんな高説をぶった自分が恥ずかしい。
銃だけじゃない。

力を持つ者には、責任があるんだ。

力無き人々のために戦う、重い責任が。

レオンたちを犠牲にしまい……遅きに失したが、俺は^{おれ}今、それを悟^{さと}らされた。
学ばされたのだ。俺は、彼らに。武偵^{シュア}高の外に出て、初めて。

「——かなめ」

自分の背後に声をかけると、道の角から……

「あは、バレてたね」

などと、セーラー服姿のかなめがスキップしながら現れた。

「はい。おはようからおやすみまでお兄ちゃんを見守る、かわいい妹ちゃんですよー」
なんか白雪^{しらゆき}にも言われたな、昔、似たような事を。

「雪の日^{ゆき}に人を尾行^{びこう}できると思うな。俺の足跡を踏んで歩いたって、音は聞こえる」
「気づかれてる事には気づいてたけど、追い返されなかったから」

「追い返したってついてくるだろ」

「まあね。えへへ」

「だが、ここまでだ。ここのヤクザには、俺が1人で落とし前をつけさせる。その理由も、今増えたところだ」

「えー。何かさせてよう。そしたらレキとかサードとか、みんなには言わないから」
「なら……この3人を病院へ連れていってくれ。あと……拳銃の整備、ありがとな」
「お礼は非合理的だよ。そういうのは、妹の役目だからね」

などと、愛らしくウインクしてきたかなめは――

まあ半分誘導尋問だったけど、俺の銃を丁寧に整備してくれてたわけだ。

レキは勝手に人の銃に触れる事はしないし、ジーサードは銃なんかオモチャだと思ってる。爺ちゃん婆ちゃんは『自分の事は自分ですること』と俺を躾けた。

だから、消去法でなんとなく分かった。かなめが整備してくれていた事は。恩に着る。それはそうと――

今の、この俺の心理状態。

これは武偵高時代と同じだ。それに今、戻った。それを感じる。

鏡高組への怒りが胸の内にあるものの、それは、静か。

事件が起きた状態だと、俺の頭はむしろ冷静になっていく。

命がけのシチュエーションに踏み込むこの緊張感には、心地よささえある。

——マトモじゃないな。俺^{おれ}も。

「でも……ホントに1人で大丈夫？　HSSでもなさそうなのに」

「なんとかする」

「じゃあ、信じるよ」

レオンに肩を貸しつつのかなめと、そんな会話をしてから——

「萌^{もえ}は中だな」

そのレオンに問うと、

「あ、ああ……」

レオンは、頷^{うなず}いた。

——行くぞ。任務^{ミッション}は萌^{もえ}の救出^{セーフ}。敵の人数は未知数、武装も未判明。俺はレガルメンテや

ベルセどころか通常ヒステリアモードでもない、ただの俺^俺だ。難しい仕事^{クエスト}になる。

だが、それも——いつもの事さ。険しいが、歩き慣れた道だ。

「こんばんは」

古風なデザイン割に自動式だったドアが、開くと……

例の改造和服を着て、きちんとおめかしした菊代^{きくよ}が1人で出迎えてくれた。

「ごめんね遠山^{とおよま}。でもアタシ、好きな人に嫌がらせしちゃうタイプだったみたいでさ」

「冗談を聞いてる気分じゃないぜ、こっちは」

雪の積もった広い和風庭園を歩き、一匹一匹が数百万円しそうな錦鯉にしきいがいる池の向こう——豪邸の玄関へ、入っていく。

歩きながら見えたガレージには、ズラリと並んだ高級車の他に、大型バイク、牽引車けんいんしやに載のせたパワーボートなんかゴロゴロあった。

「ふふっ。遠山の顔、やっぱり活いき活いきしてる」

俺の部屋より広い玄関で、菊代は和服の長い袖そでで自分の口元を隠すような仕草をしてる。巢にかかった獲物を見る女郎蜘蛛じようろうぐもを思わせる、嬉うれしそうな目つきで。

「……萌はどこだ」

「もう。すぐ別の女の名前を出すし。こっちよ。あの子、怒りっぽくてイヤな子よね」
ぷい、とソッポを向いた菊代が、廊下ろうかを渡っていく。

廊下の壁には水族館みたいに巨大な水槽が埋め込まれてあり、大型魚が泳いでいる。俺もそこを奥へ進み、一〇〇平米へいべいはありそうなりビングに案内された。

「……」

壁には見事な油彩画ゆさいが、柱の脇わきには青磁せいじの壺つぼと阿修羅像あしゆら、テーブルにはガラスのランプ。どれも数千万の、お宝だろう。

美術的な統一性はカケラも無いが、それはヤクザにとってどうでもいい事だ。大邸宅に

美術品を集めるのは、時に銀行口座すら警察に差し押さえられるリスクのある彼らなりのリスクヘッジ。不動産や美術品は、イザという時でも換金しやすいからな。

だが、見るべきなのはモノじゃない。

リビングのあちこちからこつちを見る、ヤクザたちだ。

まず、見覚えのある幹部……

カチツとしたスーツを着た、東大卒のノツポがソファに掛けている。

さらに部屋住みらしい黒服の組員が5人、全てのドアの脇で――

アサルトライフルを抱えて、立っている。

(AK-47が、5丁も……)

厳しいな、これは。

旧ソ連で制式採用され、中国でもライセンス生産されていたAK-47は――さしてズバ抜けた銃じゃない。精度も悪く、設計にも欠陥がある。

だが、何はさておきアサルトライフルだ。もちろん連射ができる。比較的パワフルな7・62mm弾を使うせいで装弾数は若干少ないとはいえ、俺の拳銃より遥かに多い。素の俺でどうできる火力じゃない。

しかもAK-47は多少錆びようと、ライフリングが摩耗しようとか、こつちに都合良く故障してくれはしない。戦争を念頭に置いて作られた、信頼性の高い銃なのだ。

「……裏銃ウラチヤカだな？」

愚問ぐもんな気もしたが、一応、武偵ぶていとして指摘しておく。

理子りこのショットガンよりは通りやすいが、アサルトライフルは銃検じゆうけん——銃器検査登録を
通りづらい。それが1丁や2丁ならともかく、ここまで揃い踏みそろふみってことは……

公安こうあんの認可を取らずに裏社会を流れる、違法銃ひはんじゆうだろう。全て。

違法銃密輸ルートひはんじゆうみつうの王道、中国と通商つうしょうのある菊代きくよは——

「まだ登録してないだけよ」

答えるのもバカバカしい、という口調で俺に答える。

「じゃあ撃たないのか？」

「どうかしら」

などと、東大卒も吹き出すような会話をしていた俺と菊代の視界に——

「……遠山とあやまくんっ……！」

ホスト風の幹部に小突こづかれながらリビングに入ってきた、萌もえが現れた。

「萌……！」

俺のもとに駆け寄ってきた萌は、後ろに叫された手の親指同上を結束バンドケイブアルタイで縛しばられて
いる。人の手を最も簡易に、しかし確実に縛るやり方だ。

テンパっているのか、俺にぶつかってその場に尻しりもちをついてしまった萌に——

「酷いことされなかつたか」

俺は片膝をついて目線を合わせ、落ち着かせようと穏やかに話しかける。

「う、うん……私は何もされなかつたけど……」

「藤木林たちは今、病院だ。大丈夫。死んだりしない」

俺の言葉に、優しい萌はホッとしたような顔をして……菊代は「当たり前でしょ」と、不機嫌そうに溜息をついてる。

「——菊代。これは立派な未成年者略取・誘拐罪だぞ」

「ケーブル留めで遊んでたら、絡まっちゃったただけなの？」

この期に及んでまだトボケる菊代に——俺が本気で怒った顔を見ると、

「だ、だって……この子が先に、アタシに掴みかかってきたんだもん」

菊代は俺に嫌われたくはないのか、顔を伏せて上目遣いで言い訳してくる。

「こないだ喫茶店でお喋りしてる時、アタシがちょっと遠山との男女関係をフカシて話したらさ……『ウソよウソウソウソつき！』とかって。組員の前だったのに」

などと言う菊代を、萌が——ぎろっ！

萌らしからぬ怒りの表情で、睨み上げてる。

「だ、だって、あれはあなたがあんな、え、え、エッチな事を言うからっ！」

……な、何？

菊代お前、俺とのことを萌に何て言ったんだ。

「――一部ホントだからね。昔の話だけど」

どん、と菊代は割と平らな胸を張り――

萌は一瞬青ざめて、あわわ……という表情で俺を見てきたが……

実際、昔よく菊代とそのグループに騙だまされて保健室やら理科準備室やらにおびき出され、ヒステリアモード化させられていた俺は……め、目を逸そらすしかない。萌から。

すると萌は菊代に向き直り、むうー！

という顔でまたガンを飛ばしてる。極道ごくどうの女組長さんに。

こ、怖い物知らずだなあ……萌は。

しかしこの件、2人の間には単なるケンカ以外にも何かの私怨しえんができてたっぽい。

それも明らかに、俺関連で。

ますます責任を感じさせられるなあ、これ……

などと思っていると――ぎし。

ソファソファーから、幹部くわんぶの東大卒とうだいが立ち上がった。

そして「縛しばれ」と周囲に命じて……俺と萌を、今度は長いケーブルで背中合わせに縛り上げた。ホスト風が笑顔でやってきて、俺から銃とナイフを取り上げていく。

案あんの定じよう、只ただでは俺を帰してくれないみたいだ。

ここまでは想定範囲だが、ここからは——菊代との交渉だな。
こっちには材料がある。俺そのものだ。

菊代が萌を捕らえたのは、俺が目当てだったみたいだからな。

なので俺は、菊代が俺に何をさせたいのか、かなりの所まではしてやる覚悟で聞こうとすると……

「姐さん、銃はお持ちですか？」

東大卒が菊代にそんな事を聞き、

「ん？ ないわ」

と答えた菊代の頭を、いきなり後ろから——
がしッ！

ホスト風が掴んだ。

「——!?」

眉を寄せて周囲を見回す菊代に、東大卒がニヤニヤ笑ってる。

そして組員たちは……目を丸くしてる菊代を、俺たち同様ケーブルで縛り上げてしまおう。
どんっ、と俺の横に突き飛ばされて座らされた菊代は——

「お、お前たち……ッ……!!」

とうとうゲラゲラ笑い出した東大卒とホスト風を睨み上げてる。

セツトの崩れた髪を、かき上げる事もできずに。

「悪いな姐さん。そのボウヤがここに來た時点で、アンタは親分じゃないんだ」

——クーデター……かよ！

マ……マズいぞ。このタイミングでのこれは、想定できてなかった。

菊代との交渉によって脱出するルートが、断たれた。

「知らないとは言わせねえぜ。女、それもガキが組長とか……俺らがどんだけ笑われてきたか。あーあ。今まで俺、マジでキツかったよー」

「でもまあ、姐さんが全く役立たずだったワケじゃないですよ？ それはそれで警察の目も緩ゆるくなったし……先代は偉大な方でしたからね。その娘って事で色々仕事シノギをくれた古い連中もいました。でも、そのセンも要らなくなったって事です」

東大卒は細葉シガリロ巻に火をつけ、フーツ、と菊代の顔に煙を吹き下ろす。

「俺らには太ぶつとい中国ルートがあるからなあ、今や」

「それを組のためにせつせと作ってくれたのも、姐さんですけどね」

爆笑する、この2人——だけじゃない。幹部連中は、みんな反乱に賛成したんだろう。あるいは、させられた。だから、いないんだ。

（今にして思えば、その予兆は……あつた……）

俺も、あの千石せんごくの紅寶玉レストランで——違和感は、感じていたんだ。

菊代きくよに葉巻に水をかけられた東大卒とうだいつも、煙管キセルの始末をさせられたホスト風も——少しも怒った素振りそぶりがなかった。言うことを聞きすぎていた。何かを隠してるかのように。

自分と遠山とやまとを2人にしろ、という菊代の命令が下った時も……

みんな、いなくなる足取りが速すぎた。あの時の俺われの戦力を把握しつつも、菊代の身の安全を全く考慮こうりよしていなかった。警戒心がなさ過ぎた。プロなのにだ。監視も無かった。それはつまり……

大事じゃなかったのだ。菊代は。彼らにとって、もう。

あの場で彼らがよく見ていたのは、むしろ——

「で、姐さんあねには最後に……調子にはかなり波があるみたいですけど、この危なっかしいボウヤ——遠山君を釣つってもらいました。私たちだけじゃ拉致らちれない器うつわの子ですからね。いやア、猴先生こみ、喜びますよ」

中国側が欲しがってる——戦闘員の……俺……！

「遠山キンジクーん？ 知ってるウー？ キミはこれから香港ホンコンの黑社會マフィアに売られちゃうんだよー。でも、お友達に自慢できるよ？ すんげえ高値でだから」

だが菊代、つまり女性との会食に意識を向けていたヒステリアモードの俺は——紅寶玉ルビーでの彼らの不審さも、軽視していた。

（未然に防げたハズだったのを放置して……これも、俺が蒔いた種だったのか……）

何やってんだ、俺は。

一般人になろうとした途端^{とたん}、カタギに迷惑ばかり……かけて……！

「日本にはオマケという文化がありますからね。この可愛^{かわい}い2人も無料で付きます」

「その前に、今までの気晴らしをタップリさせてもらうけどな。姐さんにはよォ」
べろん、とピアスのついた舌を出したホスト風に言われて……菊代は……

……顔を伏せて、すんっ……ぐすんっ……

泣いて、いた。

ぼた、ぼた、と、床に大粒の涙をこぼしながら。

それこそただの、少女のように。

菊代自身の落ち度も無かったとは言えないが、これは……憐^{あわ}れだな。

しかし、さて、どうしよう。

どう見ても詰^{つま}んでるよな。こっち。

『オマケ』を解放しろとか条件出して、おとなしく行くか？ 俺。香港に。

と、その時――

「――おい兄貴」

という姿無き声^{こゑ}が室内に響く。

それに飛び上がったヤクザたちは、幹部も組員も辺りをキョロキョロ見回してた。

俺も目を丸くして顔を上げ、

「き……気づかなかったぞ。ジーサード。また尾けてたのか」
その声の主に、語りかける。

「兄貴、かなめばっかり見てたろ。二重尾行ぐらい気付けよ」
と、少し拗ねたような声で言う透明ジーサードは、ひよい、と――
涙目を大きく見開いた、菊代を抱え上げた。

まるで、菊代が急に宙に浮かび上がったように見える光景だ。
歩く速度で宙をフワフワ離れていく菊代に……

ヤクザたちも、萌も、ただただ呆然と固まってしまっている。

「どう尾けてたんだ。参考までに教えろ」

「電線の上を歩いた」

「ちつとも参考にならなかったな……で、なんで菊代を優先するんだ」
などと虚空というか透明人間状態の弟と語る、俺のケーブルは――
既に今さっき、ジーサードが切ってくれている。

動けるぞ。とりあえず。

「美しいからな。剥がして、いただくぜ。あと今日は寒い。兄貴も少しは動きたいだろ」
などと――

ジーサードは、窓際まで運んだ菊代を縛るケーブルを切り、和服の帯を……

……つてお前、な、なんで解いてんだよ！ シュルシュルと！

「えっ……なにこれっ……い、いやっ……！」

真っ赤になつて慌てる菊代は、その空中から——帯と改造和服を空中に残しつつ——投げて広げられる巻物の芯みたいに、ぐるぐるるっ！ と、こ、こっちへ……！

「——きゃあああッ！」

「——うおッ！」

どしんっ！

俺に、ぶつかった。菊代が。

やたら高そうな、真っ赤で、刺繍の向こうが透けて見えるタイプの——大人っぽい、ビックリするほど布地の少ないランジェリー姿で……！

これには一同、また心臓を破裂させそうなぐらい驚いてる。

——ドクンッ——

だが一番心臓に来たのは、俺だ。

これは菊代も知ってる事なので、なぜ彼女が今日つけていたのかは考えたくないが——俺はランジェリーという武器に対しては、赤に弱い。

あと白。あと黒。



これら三原色に加え、最近、金色にも弱い事が判明してきた。

……よく考えたら何色でもいい気がしてきた。節操ないのかな。俺。

「い、いやっ……！」

悪代官に脱がされる町娘のシステム、その空中バージョンで瞬時に下着姿にさせられた

菊代は、その体と胸を手で要所要所隠そうとしてる。

だが到底、その全身を手だけで隠しきれぬワケもない。

「あれっ、よかった……ケールブルが切れてるよ！ 遠山君のも！」

などと萌が空気の読めない事を言ってくれちゃったので、動けないフリもここまでだ。

俺は、立ち上がり――

ジジッ……ジジッ……と、明滅する蛍光灯のような音と共に姿を見せた……ジーサード

の……ど、どこからツツコみやいいんだ。我が弟の。

「いい西陣織の布だ。見る兄貴。この万寿菊柄なんか、すげえアートだと思わねえか？」

光屈折迷彩を脱いで、菊代の美しい和服を無邪気な笑顔で掲げるジーサードは……

色メガネのようなH M Dをかけ、例のプロテクターも完全装備した上で、レオン

たちから俺経由でもらった特攻服のコートを着ていたのだ。

そういえばジーサードは、その特攻服を気に入ってたみたいだった。

まあ、今日に限っては……許す。それを着て戦え。

今からある意味、レオンたちの用い合戦も兼ねて一暴れするんだからな。

菊代は、さっきまで自分だった組員たちとジーサードを見回している。

その肩が、小さく震えていたので……

「……菊代。俺が前に言った事は、正しかっただろう？」

俺はそっと、その乱れた髪を整えてあげながら微笑んでやった。

「——ヤクザは信用できない、って」

ウィンクしてやると、菊代は——真っ赤になりつつも、分かったみたいだな。俺が君の、正義のヒーローに変身した事を。

その辺りでようやく我に返ったヤクザたちが、

「てめえー！」「このガキイー！」「どこの族だァー！」

——バババババババツ！

ジーサードに向けて、轟音とマズルフラッシュを迸らせた。

だが、ギギギンギンツ……！

弾という弾が、漆黒のプロテクターを貫けない。

逆に、バカンツ！ ビシツ！ ジーサードが『捻転』——俺の『螺旋』と酷似した技で

Uターンさせた銃弾が、AK-47を次々に破壊していく。

戦い慣れてるな、ジーサードは。アサルトライフルと。トリガー周りや弾倉の付け根と

いった急所を破壊して、的確に射撃機能を奪っている。

「な・つ・て・る・み・た・い・だ・な、ジーサード」

「ならなきゃ失礼だぜ。ルノワール、景德鎮窯、ジンダーチエン、たんけい、エミール・ガレによ」

リビングの油絵、壺、つぼ、仏像、ランプを指して嗤うわらジーサードは、がすんっ！

ドアをその周囲の壁ごと蹴破けやぶつて、窓から見えていた庭に降りていく。

しかし……美術品を見ると、なっちまうのか。困った病気の持ち主だよな、お前も。

「あの女で、兄貴もなれたんだろ？」

「ああ。ある種、焼けぼっくりに火が点いた形だな」

と、俺は……

菊代と萌を庇かばいつつ、とりあえず硝煙しょうえんのニオイが満ちた室内から庭へ避難させる。

雪の積もったこの庭を抜ければ、門だ。

まずはそこから、彼女たちを逃がそう。

「——お前らマフィアなんだろ、終わりとは言わせねえぞ！ 戦えるヤツ、出てこいや！

兄貴の手前、命タマまでは取らねえからよオ！」

菊代の服を松の枝に投げたジーサードは、世界中で悪党狩りするのが趣味の男だ。ていうか最初から思ってたが、言葉遣づかいが荒いよな。うちの弟は。

これじゃどっちがヤクザか分からんぞ？ 明日から日本語講座をしてあげないと。

「こ、殺せ！ たった2人だ！」

東大出てるのに学習能力の無いノッポの幹部が叫ぶと、ゾロゾロ……時代劇の終盤みたいなノリで、まあ出るわ出るわ。揃って怖面の皆さんが。手に手にシヨットガンやら短機関銃やらを携えて——50人は登場したな。散開の仕方から見て練度は極めて低いが、数が多い。菊代と萌を守りながら退避するには、少し面倒だ。

しょうがない。

これも外に出た途端に気づいてしまった、もう1人の味方にも——お力添え願うか。ジーサードがヤクザたちと戦い始めた音を背に、俺は……

「……ああピンチだ。でも萌、菊代。あそこにお星様が見えるだろう。お祈りしてごらん。

『助けてください』って」

笑顔の俺は、菊代と萌の肩を左右の腕で抱き寄せ——

自分の左右の頬に、2人の頬をほとんどくっつくほどに近づける。そして空に輝く1つの星を、指と視線で示した。

「乙女の祈りは、星に通じるものだからね」

「!?」

「!?」

性格は違えど、2人は2人とも女の子のハートを持つてる。

この俺に「さあ」「祈って」とそれぞれ囁かれて——かあああ、と、赤くなってるよ。こんな時、こんな状況でも。はは。可愛いもんだね。

「……お、お星様……助けて……！ 遠山君を助けてくださいっ、わ、私はどうなってもいいから……」

などと祈りつつ、チラッと一瞬俺を見た萌。

今の俺には分かるが、君は少し策士のケがあるね。

今後あまりそこを伸ばさないで欲しいな。俺は、女性の策に弱いから。

「あ、アタシだって……自分なんかどうでもいいッ。でも、と、遠山は……助けて、お、お星様……？ お星様っ……！」

そして萌に対抗するような事を言う菊代。

俺は君を大人っぽい子だと勘違いしてたようだが——

それは君が複雑な家庭環境で生きる中で被った、仮面だったんだね。

目をギュッと閉じて祈る君の横顔には、どこか幼い、純粹無垢なものさえ感じるよ。そして——さっき俺が示した星がどんどん近づいてくる事に2人が気づいた辺りで、

「さあ、星の女神——双剣双銃が来るよ」

うわ。言いながらだけど、いま聞こえた。

バカキンジいー！

という、女神様のアニメ声が。こんなに遠いのに、よく見えたね。

——アリア。

そう。それは星ではなく、平賀^{ひらが}さんに造り直してもらったらしい……ホバー・スカートという飛翔^{ひしょう}ユニットで飛んできた、神崎^{かんざき}・H・アリアだったのだ。

あーあ。とうとうバレたらしいね。俺^{おれ}の家出^{いけだ}が。

トレードマークの二丁拳銃^{ガバメント}を構え、満月を背に滞空してるアリアは——

「会いたかったわよキンジイッ……ギリギリ」

犬歯^{けんし}をギラつかせて歯ぎしりし、赤紫色^{カメリア}のツリ目で俺^{おれ}を睨^{にら}み下ろしてる。

「俺に会いたかった？ 奇遇だね」

「——何がよ！」

「俺もアリアに会いたかった」

俺が先制打のウインクをしてあげると、バリバリバリッ！

庭^{ツインド}を広範囲に空襲するガバメントから、薬莢^{やつきょう}が金色の雪のように撒^まき散^ちらされる。

怒りの.45ACP弾^{だん}が、ヤクザたちが空へ向けた銃を彼らの手から撃ち落としていく。

（さすが、ローマ武偵^{ぶてい}高経^{こうけい}験者^{けんしや}。暴力団^{あんちま}狩^{マフイア}り慣^なれしてる）

敵の発砲をヒラリヒラリと空で躲^{かわ}しつつ、アリアはショットガンやアサルトライフル、

サブマシンガンといった危険度の高い銃をまず手際よく破壊してしまう。

時々左右の腕がクロスするほどじゃんじゃん撃って敵の火力を奪ったアリアは、空中でくるくるすぽっ。拳銃けんじゆうを指で回してから器用にホバー・スカートの隙間すきま——スカートの中、ホルスターに収め、続けて二刀流モードになって降下してくる。

その憤怒ふんぬの形相ぎようそうを、萌もえと菊代きくよを抱く俺に向けて。

「さて。アリアは、誰だれに聞いたのかな？」

「匿名とくめいの電話があつたのよ。代理人が連絡文を読み上げる感じだったけどね」

告げ口した者は……

少し、手が込んだ事をするタイプか。

うーん、誰だろう？

「ていうかキンジあんた、何やってたのよっ」

「ちよっと、社会見学をね」

「社会見学……ねえ」

アリアは呆あきれたような顔をして、こっちを遠巻きに囲むヤクザたちを見回す。

「じゃあ一般市民やってたの？ あんた」

「そのつもりだった」

「で、一般人のカノジョまで作ってたってことッ？」

「どうやらそこに怒ってたらしいアリアが、萌と菊代に殺人的な視線を向けるので——俺は萌と菊代から手を離し、西洋人みたいに両手を空に向けて『やれやれ』の仕草。」

「——そんな事したら、アリアが一人きりになってしまುದろ？」

などと言われたアリアは「ぶっ！　ぷえ！」と何だか分からない発話と共に、ぎゅいつ。いつもの超特急赤面を見せて、わたたたっ。刀を落としかけてる。

俺がそれをキャッチしてアリアの手に握り直させてやると——

「て、ていうかあれ！　ジーサード！　あんたの味方してるみたいだけどあれ何っ！」

あ、話題逸らした。視線と共に。

「説明が難しいんだが、今はとりあえず協力してやってくれ」

と、告げた俺に——

アリアは「ふーん」と、アリアらしい大ざっぱさで俺の弟を味方認定してくれてる。

「じゃ、ウジャウジャいるのを掃討するわよ。盛り上がってきたわね」

などと好戦的な事を言うアリアは……「あ」と何か気づいたような顔で俺を見上げた。

「キンジ。これ、あとで料金取るわよ。一般市民を助けるのは武偵の仕事なんだからね」

なににせよ、俺に会えたのが本当に嬉しそうなアリアは——

——ぱちん、とウインクを返してきた。

1時間ぐらい礼賛したくなるような、可憐なウインクを。

「でもまあ、知り合いだから割引価格にしてあげるわ。キンジ」

ジーサードには悪かったが和服は返してもらって、萌と菊代を門の外へ避難させてから――敵は低レベルとはいえ、ヒステリアモードの俺はアリアを守ろうと庭へ戻る。

だが、ヤクザはほぼ全て^{すべ}ジーサードとアリアが片付けた後だった。

アリアがワイヤーで足を縛り上げたヤクザたちの哀れな姿に苦笑いしつつ、壊れた銃、折れたり曲げられたりした刃物の散乱する庭園を抜ける。

その先、邸宅の前では……

泡を吹いた東大卒^{とうだい}が倒れた横で、今まで隠れてたらしいホスト風が、

「お、お前ら一体何なんだよ……！ お、俺は今、副組長だぞッ！ 分かってんのか！」
膝^{ひざ}をガクガクと震わせながら立ち、アリアとジーサードを威嚇^{いかく}してた。

さつき取られた――俺の、銃で。

だが威嚇は威嚇になってない。

「あれキンジのベレッタでしょ？ なに取られてんのよ」

「一応、壊さないで置いてやったぜ。兄貴は貧乏だからな」

アリアたちはすっかり『もう片付いたよ』って顔で俺に語りかけてくる。

ジーサードなんか、小指で耳掃除してるほどのリラックスっぷりだ。

「帰れエ！ 殺さないでやるからもう帰れよオ！」

無様に喚くホスト風は……

適切なターゲットが見つからず、銃口を右往左往させてる。

とりあえずジーサードやアリア、そして俺を撃つてもムダで——逆に、とっちめられる事までは理解できてゐるみたいだな。

「ああ、帰るよ。貸したものを返してもらったからね」

銃を紛失したらコトなので、俺はホスト風に歩み寄り——かけて、やめる。

……背後で困った事が起きてるのに、気づいたからだ。

戻ってきてる。

萌と、菊代が。

（何でだ……ッ）

という俺の疑問に答えるように、

「——と、と、遠山君を撃たないで！」

低木の陰を這うようにして回り込んでいた萌が、姿を現した。

その手には……

（……銃……！）

オートマチック拳銃がある。

ブローニング・ハイパワー。

ベルギー産の銃。堅実な造りで、比較的軽量。そして何より複列弾倉ダブルカラムなのにグリップがスリムで、東洋人の手に収まりやすい。日本でも女性に人気のある銃だ。

萌は……手もブルブル震えてるし、立ち方スタンスや持ち方ホールドもなっちゃいない。

だが、撃てるぞあれは。安全装置セーフティが解除されている。

——菊代が渡したんだ。庭のどこかに隠していた、自分の銃を。

萌が向けてきた銃口に慌てるホスト風に、

「あの娘は正真正銘のカタギだよ。こら、彼女に銃を向けるな。撃つのは組の御法度ごはつとよ。お前はそんな事も忘れたのかい」

そんな事を言いながらの菊代も——

さく、さく、と雪を踏みならし、俺の後ろから歩いて出てきた。

そして俺の前、左胸を守るような位置に出る。その手には、何も持っていない。

「撃ちたきゃアタシを撃ちな。そうすりゃ、猴先生まけいせんにも示しがつく」

「よせ、萌……菊代！ どうして逃げなかったんだッ！」

俺が2人に叫ぶと……

「だ、だって、私もそのピンクの女の子みたいに……遠山君を、守りたい！」

萌はアリアに嫉妬しつとしたような一瞥いちべつを送ってから、両手持ちした銃を握り直にぎしてる。

俺おれの脳裏のうりに、レキの語ったウルスの諺ことわざ、その後半——『狗いぬを狼おおかみにしてはいけない』——
がフラッシュバックする。

やめろ萌もえ。その引き金ひねを引いてはいけない。お前はあのコリーと同じ、愛玩犬あいがんけんのままでもいいんだ。俺なんかのために、狼の世界——こ・っ・ち・側・に足を踏み入れてはいけない。

お前は、ただの女の子。こっちの世界で生きていける人間じゃないんだ。
だから撃つな。撃つては、いけない……！

「——これはケジメだよ。遠山とやま。中国人はけくないんだ。ここまでの事が起きたからには、あのバカたちが言い訳しようにもスケープゴートの首が要るもんさ」

「……菊代きくよ……ッ」

「それに遠山。アンタを守りたいのは萌だけじゃない。昔から迷惑ばかりかけてきたのに、さつきアタシを守ってくれて……嬉うれしかった。やっぱりアンタは——アタシのヒーロー。形だけになっちゃうけど、これで借りを返すよ」

背中越しに語ってくる菊代の声は、落ち着いている。死を覚悟した声だ。

菊代は……死んで詫わびようとしてるのだ。俺に。

中学時代に俺を利用していた事から今回までの、全すべての事を。

萌。菊代。2人が同時に、別種の危機ひんに瀕ひんする中——

「菊代オッ……てめエ……！」

萌の弾たまが当たる可能性は低いと判断したらしいホスト風は、菊代にベレッタを向けた。照星しょうせいと照門しょうもんを合わせて、頭部を狙ねらっている。

お前……撃つのかよ。丸腰の女を。

それも、菊代は今までお前らを食わせてくれた女じゃないか。それを……！

「……ッ……！」

これは――

複数射撃線状況。

複数の人間が銃を持ち、互いに射撃線を張り合い、身動きが取れなくなる難しい事態だ。こういうケースの鉄則通り――アリアもジーサードも、すぐには動かない。だが、その幹部は菊代を撃つぞ。それももう、数瞬後には。

「――オラァァァァッ！」

ホスト風が叫んで勢いをつけ、トリガーに力を込める。

（どうする。どう切り抜ける――！）

今の俺には銃もナイフもない。

それに加えて、銃口を向けられた菊代を守らないといけない。身を挺ていして守るにも、もう前に出る時間すらない。

打開策を求めて、俺の脳裏を無数の記憶がよぎり――

すぐさま、ジーサードに『B』とマバタキ信号を送る。

もうこれ以上、マバタキする時間すらない。

アリアには『俺を信じろ』という視線だけを送り——次の瞬間、ほぼ同時に——

——パパパパッ！

それぞれバラバラの方向を向いた、5つの銃口が光った。

叫んだ幹部のベレッタ。叫び声で反射的に引き金を引いた萌の、ブローニング。白銀と漆黒のガバメント。ジーサード流の不可視の銃弾で発砲された、USP。

刹那、スローモーションになった俺の世界で——

距離的にまず、ホスト風の腹に向かって飛ぶブローニングの弾がジーサードの銃弾弾き……銃弾撃ちで、逸らされる。

続けてアリアの左右2弾が、まず幹部、続けて萌の服の袖を貫通し……大きく払われたそれぞれの手から、巧みに銃を放させる。

そして——

ベレッタからこつちへと、赤熱した9mmパラベラム弾が迫ってくるのが見える。狙いは、正確だ。このままなら菊代の眉間に当たる。

——ッ……！

菊代は俺の左胸——心臓を守るような位置にいる。

位置的に、左腕を菊代の前に突き出す事ができない。

俺が咄嗟とっさに出せたのは、カラの右手だけだ。

片手では、菊代の肩越しに銃弾逸らしをする事もできない。

右手で僅わずかに逸らせても、菊代の目に当たる。体勢的に、螺旋トルネードも不可能だ。今までの、どの技でも守れない。

だから俺は――

左腕で菊代を守るように抱き寄せながら、右手で――！

「……」

辺りが――

静かに、なる。

全員が、俺を驚愕きょうがくの表情で見ている。

銃を失ったホスト風と萌も、発砲直後のアリアとジーサードも。

目を閉じて死の瞬間を迎えようとしていた菊代も……自分が俺の左腕に抱かれて生きて
いる事に気づき、キョトン、と至近距離から俺の顔を見上げてきた。

「……」

とうとう……

やつちまったな。

いつか出来てしまふんじゃないかと我ながら内心怖れてた、技を。

こんな事やっちゃったたら、理子じゃないけど完全に人間離れ人間。さよなら人類だ。

しかも、目撃者多いなー……今回。

と、俺は自分で自分に苦笑いし……

「――熱すぎだ、このカイロは」

握っていた弾丸を、雪の足下に捨てる。

――銃弾掴み。

原理的には単純な技だ。

要は一瞬だけ、弾丸と同じ速度で腕を引きつつ……

あとは、そつと、つかむだけ。

爺ちゃんが箸とハエの速度を合わせて摘んだのをヒントにした、弾の運動エネルギーをゼロにする技である。

腕は全身連動技・桜花の逆技、橘花で引き、回転もかけた。

とはいえ腕を音速で引くワケにはいかなかったから、弾丸の力は少し手の中にもらった。

だが、それもせいぜい時速100キロ分。野球選手が軽く投げる球ぐらいのスピードで、8gの弾丸をキャッチしたにすぎない。

腕自体が発生させた運動エネルギーは……婆ちゃんがやった秋水をこれも見よう見まね、

逆技にすることで打ち消した。だから足下には若干、俺がズリ下がった跡が残ってる。

その結果――

ハタ目には、単に俺が飛んできた弾を掴んで止めたように見えたハズだ。

菊代はもちろん、俺にもケガはない。

火薬の燃焼で熱くなった弾を掴んだから、手のひらに火傷をした程度だ。

でも、あー、水ぶくれになるなこの火傷。イヤだな。

「銃弾掴みは、俺もやったことがねえぜ」

軽ーくワンパン入れてホスト風を隣の部屋までブツ飛ばしたジーサードが、取り返したベレッタを俺に返してくれる。

「俺も、いま初めてやった」

女を撃てないであろうジーサードに、ブローニングの弾丸を処理させて……銃弾撃ちはたぶん出来ない（と思う）アリアに2丁の銃を処理させたのも、瞬時の判断だったな。

そして相変わらず、アリアも大した女の子だよ。ジーサードの銃口の向きから、自分がすべき事を直観してた。さすがはホームズ4世。

「どうやったんだよ兄貴。いま撃ってもいいか？ もっぺん見たらきつと俺もやれるから、

その次、俺を撃てよ」

「俺はお前とキャッチボールするつもりはない」

——銃は、女。

などと、大人の武偵^{ぶてい}は言う。たまに触れてやらないと、拗^すねて不調を起こすから。

そして俺^{おれ}は戦う日々から逃げるため、このベレッタを放置してた。今までの恩も忘れて。
(で……このお嬢^{べレッタ}さんに仕返しされた、ってワケか)

と、俺は拳銃^{けんじゅう}をホルスターに収めつつ苦笑する。

でも、ベレッタ。君の怒りは受け止めた。俺なりのやり方で。だからもう許してくれ。
ホスト遊びはこれっきりでいいだろ？

だって、俺が二度と放さないから。

などとそれこそホストみたいな事を心に呟^{つぶや}き、銃まで口説き出したヒステリア俺に……

「あんた……しばらく見ないうちに、ちよつと大人になった？ そんな顔してるわ」

ちよちよこやってきた拳銃娘が、ベレッタのセリフを代弁するように笑いかけてきた。
カンのいい、このアリアには……分かったみたいだな。

武偵高の外で、俺が——

自分が何者であるのか、悟^{さと}ったことを。

だがそこをイジられるのも恥ずかしいので、

「ところでアリア。この近所には俺の実家もある。だから一緒に帰って、アリアを家族に紹介したいんだけど——」

と、軽くカウンターを入れてあげると……

アリアは何を思ったか「えっ」と必要以上にこわばり、さささ。急に前髪を整え出した。

「——それは後日にしよう。まだ、これにて一件落着いてワケじゃないみたいだからね」

と、俺は菊代の大邸宅……

その、ここからだとか角度的に見えない屋根の上に視線を向ける。

——いる。

それも今度こそ掛け値の、本物が。

ずいぶん上手く気配を消してたが、この場が収まったのを察して……その大きな気配を、開放してきた。

ジーサードもそれに気づいて、俺と同じ方を見てる。

連れていくなら、こっちだな。

「アリアは女子2人……萌と菊代を、安全な所へ退避させてくれ。俺じゃ、詰めが甘くて戻って来ちゃうみたいだから」

「ふーん。萌、菊代、っていうの。この子たち。じゃあキンジ、後で尋問タイムだからね。そ、それとあんたの実家。い、行くから、ちゃんと紹介しなさいよ？ スケジュール空けとくから。リアルに行くからね」

怒ってるんだか嬉しいんだか分からない珍妙な表情をしてる、このアリアに——

「遠山君……な、何であんな危ない事したの……？」

「と、遠山……」

震えながら歩いてきた萌と、呆然としてる菊代は任せよう。

アリアも女の子だ。女性を、あの本物と戦わせたくない。

そしてさっきの事をストレートに聞いてきた萌には、

「臆病な小鳥たちを、ちよつと驚かせたくなつたんだよ」

囁くように告げて、ごまかしてから……

少し、厳しい目を向けておく。

「よい子はもうお帰り。そしてもう二度と、銃を持つてはいけないよ。その美しい手は、あんなものを握るためにあるんじゃないんだ。もちろん、女神様の手も美しいけれど」

と、萌に警告したが——アリアの手前、メッセージがぼやけた。どうかな。伝わったかな。

女神？ などと頭にハテナマークを浮かべてるアリアに微笑を向けていると——

「オイ兄貴。その辺にしとけ。嗤ってるぜ、向こう」

ジーサードが、屋上の方を向いたままイラッとした声をかけてきた。

どうも愛に飢えてるらしい弟の横に、俺は並び立ってやりつつ……

アリアたちが退避したのを確認してから、屋根の上——



本物たちの方へ、声をかける。

「いるんだろ。遊びたいのか」

しばしの沈黙の後……

「――是^{シイ}」

中国、か。

まあそうだろうとは思ってたけどな。

ただ、今のに答えたからには日本語が分かるみたいだ。

「俺^{おれ}がお望^{のぞ}みらしいが、俺は金輪際^{こんりんざい}お前^{まへ}たちと関^かわりたくない」

こっちの要望を伝えるが、返事はない。

今後、家や学校に来られても困る。

フツてやるなら、ここで、だな。

「行くぞ、ジーサード」

「ああ、二度と俺ら兄弟に関わりたくなくなるようにしてやろうぜ」

俺に正式に協力を求められたジーサードは、なんだか嬉^{うれ}しそうにいつてくる。

豪邸内に再び入り、彼らが借りていたと思われる中華風の部屋に入れば……

桃とバナナを食べた跡、それと、生レバーの刺身が少し残っている。

食器の数から見て、3人、か。

ハシゴを伝って、ジーサードと屋上へ上がると――

月光の下、雪の溶けつつある広大な瓦屋根の上に、いた。

俺の読み通り――3人。

「……………」

うち2人には、見覚えがある。

まず1人目は忘れもしない、曹操。

主に俺とレキに因縁のある、猛妹、炮娘、狙狙の三姉妹。そのどれかだ。長野刑務所に

入れられてたハズだが、1人脱走したのか。だが、メガネをかけたのはいたかな？

黒髪バージョンのアリアといった風体を、ちよつと可愛くもある清朝中国の民族衣装に

包んだココの横で……

「再会を心よりお慶び申し上げます。遠山キンジさん。ジーサードさん」

丸メガネの長身瘦躯が、恭しくお辞儀をした。これも、覚えてるぞ。

その張り付けたような笑顔。小さな丸メガネの下、開いてるんだか開いてないんだか
分らない細い目。煌びやかな刺繍の入った、漢族・文官の古典的な宮廷衣装。

これは空き地島で開催された『宣戦会議』、そこに来ていた、藍幫の大使……

確か、諸葛静幻。

菊代きくよが組んだ中国の大手つてのは——藍幫ランバンだったのか。世の中、広いようで狭いな。

……だが、

（そっち系は、ニガテなんだよな……）

俺おれが眉まゆを寄せたのは——

初見の、3人目。

ストレートの黒髪を足下ぐらいまで伸ばした、小五ぐらいに見える女の子。

名古屋武偵女子高のカットオフ・セーラー——あの学校の女子が『自分は撃たれない』という自己顕示じこけんじのために着る、丈があちこちやたら短い制服を着てる。

その股下またした・胸下は共に1cm。ヘソどころか胴体が丸出しの、とんでもないセーラー服だ。北風の中、ちよつとだけ膨らふくんだ、しかし明らかに下着をつけていない両胸が下3分の1ぐらいチラチラ見える。袖そでも短いから、若干日焼けした細い二の腕がほとんど露出してる。

だが、俺がそいつをニガテと断じたのは……彼女の露出度の高さのせいではない。

これは玉藻たまもフロ事件で100%完全に証明されたが、俺にロリコンのケはないからな。

——感覚的に分かるのだ。

人間じゃない、あれは。

女の子に化けてるだけだ。それこそ玉藻みたいに。

ていうか……にょろん、と、オレンジ色の細いシッポが生えてるしな。

常に見開いているような大きな紅い目には、表情が無い。だが、レキみたいに無表情な感じはしない。全ての事を悟っているかのような、超越的な雰囲気がある。

そんな、底知れぬものは感じるんだが……

たいした殺気は感じない。突っ立って、こっちをただ見てるだけだ。

俺とジーサード、ヒステリアモードの2人掛かりなら畳める相手だろう。

「ヘッ——そのガキンちよが藍幫の代表か。極東戦役の」

ジーサードも、注目すべきはあの少女だと分かったらしい。

俺たちが今巻き込まれている、この世の暗部で行われている国際的な抗争——極東戦役。そこでは総力戦になって大規模な被害が出ないよう、各組織の戦闘力に長けた何人かの代表だけを戦わせて決着をつけるのがルールだ。

「ええ、それはそうなのですが……」

彼女がその代表である、という旨の回答を諸葛がするや否や——ガシャ、ガシャ。

「俺は『無所属』から『師団』に変わってるからよオ。戦る理由はあるんだぜ」

瓦屋根を踏んで、ジーサードが前進した。

そもそも戦うつもりではあったので、俺もそれに続くと——

「よッ、よせ遠山の。お主、仏と戦うつもりか」

服の中から、震える声が出た。

お守りに化けさせて首から提げていた、玉藻の声だ。

俺は立ち止まり、

「？俺が、何と戦うつもりだつて？」

「——あ、あのお姿は猴コウ。日本の鳳オウトリと同レベルの、化生界けしやうの巨頭きやうとうじゃ。天竺てんじくで闘戦勝仏とうせんしょうぶつと相成あいなられた、しょ、真正正銘の……」

「俺にはそうは見えないぜ。だから違うんだろ」

玉藻の心配性も、得体えたいの知れない相手と対峙たいじするものも、いつものことだ。

なので改めて踏み出そうとするが、

「やるとなったら謀反むはんじゃぞ！ あらゆる唐からの化生を敵に回すッ！」

玉藻がうるさいので……シャツから引っぱり出すと、ぽふんっ！

やたら慌てた表情の玉藻が、即座に姿を現して俺にしがみついてくる。

「——猴の前には、銃も刃物も意味を為なさぬ！ よさんかあお主ら！」

あまりにも玉藻が必死なので、歩みを止めた俺の斜め前から——

「ハハッ！ 銃？ 刃物オ？ そんなモンには最初はつめっから頼りやしねえよ。俺たちには、

音速おんそくの拳があるッ」

ジーサードは笑いながら、右拳を固め……ジャリッ。

姿勢を低くし、足を踏み固め、『流星メテオ』——ジーサード流の『桜花おうか』の構えを取った。

狙いは、猴。そう玉藻が呼んだ、藍幫ランバンの戦士。

——この時点で、ジーサードの勝利だ。俺の目にはそう見える。

だが、何だ……？ ココと諸葛しよかつも、何だか慌て出したような表情をしている。

「異教の神は殺してもいいんだぜ」

キリスト教徒クリスチャンのジーサードは、教会が聞いたら怒るような脅し文句おどをのたまって……
対する猴……その頭上に……な、なんだ？

金色をした、細かい光の粒が見え始めた。

その粒子が、どんどん増えていく。

回転している。今はもう、直径20cmぐらいの輪に見える。

それこそ、宗教画で天使や神が頭上に浮かべているような、光の輪のように――

「き、金箍冠きんこかん……ッ！ ——猴！ 鎮まり給ええーっ！」

玉藻が、絶叫ぜつきようした。

次の瞬間、

——パツ。

「!?」

周囲が一瞬、赤く光った。

音は、無かった。

猴コウの赤い瞳ひとみから、光の線――

レーザーサイトのようなものが、ジーサードの胴を通過するような形に光ったのだ。
ほんの、コンマ1秒ほど。

「……ッ……!!」

それだけで――

ジーサードが、その場に崩れ落ちる。声もなく。

驚愕きょうがくに見開かれたその目は、今、何が起きたのか全く分からなかったという表情だ。

そして、みるみるうちにその瞳孔どうこうが開いていく……!

口からは……血が……! それも致命傷を受けたのが、目で分かる量が、流れ出る。

「――ジ、ジーサード!」

何をされたんだ。今……!

ただ、何かが光っただけなのに。

まさか撃たれたのか。いや、ありえん。その堅牢けんろうなプロテクターは、銃弾なんかポップ
コーンみたいに弾はじき返かえす科学の鎧よろいだったハズだ。

「――ル・ラーダ・フォル・オル・オル?」

何だか分からない言語つづなを呟つぶやいた猴は――

小首かしを傾かげてる。紅あかく光る瞳を、こっちに向けたまま。

ココと諸葛も、今の光景には啞然あぜんとしている。

藍幫ランバンの一味は——制御、できてないのだ。あの得體えたいの知れない少女を。

この状況を把握するのに、ヒステリアモードの頭でも数秒かかった。

「逃げる遠山とおやまの！ ジーサードはもうダメじゃ！ 今のは、如意棒じょいぼうツ……レーザービーム

じゃー！ 儼わしにも防ぐ事ができぬ！」

——レーザー……!!?

そんなバカな。それを今、猴が瞳から撃ったのか!? 何の殺氣も、なかったのに……！
光速レーザービームの、攻撃。

だとしたら……音速じゃ刃はが立たないぞ。絶対、防ぐ事ができない！

实际いま、全く何の反応もできなかった。音速の銃弾にさえ対抗できる俺おれたちが。

「な、何なんだッ……アイツは……！」

俺はジーサードをすぐ助けたいのに、前に出られない。

猴の紅い目が、今、俺を見据みえているからだ。

玉藻たまもは犬齒けんしを剥むいて、涙目で俺に絶叫ぜつきようする。

「——さっきも言ったじゃろう！ 猴は闘戰勝仏とうせんしょうぶつ——孫悟空そんごくうじゃ！」

あとがき

はいどうも！ お待たせいたしました！

この小説はもちろん、外伝・4コママンガの原作も元気に書かせていただいております、
赤松あかまつでございます。

今回の12巻は、コミック版『緋弾ひだんのアリア』6巻、『緋弾のアリアAA』4巻、4コマ
マンガ『緋弾のアリアちゃん』と、合わせてなんと4冊の一斉発売！

いやー、アリア祭りですなこれは！

私は書くだけでなく白作を読むのも大好きな作者なので、楽しすぎ&はしやぎすぎで
何か新種のヒステリアモードが発動しそうです。フオオッ！ はいQ & Aコーナー！

Q..『赤松先生が一番好きなキャラクターは誰だれですか？』

このご質問、1人ではなく多数の読者さんからいただきました。これ、ラノベ作家への
質問数ランキング1位の質問かもですね！ ありがとうございます。

さて、ご回答ですが——「私はどのキャラクターも、等しく愛しています！」
うーん。我ながらすばらしい模範解答。どのキャラからも撃たれない。

しかし、これではガツカリされる読者さんもらつしやるかもですねえ。

なので、強いて挙げますと……『高千穂麗』^{たかちほうれい}というキャラクターがマイブームです。

えっ誰ソレ!? ——と思ったそのあなた、あとがきの冒頭でもご紹介しましたAAのコミックスをぜひご購読いただければと! その3巻から出てきます。

高千穂はいわゆるお嬢様キャラで、高飛車^{たかびしや}な美少女。武偵高^{ぶていこう}の1年生で、アリアの後輩です。ルガー・スーパーレッドホークで強力な^ぶカスール弾を撃ち、射撃の腕も確か。

CVRに勧誘されるほどの美貌^{びぼう}など、長所も多い子なのですが……プライドが高くて友達作りがヘタだったり、物事をお金の力で解決しようとするなど短所もあります。

こういう長所・短所のあるキャラクターを、私は好んで書きます。それってすごく人間的だと思うし、どう成長していくのか(自分で書きつつも)楽しみですからね!

原作にも実は彼女が一瞬だけ登場しますので、ぜひ探してみてくださいね。

『緋弾のARIA』も、もう12巻。

この本でのキンジのように——キャラクターたちが一步一步、皆さんと共にずっと成長していける事が、私は心から幸せです。

アリアも 12巻 ですよ!!



■アリアもついに12巻ですめでたい！
今回は新キャラもばーんと登場しまして
キャラデザ作業などが楽しかったです。
今までとちょっと方向性の違うキャラ
なのでご感想などいただけると
嬉しいです。

■ではまた13巻でお会いいたしましょう！

アリア

こぶいち先生 描き下ろしグッズが 当たる!

『緋弾のアリア』シリーズ 4冊同時刊行キャンペーン!!

対象商品 MF文庫J:『緋弾のアリア』12巻

アライブコミックス:『緋弾のアリア』6巻/『緋弾のアリアちゃん』

ヤングガンガンコミックス:『緋弾のアリアAA』4巻(スクウェア・エニックス刊)

上記対象商品のオビについている応募券2枚で
キャンペーン限定こぶいち先生描き下ろしグッズが当たります。

賞品

A
コース こぶいち先生描き下ろし
A3クリアポスター 200名様

B
コース 緋弾のアリア
豪華サイン色紙 5名様

C
コース 特製QUOカード 50名様

キャンペーン
対象商品の先生方による、
永久保存必須の豪華な
一品です!

【応募のきまり】上記、対象商品のオビについている応募券2枚(同じ書籍の応募券2枚以上・コピーは無効になります)を郵便ハガキに貼り、希望コース(A、B、Cのいずれか一つ)をご記入の上、郵便番号・住所・氏名・年齢を記入の上、切手を貼って下記の宛先までご応募ください。

【宛先】〒133-0033 東京都文京区本郷4-24-8 春日タワービル2F
株式会社ジェイピーエル

【『緋弾のアリア』シリーズ4冊同時刊行キャンペーン】係

【メ切】2012年6月30日(当日消印有効)

※商品の発送は2012年8月下旬を予定しております。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。※お客さまよりお預かりする個人情報、この企画の商品発送のみに使用させていただきます。それ以外の目的に使用することはありません。

『緋弾のアリア』原作イラストレーター

こぶいち画集

発売決定!!

2012年8月発売予定!!



MF文庫



緋弾のアリアⅫ

フォル・オブリージュ
狼狗に降る雪

発行	2012年5月31日 初版第一刷発行
著者	赤松中学
発行人	三坂泰二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 3-3-5
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2012 Chugaku Akamatsu
Printed in Japan ISBN 978-4-8401-4579-4 C0193

※本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、固くお断りいたします。

※定価はカバーに表示してあります。

※乱丁本・落丁本はお取替えいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話:0570-002-001

受付時間:10:00~18:00(土日、祝日除く)

この小説はフィクションであり、実在の人物・団体・地名等とは一切関係ありません

【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

あて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト
株式会社メディアファクトリーMF文庫 J 編集部気付
「赤松中学先生」係 「こぶいち先生」係

- ★スマートフォンにも対応しております(一部対応していない機種もございます)。
- ★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料待ち受けをプレゼント!
- ★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。
- ★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。

二次元バーコードまたはURL
より本書に関するアンケート
にご協力ください。



<http://mfe.jp/ywn/>